兵庫県文化財調査報告　第42冊

特別史跡
姫路城跡 Ⅱ

1987.3

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告第42冊

特別史跡
姫路城跡 Ⅱ

—兵庫県立姫路東高校プール改築
などに伴う発掘調査報告—

1987.3

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、姫路市本町68の兵庫県立姫路東高等学校プール改築などに伴う『特別史跡姫路城跡』の埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 本書を『特別史跡姫路城跡Ⅱ』としたのは、姫路城跡が広大な面積を有しているため、今後とも調査が実施され同名の報告書が刊行されることが予想されるからである。兵庫県立歴史博物館発行の『特別史跡姫路城跡』をⅠとし、本書をⅡとして通し番号を与えることにする。
3. 調査は、兵庫県都市住宅部営繕課の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査を実施した。整理作業は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。
4. 遺構の写真は、調査員が撮影した。図版１の航空写真は国土地理院撮影のものを使った。
5. 遺物の写真は、森　昭氏に依頼し撮影して戴いた。
6. 執筆分担は本文目次の通りである。
7. 発掘調査及び調査報告書作成に際しては、姫路市教育委員会山本博利・秋枝　芳両氏から種々指導及び助言を戴いた。記して謝意を表する次第である。また、本文中に使用した絵図については、姫路市所有の写真ネガを使用させて戴いた。
8. 表紙写真は1954年春の姫路城の写真である。瀬川カメラ店提供のものであり、使用を快諾された瀬川精一氏に謝意を表します。また第３図も同様である。
9. 調査に際して、基準点測量をオリエントサーベイ株式会社に依頼して実施した。
10. 本報告にかかる遺物・スライドなどは、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630－１）に保管している。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに……(渡辺)…… 1
　1．　調査に至る経緯…… 1
　2．　調査の組織…… 4
　3．　調査日誌…… 6

Ⅱ．歴史的環境……(池田・岡田・長谷川)…… 9

Ⅱ．調査結果
　1．　確認調査結果……(岡田)…… 15
　2．　層序……(岡田)…… 15
　3．　プール拡張部分（Ｃ地区）……(岡田)…… 17
　4．　体育器具庫部分（Ｆ地区）……(渡辺)…… 21

Ⅳ．出土遺物
　1．　土器……(岡田)…… 28
　2．　瓦……(森岡)…… 33
　3．　鉄器……(岡村)…… 34
　4．　弥生時代・古墳時代の遺物……(渡辺)…… 34

Ⅴ．おわりに……(岡田・長谷川)…… 37

挿図目次

第１図　調査地区の位置…… 2
第２図　姫路城跡航空写真…… 3
第３図　1954年頃の姫路東高校周辺…… 5
第４図　調査風景…… 6
第５図　調査地遠景…… 7
第６図　調査風景…… 7
第７図　埋戻し風景…… 8
第８図　姫路城跡の位置と周辺の遺跡…… 10
第９図　Ｆ地区東壁土層断面図…… 16
第10図　Ｃ地区東壁土層断面図…… 16
第11図　Ｃ地区第１遺構面遺構配置図…… 18
第12図　Ｃ地区第２遺構面遺構配置図…… 19
第13図　Ｆ地区遺構配置図…… 21
第14図　集石土壙(ＳＴ3001)実測図…… 22
第15図　井戸(ＳＥ3001)・土壙(ＳＫ3002)平面図…… 23
第16図　井戸実測図(ＳＥ3001)…… 24
第17図　溝(ＳＤ3001)遺物出土状態…… 25
第18図　溝(ＳＤ3001)実測図…… 26
第19図　石垣矢穴拓本…… 27
第20図　石垣矢穴…… 27
第21図　鉄器実測図…… 34
第22図　蛤刃石斧実測図…… 35
第23図　遺構形式過程模式図…… 38
第24図　姫路附近の古絵図(部分)…… 39
第25図　池田家・姫路城内侍屋敷図(部分)…… 40
第26図　元禄８年播州姫路城図(部分)…… 40
第27図　文化年間姫路侍屋敷図(部分)…… 41

表　目　次

第１表　　Ｃ調査区　第１遺構面直上出土釘計測表……35
第２表　　姫路城城下町関係略年表……44～48
第３表　　出土土器等観察表……49～54

図　版　目　次

図版１　　姫路城跡空中写真
図版２（上）　Ｃ調査区第１遺構面（北から）
　　（下）　Ｃ調査区第２遺構面（南から）
図版３（上）　Ｆ調査区全景（東から）
　　（下）　Ｆ調査区東半全景（南から）
図版４（上）　石組溝全景（北から）
　　（下）　石組溝全景（南から）
図版５（上）　石組溝遺物出土状態（北から）
　　（下）　石組溝・石垣の切り合い
図版６（上）　池状遺構底
　　（下）　Ｆ地区東半土層断面
図版７（上）　集石土壙墓堆積状況
　　（下）　集石土壙墓堆積状況
図版８（上）　集石土壙墓全景（西から）
　　（下）　集石土壙墓全景（南から）
図版９（上）　石組溝裏込状況・整地層断面
　　（下）　瓦溜め全景
図版10（上）　瓦溜め瓦検出状態
　　（下）　井戸・土壙全景
図版11（上）　井戸全景
　　（下）　井側全景
図版12　　ＳＫ3001出土遺物
図版13　　ＳＤ3001出土遺物
図版14　　ＳＫ1001・ＳＫ1002・ＳＫ1009他出土遺物

図版15　ＳＫ1002・ＳＴ3001・ＳＥ3001他出土遺物
図版16　ＳＫ1009・ＳＤ3001他出土遺物
図版17　ＳＫ1009・ＳＤ3001他出土遺物
図版18　ＳＴ3001・ＳＤ3001他出土遺物
図版19　ＳＤ3001他出土遺物
図版20　ＳＤ3001・ＳＫ1009他出土遺物
図版21　ＳＫ1001・ＳＫ1002・ＳＤ3001他出土遺物
図版22　ＳＫ1009・ＳＤ3001他出土遺物
図版23　瓦溜整地層出土軒瓦
図版24（上）　Ｃ地区第１遺構面出土鉄釘
（下）　古式土師器，蛤刃石斧

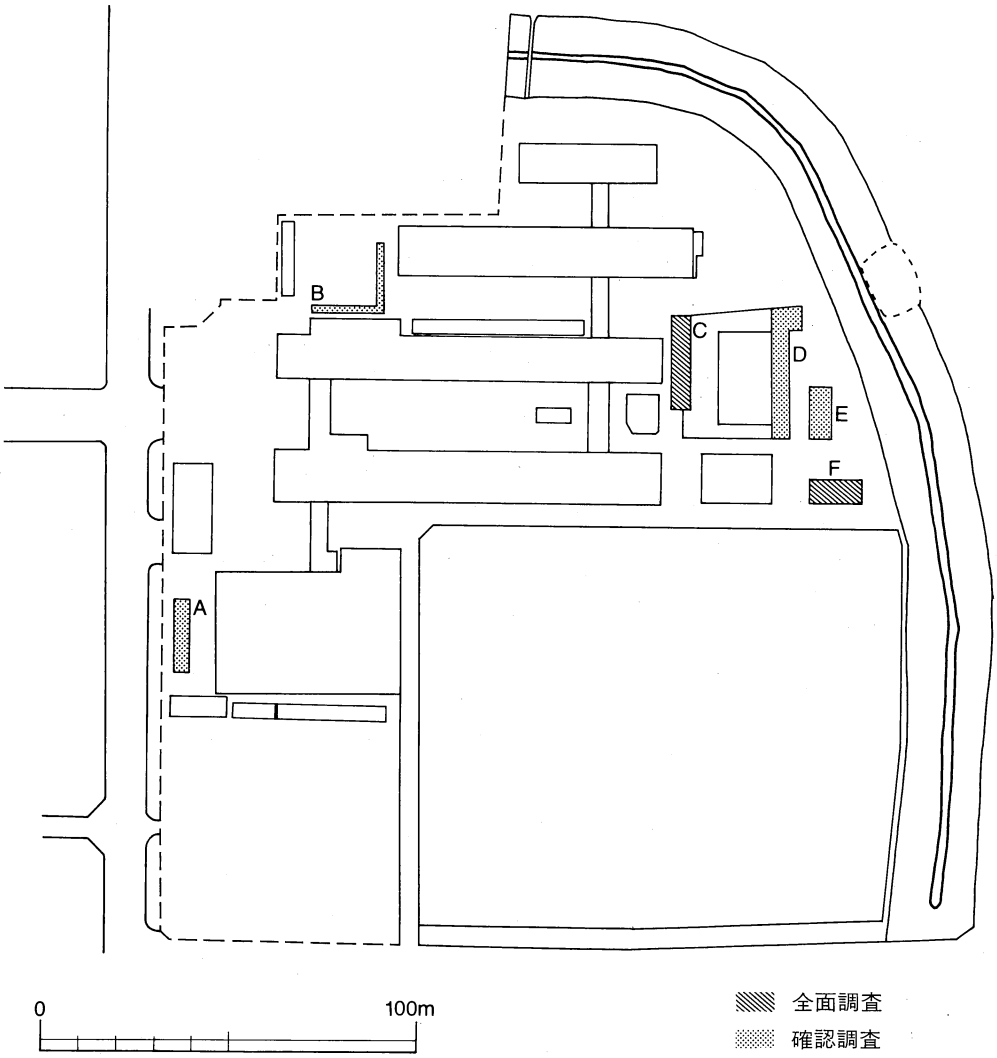
Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

姫路城は、池田輝政によって近世城郭の代表として築城された著名な城で、白鷺城とも呼ばれ親しまれている。姫路城跡は、昭和３年国指定され、その後昭和16・27・31・54年と追加指定され、昭和54年に一部が解除された特別史跡で約1,075,000㎡が国指定されている。現在、姫路市が管理する姫路城公園とその周囲の土塁に囲まれた中曲輪の部分である。特別史跡内は原則的に全域公園化の方向で行政指導が行われているが、公共機関で直ちに移転出来ない施設もある。兵庫県立姫路東高等学校もその一つで、他に定時制の兵庫県立姫路北高等学校・通信制の兵庫県立青雲高等学校と校地を共有しており、近年の間に移転は望めそうもない状況である。しかし、校舎の老朽化は進み、高校として最小限必要な建物や増設すべき施設もあることから今回の改築工事が計画されるに至った。策定段階から特別史跡内であることは十分周知されており、兵庫県教育委員会内で協議が重ねられてきた。現在の姫路市街地でもあり、さらに以前から利用され続けており、なかでも陸軍第10聯隊の施設によって大規模な損壊を受けている。そのため、史跡指定地内においても全て保存状態が良好であるとは言えず、地域により遺構の存在の有無は異なっている。さらに陸軍の建物基礎は、その部分だけを溝堀りしたものが大半で、全体を掘り下げたベタ基礎でないので、僅か数ｍ離れた地点で遺構の残存状態が異なっている。そのため、調査は確認調査から行うこととした。校地全域にわたって約50㎝以上の盛土層があり、コンクリート基礎なども随所に見られたので、重機を使っての調査となった。

改築計画は、いわゆる四者協定の適用により土塁裾から６ｍの距離を開けて構築物を建てなければならないことを考慮した上で、有効的な利用ができるよう計画されている。改築計画がなされたところは４ヶ所である。プール改築と体育器具庫・渡り廊下・部室建築の４ヶ所で、プールは東西に拡張するため、細かくは５ヶ所である。各地点の調査結果は後章に譲るが、重機を使用して確認したところ、プール西側（Ｃ地区）と体育器具庫(Ｆ地区)予定地区で遺構の在存が確認されているので、全面調査を実施した。全面調査地域にも旧陸軍の建物基礎やそれらに伴う攪乱層があり、全域が良好な状況を呈していたわけではない。

Ｆ地区では、幅１ｍ長さ14ｍのトレンチ調査結果から２面以上の遺構面が確認されたので７ｍ×14ｍの98㎡について全面調査を行った。その結果、明らかに姫路城跡の遺構が検出されたので、当初の協議の通り保存することを前提とした調査を終了したのち、川砂を入れて埋め戻し現状で保存を図り、グランドの一部として使用し、体育器具庫の建物予定地を別な箇所に求め



第１図　調査地区の位置

ることとなった。南側へは溝が延びていることが十分予想されたので、北側へ予定地を求め約110㎡の確認調査を追加した。Ｄ地区の確認調査で遺構面が認められなかったことからも北側を候補地として調査を行った。大蔵省・文化庁・兵庫県・姫路市の四者の協定により土塁から６ｍ離す制約があるため、建物の主軸方向を90°振り、南北に長い器具庫として活用することとなった。

C地区でも2面の遺構面を検出したが、土器廃棄土壙で時期的には遺構面は18世紀前半から19世紀前半のものである。遺構の性格も廃棄土壙以外確認出来ず、この部分に掘削を伴う施設が伴わないことから、十分注意を図って工事を進めることとした。

調査にあたっては、工事を施行する兵庫県都市住宅部営繕課と委託契約を結び調査を実施した。確認調査をはじめ、コンクリート除去などの作業は本体工事の中で行い、鈴木工業株式会社によって実施した。また、発掘調査については姫路市シルバー人材センターを通して作業員の方々を紹介して戴いた。調査に際して調査に従事して戴いた方々や工事関係者の方々や調査機器・器材の保管や休憩場所を提供して戴いた姫路東高校に感謝を表します。調査は、9月25・26日の立会調査を含め、10月1日から10月29日まで24日間を費やし、延100人の方々の作業員の協力を得、全面調査266㎡、立会調査413㎡の調査を終了した。

出土遺物は、コンテナに約90箱出土しており、大半が瓦だめ出土の瓦である。発掘調査期間中の雨天の日から水洗作業を開始し、昭和59年度には主として山陽自動車道現場事務所で水洗・ネーミング作業を行った。昭和60・61年度は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で継続して整理調査を行った。

第2図　姫路城跡航空写真

2. 調査の組織

(1) 昭和59年度発掘調査の体制

調査事務

社会教育・文化財課	課長	西沢良之
	文化財担当参事	大西章夫
	副課長	森崎理一
	課長補佐	和田富夫
	埋蔵文化財調査係長	櫃本誠一
	技術職員	大平茂

調査担当

社会教育・文化財課	技術職員	岡田章一
	〃	渡辺昇
	調査補助員	池田早恵（神戸女子大学文学部）

(2) 昭和60年度整理調査の体制

調査事務

社会教育・文化財課	課長	北村幸久
	文化財担当参事	森崎理一
	副課長	黒田賢一郎
	課長補佐	和田富夫
	埋蔵文化財調査係長	櫃本誠一
	技術職員	森内秀造
	〃	加古千恵子

調査担当

社会教育・文化財課	技術職員	岡田章一
	〃	渡辺昇

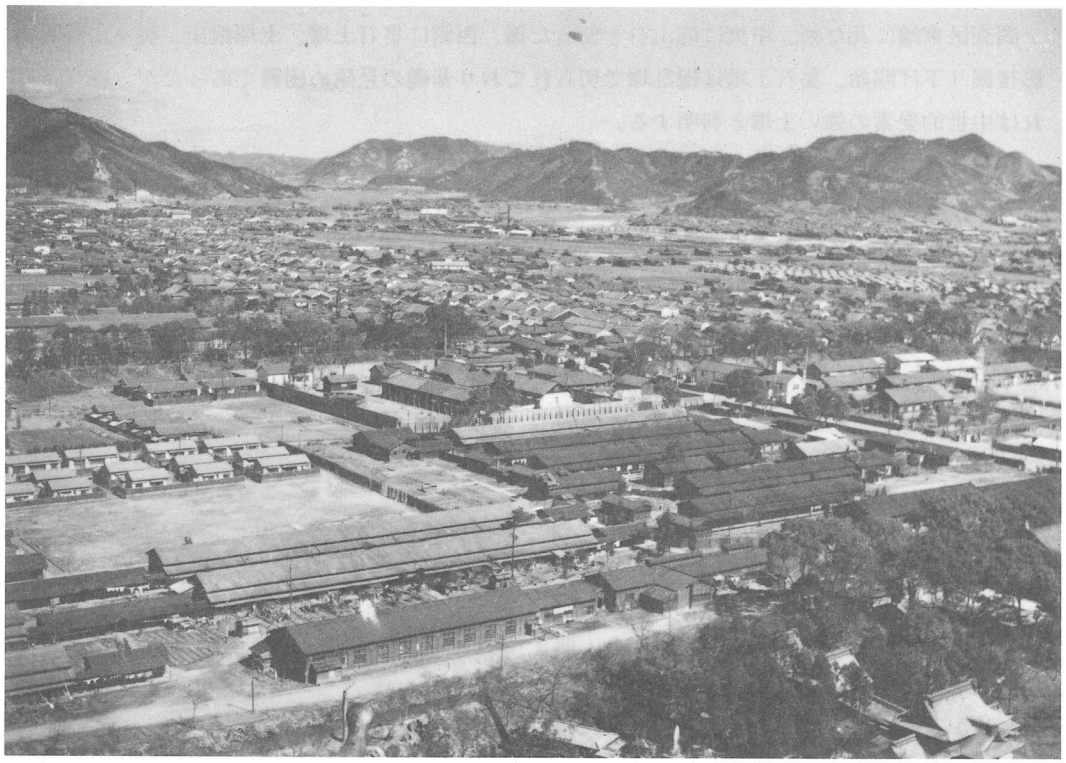
調査補助員　森岡みゆき、伴　悦子、西上知予子、岡村真理子
吉村　幸子、池田　早恵、池田　紀子、岡村　句美

(3) 昭和61年度整理調査の体制

調査事務

社会教育・文化財課	課長	北村幸久
	文化財担当参事	森崎理一
	副課長	黒田賢一郎

	課長補佐	福　田　至　宏
	課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長	大　村　敬　通
	主査	小　川　良　太
	主任	加　古　千恵子
	技術職員	渡　辺　　昇
調査担当		
社会教育・文化財課	主任	岡　田　章　一
	技術職員	渡　辺　　昇
調査補助員	森岡みゆき、伴　悦子、岡村真理子、池田　早恵 二階堂康子、池田　紀子、嶺村　昌美、阿部　一二 岡崎　輝子	



第３図　1954年の姫路東高校周辺（陸軍兵舎）

3．調査日誌

昭和59年９月25日（火）晴れ

Ｆ地区の立会調査を重機を使って行う。焼土をはじめ遺構面２面以上確認する。ただし、コンクリート基礎見られ全面に遺構面が残存している可能性は少ない。

９月26日（水）晴れ

Ａ地区立会調査。コンクリート基礎があり、それを除去すると砂層となり、遺構面存在しない。Ｆ地区全面調査部分盛土重機によって除去する。

９月28日（金）晴れ

現地にて営繕課・学事課担当者と調査方法などについて打ち合わせを行う。発掘器材搬入する。

10月１日（月）晴れ

今日から調査に入る。Ｆ地区の全面調査から開始する。発電機・ベルトコンベア搬入し遺構面まで掘り下げる。中央にコンクリートを含む大きな攪乱層も見られる。

10月２日（火）曇り

調査区東端に瓦だめ、中央に龍山石を使った溝、西側に集石土壙、土壙検出。個々に写真撮影後掘り下げ開始。集石土壙は攪乱壙で切られており基礎の見極め困難であったが、掘り下げれば中世的要素の強い土壙と判明する。

10月３日（水）雨

人力作業中止。プール拡張部分（Ｃ地区）のコンクリート割り継続する。プール東側立会いするが、遺構面残存しない。

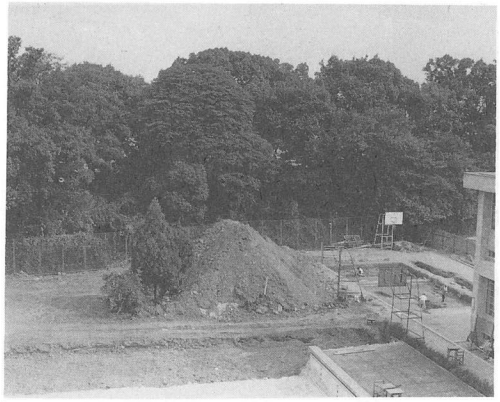
10月４日（木）曇り

Ｆ地区集石土壙写真撮影・実測後、土師器取り上げる。瓦だめ・掘り下げ継続。Ｃ地区西側立会調査を行ったところ、遺構面が見られたので南側から清掃開始する。Ａ地区土層断面図作成。

10月５日（金）晴れ

Ｆ地区溝清掃し写真撮影。瓦だめ継続する。瓦だめ上面には約10cmの整地層がある。上面から京焼出土。Ｃ地区断面及び平面清掃する。南半しか遺構面残っていない。Ａ地区埋め戻し。Ｂ地区立会調査するが、遺構なし。

第４図　調査風景



第５図　調査地遠景

10月６日（土）晴れ

Ｆ地区溝の瓦･土器出土状態実測後取り上げ。底まで掘り下げ継続する。Ｃ地区近現代の落ち込み見られる。遺構面清掃する。砂礫中から蛤刃石斧出土。Ｂ地区埋め戻し。人力掘削ほぼ終えたので、発電機・ベルトコンベア返却する。

10月８日（月）晴れ

Ｆ地区溝底まで下げて清掃する。西側掘り方の肩はコンクリート基礎で壊されている。写真撮影後、割り付け作業行う。Ｃ地区江戸末～近代の土壙など掘り下げる。

10月９日（火）晴れ

Ｆ地区溝平面実測。瓦だめ掘り下げ継続。Ｃ地区遺構も掘り下げ継続。

10月10日（水）曇り

Ｆ地区溝実測継続。西側で井戸と思われる落ち込み確認。Ｃ地区土壙・ピット.の畦畔写真撮影後除去。割り付け開始。

10月11日（木）晴れ

Ｆ地区瓦だめ南北に延びている。保存を前提としているので北半は損なわないようにする。井戸の石組確認。井戸の南側に井戸に伴うと思われる土壙確認。ともに掘り下げ継続。Ｃ地区清掃後全景写真撮影。

10月12日（金）晴れ

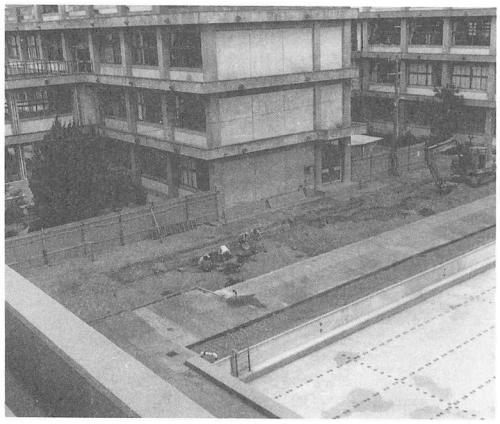
Ｆ地区瓦だめ清掃継続。井戸３ｍ余下げたところで水が湧き始めたため掘り下げ中断する。Ｃ地区遺構図作成。

Ｆ地区瓦だめ清掃継続。溝平面実測終了。Ｃ地区下層遺構面の調査に入る。重機で約0.3ｍすき取る。北側は遺構面残っておらず、上層遺構面の約３分の２の調査面積となった。

10月15日（月）晴れ

Ｆ地区瓦だめ継続。溝東側壁の側面図実測し、西壁は断面図作成しエレベーションを記入する。Ｃ地区下層遺構面清掃し、検出した土壙・ピット掘り下げる。

10月16日（火）曇りのち雨

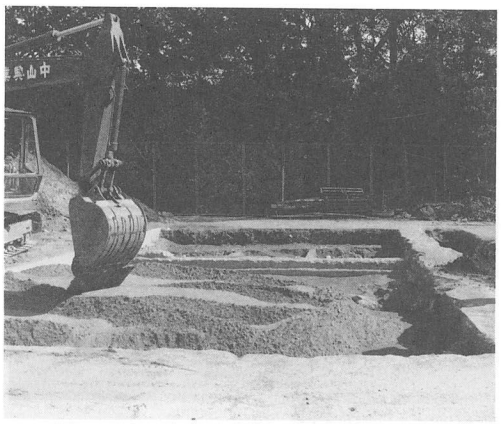


第６図　調査風景

Ｆ地区瓦だめ清掃し写真撮影。井戸掘り方検出。Ｆ地区全体清掃し、全景写真撮影。Ｃ地区遺構掘り下げ継続。営繕課・高校関係者とＦ地区保存について協議する。

10月18日（木）晴れ

Ｂ地区井戸と調査区南壁清掃し写真撮影。瓦だめ・溝を通しての断割トレンチ設定する。Ｆ地区平板測量する。基準点測量は外部へ委託することとし、そのポイントを設定する。Ｃ地区遺構掘り下げ後、全景写真撮影する。



第７図　埋め戻し風景

10月19日（金）晴れ時々曇り

Ｆ地区井戸さらに掘り下げる。約50cmで胴木検出。湧水のため底の撮影は断念する。井筒は残っていない。底は方形に組んでいる。溝と瓦だめの関係はトレンチの結果、瓦だめの方が古いことが判明する。溝の側壁の石材に残された矢穴拓本採取。南壁土層図作成。Ｃ地区下層遺構面実測。一部トレンチを入れて確認するが、認められない。調査区東壁土層断面実測。

10月20日（土）曇り時々小雨

Ｆ地区井戸割り付け後立面実測始める。溝トレンチの結果から両側壁の時期異なるようである。西壁を再利用した溝で、西壁は傾斜緩やかになって下層へ続いている。Ｃ地区のトレンチの土層図作成。井戸の実測を除いて今日で一応調査終了し、器材を次の現場である姫路市相野敦布地へ搬出する。

10月23日（火）～10月26日（金）

相野散布地・中後瀬遺跡の調査の合間に立面・平面実測する。

10月29日（月）晴れ

Ｆ地区保存するため川砂搬入し埋め戻しを行う。井戸・土壙・溝は全て砂を入れ、遺構面が判別出来る程度に５～20cm砂を入れたのち砕石を入れ、さらに運動場に適した山土などで埋め戻しを行う。Ｅ地区の立会調査を行う。Ｆ地区北側10ｍのところだが遺構面残存していない。残りの機器・器材搬出し、調査全て終了する。

II．歴史的環境

現在、五層の天守閣をもちその優美な姿から白鷺城とも称される姫路城が最初に文献史上に表われるのは、赤松貞範が貞和２年(1346)に築いた「姫山の城」に始まる[文献1]。しかし、赤松氏の築城した「姫山の城」については、考古学上の成果からは現在の所何らうかがえるものはなく、中世における姫路城の実態については具体的には全く不明である。

姫路城の名が、歴史上に再び登場するのは、羽柴秀吉の播磨入国以後である。秀吉は中国進攻の本拠地として姫路の地を選び、姫路城の改修を命じ、城下町の整備を行なっている。近世城郭としての姫路城の成立は、慶長５年（1600）の池田輝政の入城迄待たねばならないが[文献1]、城下町の原型は、羽柴秀吉・秀長、木下家定と続く、羽柴･木下時代にある程度迄形造られていたと考えられる。ここでは、初期城下町成立以前の姫路周辺の遺跡の分布状況について概観し、初期城下町成立以降の状況については、現在迄に行なわれて来た城下町関係の発掘成果を参考にして、考古学的側面から見た姫路城下町の成立、その変遷についてある程度考えてみたい。

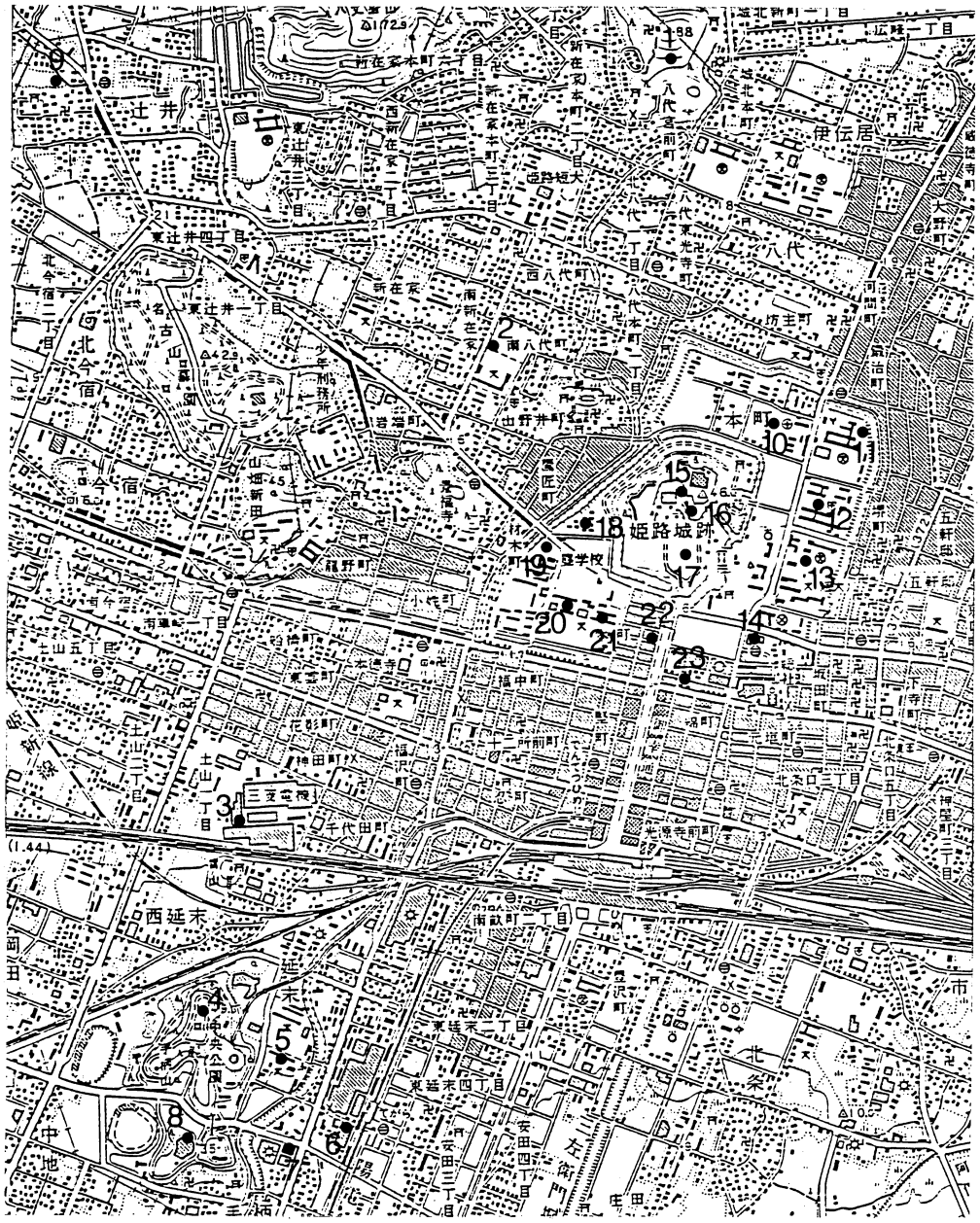
姫路市を中心とする西播地域は、加古川、市川、揖保川、千種川などの河川が南北に貫流しこれらの河川が形成する平野を中心に、原始、古代から人々の営みが続けられて来た。

先土器時代の遺跡は、まだ調査されていないが遺物が単独で出土した地点は現在迄数箇所知られている。船場川流域の手柄山北丘遺跡では井島型に属するナイフ形石器が発見されており[文献2]、天川流域においては、別所新池遺跡でナイフ形石器、御着城遺跡ではナイフ形石器、掻器等の遺物が発見されている[文献3]。この時期に関しては今後の発掘調査による新たな成果が待たれる。

縄文時代の遺跡には、早期のものに市川上流の福本遺跡がある[文献4]。ここでは山形文、楕円文などの押型文土器が出土している。中期では、人骨出土で有名な辻井遺跡がある[文献5･6]。後期、晩期に入ると、遺跡の数も増加し、河川の下流域に多く分布するようになる。まず後期では、辻井遺跡の他、船場川流域に千代田遺跡[文献6]、橋詰遺跡・石ヶ坪遺跡、沼高田遺跡がある。晩期になると弥生時代と複合する遺跡が多く、前記の辻井、橋詰遺跡などの他に小山遺跡、堂田遺跡、構遺跡や銅鐸の鋳型が出土したことで知られる今宿丁田遺跡[文献7]などが見られる。

弥生時代の遺跡には前述した様に、縄文時代後・晩期から継続した遺跡が多く、その数も増加している。前期では船場川流域に千代田[文献8]、橋詰[文献9]、小山[文献10]、黒表[文献11]、構、八反長遺跡が見られる。

また姫路駅の近くには市之郷遺跡[文献12]がある。中期のものには、船場川流域では前述した遺跡の他に石ヶ坪、八代深田[文献13]、名古山[文献14]、八反長遺跡等が知られている。名古山遺跡では銅鐸の石製鋳型片が出土しており、八反長遺跡においては方形周溝墓が検出されている。後期では前記の諸遺跡に加え、船場川流域に弥生時代末期の住居跡や石器、木製品等の遺物を出土した長越遺跡[文献15]



1．八代芝崎山遺跡
2．八代深田遺跡
3．千代田遺跡
4．手柄山北丘遺跡
5．橋詰遺跡
6．黒表遺跡
7．小山遺跡
8．手柄山北丘古墳群
9．辻井遺跡
10．県立博物館
11．県立東高校
12．国立病院
13．淳心学院
14．本町遺跡
15．大天守地下
16．二ノ丸上山里跡
17．三ノ丸向屋敷
18．西屋敷
19．県立聾学校
20．城南幼稚園
21．白鷺中学
22．藤本ビル
23．南部中堀

第８図　姫路城跡の位置と周辺の遺跡

や権現遺跡[文献16]等がある。

古墳時代前期に属するものには、市川上流域に横山古墳群、下流域には御旅山３号墳[文献17]、６号墳、兼田古墳群[文献18]等がある。御旅山３号墳は円墳で発掘調査により竪穴式石室から三角縁三神三獣鏡、鉄剣、刀子等が出土している。兼田古墳群は兼田大塚古墳（前方後円墳）と他６基の古墳（円墳）からなり、円墳からは鉄刀、埴輪片、須恵器片等が出土している。この他前述した長越遺跡では古墳時代前期の住居跡が検出されている。前期末から中期初頭にかけては奥山大塚古墳が知られている。中期のものには、兼田古墳群の他に壇場山古墳[文献19]、山ノ越古墳、宮山古墳[文献20]、手柄山北丘古墳群、打越山古墳、清盛塚古墳等がある。壇場山古墳は播磨地方最大級の前方後円墳である。後円部には組合式の長持型石棺の蓋が露出しており、周辺に石室らしきものが見当らないことから、この石棺は直接土中に埋葬されたものと見られている。この壇場山古墳の陪塚とも見られてきた同時期の大方墳である山ノ越古墳も同様に、長持型石棺で直接埋葬されている。宮山古墳は径30ｍの円墳で３基の埋葬施設をもっている。出土遺物には画文帯神獣鏡、銀象嵌の素環頭大刀や三葉環頭大刀、垂飾付耳飾り、玉類、武具、鉄製品、須恵器等が出土している。このような豊富な遺物から被葬者はかなりの権力者であったと考えられる。

後期の古墳には市川流域に仁寿山古墳群、西見野古墳群、御輿塚古墳などがある。御輿塚古墳は径20ｍ程度の円墳で横穴式石室の中に組合式の家形石棺が置かれている。

８世紀に入り、律令体制が確立されると、大国播磨の中心地として姫路の地には、国府、国分僧寺、国分尼寺などの施設が置かれるようになる。国分寺については、現在迄数次にわたって調査が行なわれ、金堂跡、灯籠跡、中門跡、南大門跡、東回廊跡及び、西・南築地跡などが検出されている。[文献22・23・24]国府の位置については従来より種々の説が提唱されてきたが、姫路市本町で最近調査が行なわれた本町遺跡では国府中心部の背後に位置する付属建物群と推定される遺構群が検出されている。[文献25]

このように、奈良から平安にかけて播磨の中心地として機能していた姫路の地も、続く平安末から鎌倉初頭の時期に入ると、国衙の衰亡と共に中心地としての機能を消失していく。

姫路の地が再び史上に表われるのは、赤松氏の抬頭する南北朝時代以降である。播磨国佐用荘の一荘官に過ぎなかった赤松則村（円心）は、元弘の乱に応じて挙兵し、足利尊氏が建武の新政権から離反すると、終始尊氏を助け終に播磨、摂津、美作、備前の５箇国の守護を一族で占める有力守護大名へと成長する。赤松氏は他の有力守護大名同様、概ねは京都に在住し、幕政に参与する事で領国支配の強化をはかり、領国内には守護代を置き、守護所坂本城で政務を執らせた。この結果、播磨支配の実権は次第に守護代を中心とする有力国人層の手へと移って行き、国人層の離反が赤松氏の領国支配体制瓦解の遠因となっていく。さて、赤松氏と姫路との関係は赤松貞範が貞和年間（1345～49）に「姫山の城」を築城したのを契機に始まるとされている。また、赤松政則(1455～96)は「姫山の城」の本丸、鶴見丸、亀居丸などの曲輪や門、

馬場などを整備したとされている。[文献1] しかし現在迄の所、発掘調査ではこの時期に関連する遺構等は全く検出されておらず、赤松氏による「姫山の城」の具体的な様相は全く不明である。

嘉吉元年（1441）に発生した嘉吉の乱は赤松氏の播磨支配を揺がす重大事件となった。赤松満佑は、三管四職の一人として、四代将軍義持の代より幕政に関与していた。一方クジ引きという変則的な形で六代将軍となった足利義教は将軍の権威の復興を画し、有力守護大名、公家、社寺への圧迫を強めていった。こうした将軍と守護との対立はついには赤松満佑による将軍義教の暗殺という形となって表われる。義教を討った満佑は本国播磨へ帰り、幕府軍に対抗しようとするが、播磨の有力国人層は満佑から離反し、ついに満佑は城山城で自刃する。

以後赤松氏は、応仁の乱後、播磨守護職を回復するが、播磨支配の実権は別所、小寺、三木、宇野などの有力国人層に完全に移行していく。彼ら有力国人層は、英賀、長水、御着、三木、姫路などの諸城に本拠を構え互に抗争を繰り返した。

これらの諸城の中で、これ迄に発掘調査が実施され、ある程度、実態の明らかになったものに、姫路市御国野町御着に所在する小寺氏の居城御着城[文献26]がある。御着城では、本丸、二の丸の一部を対象として調査が行なわれ、本丸跡では、井戸、礎石建物、石組み溝、瓦溜、石組み施設などの遺構が検出され、二の丸跡からは井戸、建物跡、石組み溝、土塁、石組み施設、土壙、柵状遺構、埋甕遺構などが検出されている。時期的には14世紀後半から16世紀後半迄の200年間に渉る時期の遺物が検出されており、室町時代から戦国時代末期の有力土豪層の居館の実態を知る上で貴重な資料を提供している。

天正5年（1577）播磨へ入国した羽柴秀吉は、三木城、英賀城を相次いで攻略し、播磨平定を終える。次いで姫路城に入城した秀吉は、中国攻略の本拠地として新たに築城工事を起こし、城下町の経営を開始する。以後、羽柴秀長、木下家定が姫路に入城し、近世城下町の母胎となる初期城下町が形成される。[文献27]

この時期、すなわち16世紀後半期に属する遺構、遺物が検出された地点には、姫路城解体修理に伴って実施された大天守地下の発掘を契機に、二の丸上山里跡、藤本ビル、淳心学院、県立博物館、姫路東高校などがある。

大天守地下では、石垣及び礎石建物が検出され、出土遺物には、16世紀後半の時期に属する土師器皿、備前焼甕・擂鉢、瀬戸・美濃系菊皿、中国製磁器碗・皿などがある。[文献27]

二の丸上山里跡では、礎石建物、石組みの雨落ち溝、石列、集石などの遺構が検出され、出土遺物には16世紀後半の時期に属する土師器皿、瓦質土器火鉢・風呂、備前焼甕・徳利・擂鉢、志野向付・皿、織部埦、唐津徳利・擂鉢、中国製磁器碗などがある。[文献27]

藤本ビルの調査では、土壙内より、16世紀後半に属する土師器皿・堝、瓦質土器火鉢、丹波焼鉢、備前焼擂鉢、瀬戸・美濃系天目茶碗・灰釉皿、中国製磁器碗・蓋・皿等が出土している。[文献27]

淳心学院内の調査では、石組井戸、堀、排水用の会所、土壙などが検出されている。また出

土遺物には、唐津焼皿・埦、中国製染付碗、備前焼徳利・擂鉢、志野向付、天目茶碗などがある。[文献27・28]

このように、近年の発掘成果から、羽柴・木下時代の城下町の実態は漸くその一部が明らかになりつつある。

慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦の論功行賞によって池田輝政が播磨に入国し、姫路城主となった。輝政は入城すると市川を東へ付け替え、城下町の建設に着手した。文献や絵図などによると、内堀、中堀、外堀の三重の堀を設け、内曲輪に本城と居館、中曲輪に武家屋敷、外曲輪に町屋と寺社を配した。

その後、城主は本多氏に移り、化粧櫓の築造、西の丸の拡張、三の丸御殿の造営、城下町の整備などが行なわれ、ここに近世城下町としての姫路が成立する。[文献27]

本多氏以後、姫路の藩主は、寛政2年（1749）酒井忠恭の入城まで4家、9代の藩主が目まぐるしく入れ替わるが、酒井忠恭の入城以後は酒井氏が明治維新に至る迄城主として在住する事になる。

この時期、即ち池田輝政の入城から明治維新に至る近世城下町の調査は現在迄、城内に存在する施設の建て替え、増築などの工事に伴なって、ここ10年来数次にわたって行なわれ、多くの資料が蓄積されている。

この時期の遺構、遺物を検出した主な地点には、姫路聾学校、姫路東高校、県立歴史博物館、本町遺跡、国立病院、白鷺中学校、淳心学院などがある。

姫路聾学校では、井戸、瓦溜、廃棄壙、溝などの遺構が検出され、土師器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、唐津焼などの国産陶磁器類の出土が見られた。[注1]

国立病院では、石組施設、井戸、溝、土壙などが検出され、染付、擂鉢、急須、湯飲み、甕、手水鉢、風炉、焜炉などの日常雑器、泥人形、ガラス製品、銅金具、鉄釘、骨、貝類等、様々な遺物が出土している。[文献29]

白鷺中学校では、柵、瓦組み井戸、池、土壙、などが検出され、土壙内より、土師器、備前、丹波、瀬戸、美濃、唐津、伊万里などの国産の陶磁器類が一括出土しており、遺物のセット関係を知る上で良好な資料を提供している。[文献27]

県立歴史博物館敷地内での調査は、調査面積が3600㎡という現在迄行なわれた姫路城関係の調査では最大規模のものである。ここでは、江戸時代の遺構面が3面に渉って検出され、道路、道路側溝、雨落ち溝、暗渠排水溝、築地基礎、石組井戸、建物跡、集石遺構、門跡、漆喰土壙、土壙、炉状遺構などの遺構が検出されている。

出土遺物には、土師器、備前系陶器、丹波系陶器、唐津系陶器、京焼系陶器、瀬戸・美濃系陶器、伊万里系磁器、東山系磁器などがある。[文献30]

これらの調査結果を通じて、現在迄に明らかになった事実は、以下の5項にまとめられる。

① 城下町の町割は、道路によって画されており、道路には築地や側溝が取りついている。県立歴史博物館の調査では、文化年間の姫路城下絵図に記載されている上案内社から東に折れて「八幡宮」の北を東西に走る道路が検出されている。

② 城下町、特に中曲輪内の武家屋敷については、県立歴史博物館内の調査によって明らかになった。即ち武家屋敷は築地によって囲まれており、屋敷内は、築地や柵によって居住部分と、庭などの非居住部分に画されている。居住部分には建物が建ち、建物の外に井戸、流し、便所などがあり、屋敷地内の排水には暗渠を使っている。

③ 建物には礎石建物と掘立柱建物とがある。17世紀中頃を境として掘立柱建物から礎石建物への変化が認められる。

④ 井戸は素掘り井戸と瓦組み井戸、石組み井戸がある。瓦組み井戸は専用の瓦を用い、裏込めに河原石と粘土を使っている。石組み井戸には底部に曲物を使ったものと、丸太材や板材を井筒や桶状に組んだものがある。

⑤ 17世紀中頃を境に、屋敷内の施設は、柵から築地塀、素掘り溝から石組み溝、掘立柱建物から礎石建物などの変化が認められる。

このように近世城下町成立以後の状況については、調査事例も数多く実施され、また絵図等も多数現存することなどから、中曲輪内の武家屋敷を中心に、往時の姿が徐々に明らかになりつつある。これらの成果の一部は、1984年、県立歴史博物館で開催された「特別展　掘り出された城下町姫路」展で公開されている。

以上、姫路城に関する調査成果について概略を述べてきたが、最後にこれをまとめてみたい。

① 赤松氏時代の姫路城については「播磨鑑」「姫路記」などにわずかに記されている程度で考古学的には実態は全く不明である。

② 16世紀後半の羽柴・木下時代については、絵図等も若干作成されており、またこの時代に属する遺構、遺物も検出されていて、断片的な形ではあるが、その実態が漸く明らかになりつつある。

③ 近世城下町成立以後については、絵図等もかなり詳細に描かれたものが多くなり、検出された遺構、遺物も飛躍的に増大し、中曲輪内の武家屋敷を中心に、その状況がさらに詳しく解明されている。

④ しかし、18世紀以降の時期になると、遺物の量は飛躍的に増加するものの、これに編年的年代を与えるという基礎的作業が現在の所は未だ途上にあると言え、その全容は必ずしも明らかになっていない。

今後、城下町の実態解明にあたっては、近世陶磁器の編年基準の確立という大きな課題が残されており、また、歴史地理学、文献史学など関係諸分野との交流もまた必要となっている。

註）　本稿については、先土器時代から古墳時代までを池田が、それ以降の時期については、岡田・長谷川が、それぞれ分担して執筆した。

Ⅲ．調査結果

1．確認調査

今回の調査は校内プールの拡張及び校内施設の改築に伴う事前調査という性格上、調査箇所は点在し、しかも、それぞれの調査面積は小規模なものとならざるをえなかった。今回は、工事予定箇所、すなわち体育館西側（Ａ調査区）、渡り廊下部分（Ｂ調査区）、プール西側（Ｃ調査区）、プール東側（Ｄ・Ｅ調査区）、体育器具庫部分（Ｆ調査区）に計６ヶ所の調査区を設置して調査を行なった。調査にあたっては、事前にそれぞれの調査区に幅１ｍのトレンチを設定して、遺構面の枚数、遺構の有無等を確認した。その結果、設定した６箇所の調査区の内、A、B、D、E調査区では、後世の攪乱、削平等によって遺構の存在は確認されなかった。

2．層序

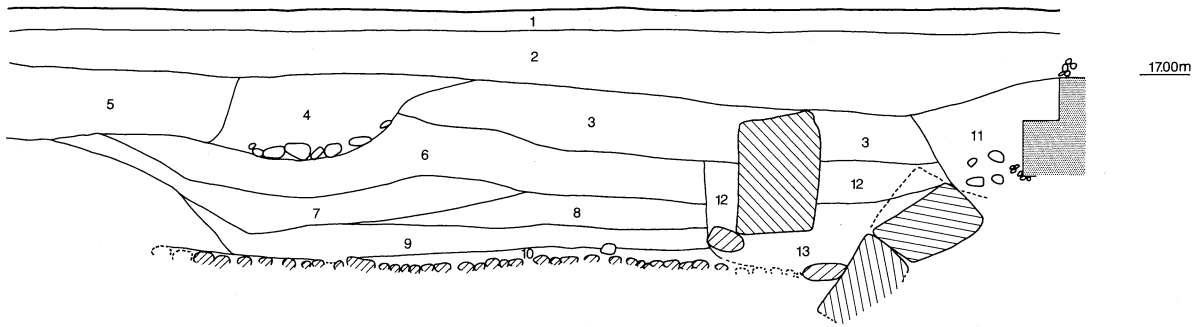
今回の調査では、Ｃ調査、Ｆ調査区で、それぞれ時期の異なる複数の遺構面が検出されている。しかし、調査区が分離している事、各時期の遺構が重複し、上面で見落とした遺構が下面で検出されている事、などの理由から、必ずしも、遺構群の同一面での広がりを確認する事は出来なかった。

ここでは、Ｃ調査区、Ｆ調査区について、基本的な土層の堆積状況及び遺構面との関係について少し触れておきたい。

Ｃ調査区では、断面観察の結果、基本的には、①層コンクリート壁層、②層礫層（コンクリート裏込）、③層黄褐色砂層、④層暗黄褐色土層、⑤層暗灰色土層、⑬層暗黄灰色砂質土層、⑭層暗黒色土層、⑮層暗黒灰色土層、㉓層黄褐色シルト層の順に堆積が見られる。

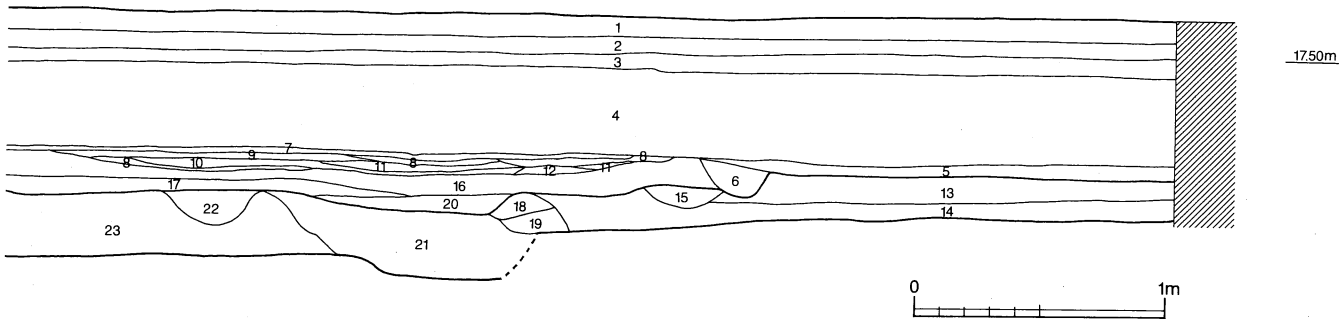
ここでは⑤層及び、それと同一レベルにある、⑦層上面を第１遺構面、⑭層及びそれと同一レベルにあると思われる。㉓層上面を第２遺構面として調査を実施した。

Ｆ調査区では、基本的には、①層黄灰色砂層、②層暗黒灰色砂礫混り土、③層暗黄灰色土、⑥層暗黄褐色シルト層、⑦層暗黄灰色シルト層、⑧層黒灰色粘質土層、⑨層瓦溜整地層、⑩層砂層の順に堆積している。今回の調査では、③層を除去した後に、石組溝、井戸、土壙等が検出され、明確な遺構面を調査区の全域にわたって確認しえなかった。ここでは、Ｆ調査区で検出された遺構については、同一面で確認されているが、少なくともＣ調査区で検出された第２遺構面上に形成された土壙群よりも古い時期に形成された遺構であると考えられることから、第



第９図　Ｅ地区東壁土層断面図

1. 真砂（グラウンド盛土）
2. 撹乱土（盛土）
3. 茶褐色粘土質（円礫含む）
4. 暗灰褐色土
5. 黒色土（炭含む）
6. 灰褐色砂質土
7. 暗灰褐色砂質土(漆喰、焼土、炭含む)
8. 黒褐色粘質土
9. 瓦層
10. 暗青灰色粘土(ヘドロ層)
11. コンクリート基礎掘り方埋土(撹乱土)
12. 黒灰色粘質土
13. ヘドロ層



第10図　Ｃ地区東壁土層断面図

1. コンクリート壁(プール上面)
2. 礫層(コンクリート裏込)
3. 黄褐色砂
4. 暗黄褐色土(礫、瓦片、タイル等を含む)
5. 暗灰色土(小礫、練瓦片等を含む)
6. 暗茶色礫混り土
7. 赤色粒土層
8. 灰層
9. こげ茶砂礫層
10. 暗黄灰色砂礫土
11. 焼土層
12. 砂層
13. 暗黄灰色砂質土
14. 暗黒灰色土(弥生等の土器片を含む)
15. 暗灰色砂質土
16. 暗黄灰色礫混り土
17. 暗灰色粘質土(礫を含む)
18. 暗灰色砂質土(炭、陶片(京焼系)を含む)
19. 暗黄灰色砂質土
20. 暗黒灰色粘質土(礫を含む)
21. 暗黄灰色土(瓦片、礫、貝ガラ、炭、陶片等を含む)
22. 暗黄灰色土
23. 黄褐色砂質土(シルト層)

３遺構面の遺構として報告する。なお、遺構の名称については、第１遺構面のものについては1000番台、第２遺構面のものについては2000番台、第３遺構面のものについては3000番台で表わし、遺構の固有番号は１～９９９で表示している。今回の報告で用いた遺構種類の表示は以下のようなものである。ＳＡ：石垣、ＳＤ：溝、ＳＫ：土壙、ＳＴ：墓

３．　Ｃ調査区

Ｃ調査区では、上下２面にわたって遺構面が検出され、それぞれの遺構面上で廃棄壙と思われる土壙群が検出されている。

第１遺構面の遺構

第１遺構面は５層及びそれと同一レベルにあると思われる７層上面をベースとする遺構面で合計11基の土壙が検出されている。

土壙ＳＫ1001

Ｃ調査区南側部分で検出されたもので、長軸270cm、短軸130cm、確認面からの深さ約５０cmを測るほぼ楕円形の平面形状を呈する土壙である。

出土遺物には、土師器焙烙、施釉陶器壺、染付磁器碗・徳利・仏供碗がある。

土壙ＳＫ1002

遺構の一部が調査区西壁にかかっているため、全容は明らかではないが、長軸１８０cm、短軸130cm以上、確認面の深さ約20cmを測るほぼ楕円形の平面状を呈する土壙である。

出土遺物には、土師器皿、施釉陶器埦、染付磁器碗・仏供碗がある。

土壙ＳＫ1003

ＳＫ1001の北側で検出されたもので、長軸80cm、短軸40cm、確認面からの深さ約20cmを測る楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは、遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ1004

ＳＫ1003の東側で検出されたもので、長軸70cm、短軸40cm、確認面からの深さ約30cmを測るほぼ楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ1005

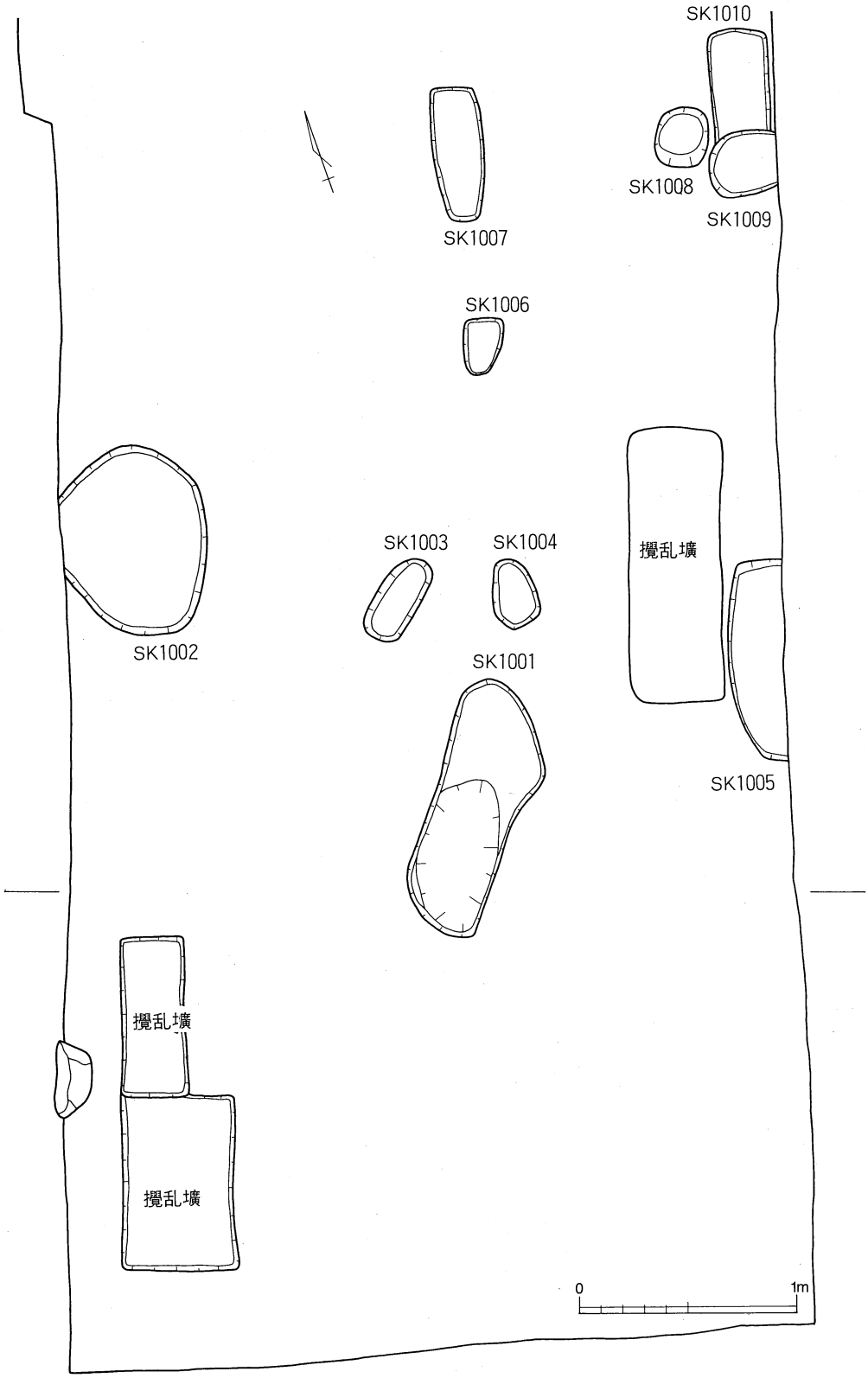
Ｃ調査区の東壁にかかっており、遺構の極く一部を発掘したのみであるため、規模、平面形状などは不明である。確認面からの深さは約20cmを測る。壙内からは遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ1006

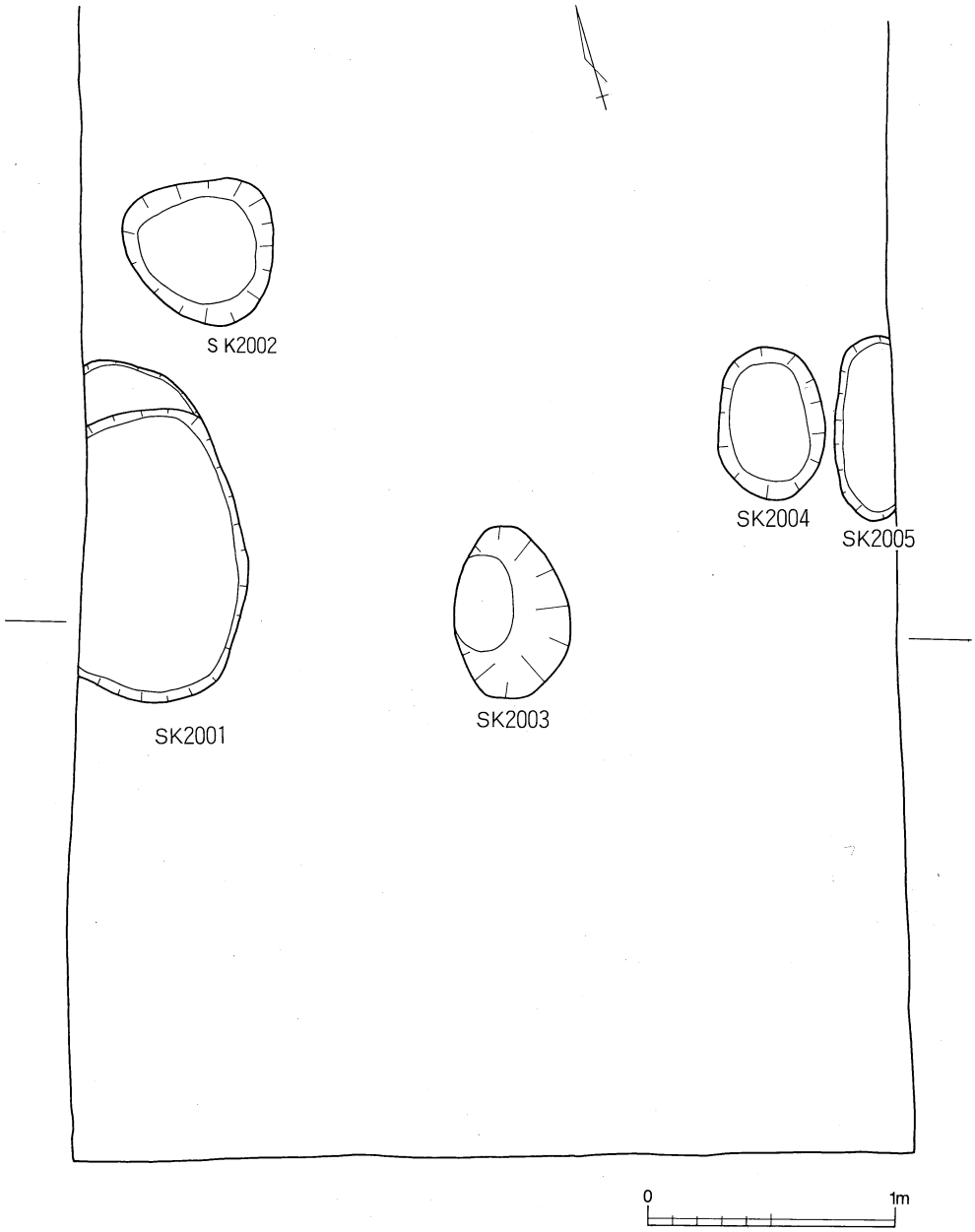
ＳＫ1004の北側で検出されたもので、長軸50cm、短軸35cm、確認面からの深さ約20cmを測る楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ1007

ＳＫ1006の北側で検出されたもので、長軸20cm、短軸50cm、確認面からの深さ約20cmを測る



第11図　C地区第1遺構面遺構配置図



第12図　C地区第２遺構面遺構配置図

楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ1008

ＳＫ1007の東側で検出されたもので、長軸60cm、短軸50cm、確認面からの深さ約20cmを測るほぼ円形の平面形状を呈する土壙である。出土遺物には染付磁器壺がある。

土壙ＳＫ1009

ＳＫ1007の東側で検出されたもので、東側部分は、Ｃ調査区東壁にかかっているため全体の規模は明らかではないが、長軸70cm以上、短軸60cm、確認面からの深さ約30cmを測る楕円形の平面形状を呈すると思われる土壙である。ＳＫ1010とは重複関係にある。出土遺物には、土師器壺・焙烙・無釉陶器皿、施釉陶器埦・皿・壺、染付磁器碗がある。

土壙ＳＫ1010

ＳＫ1009の北側で検出されたもので、ＳＫ1009によって南側部分を切られているため、全体の規模は明らかではないが、長辺90cm以上、短辺50cm、確認面からの深さ30cmを測る長方形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

第２遺構面の遺構

第２遺構面は、14層及びそれと同一レベルにあると思われる23層上面をベースとする遺構面である。ここでは、遺構は殆ど検出されず、わずかに土壙が５基検出されたのみである。

土壙ＳＫ2001

Ｃ調査区の南側部分で検出されたもので、西側部分は調査区西壁にかかっているため、全体の規模は不明である。長軸270cm、短軸130cm以上、確認面からの深さは約30cmを測る現状では半楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ2002

ＳＫ2001の北側で検出されたもので、長軸125cm、短軸115cm、確認面からの深さ約25cmを測る楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ2003

ＳＫ2001の東側で検出されたもので、長軸１４０cm、短軸95cm、確認面からの深さ約75cmを測る楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ2004

ＳＫ2003の東側で検出されたもので、長軸１２０cm、短軸85cm、確認面からの深さ約40cmを測る楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

土壙ＳＫ2005

ＳＫ2004の東側で検出されたもので、東側部分は調査区東壁にかかっているため全体の規模は不明である。長軸１５０cm、短軸50cm以上、確認面からの深さ約45cmを測る現状では半楕円形の平面形状を呈する土壙である。壙内からは遺物の出土は見られない。

4.　F調査区（体育器具庫部分）

約98m²全面調査した部分である。確認調査によって、大きく二時期の遺構面を確認している。その結果から、校庭にする際の整地層（盛土層）を含めて約50cmは重機によって掘り下げた。前章で記したように中央に旧陸軍建物のコンクリート基礎が南北に走っているなど数ヶ所の攪乱が見られ、保存状態は良好とは言えないものの、３時期以上の遺構が土層の切り合い関係などから看取出来た。

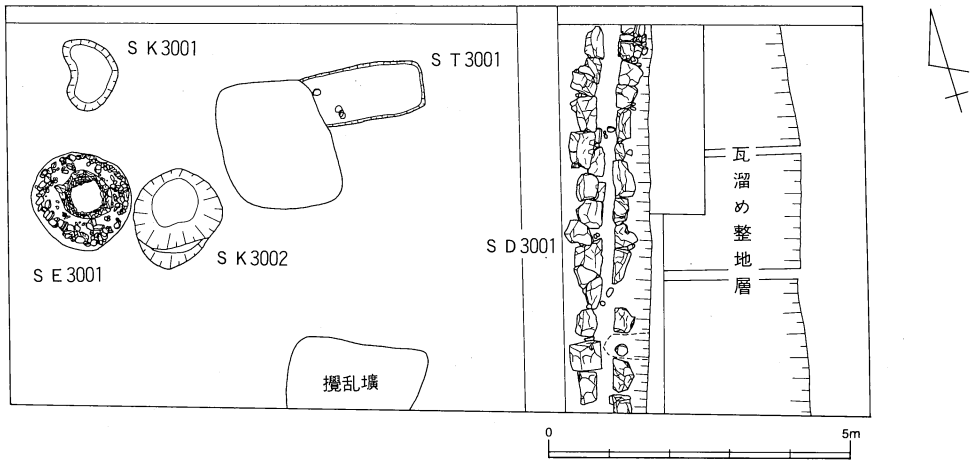
①　**集石土壙墓**（ＳＴ3001）

コンクリート基礎の入った攪乱壙によって一部が切られており、コンクリート栗石のため上面での検出は出来なかった。畦畔を残して掘り下げたところ、中世的な様相を残す集石土壙であった。

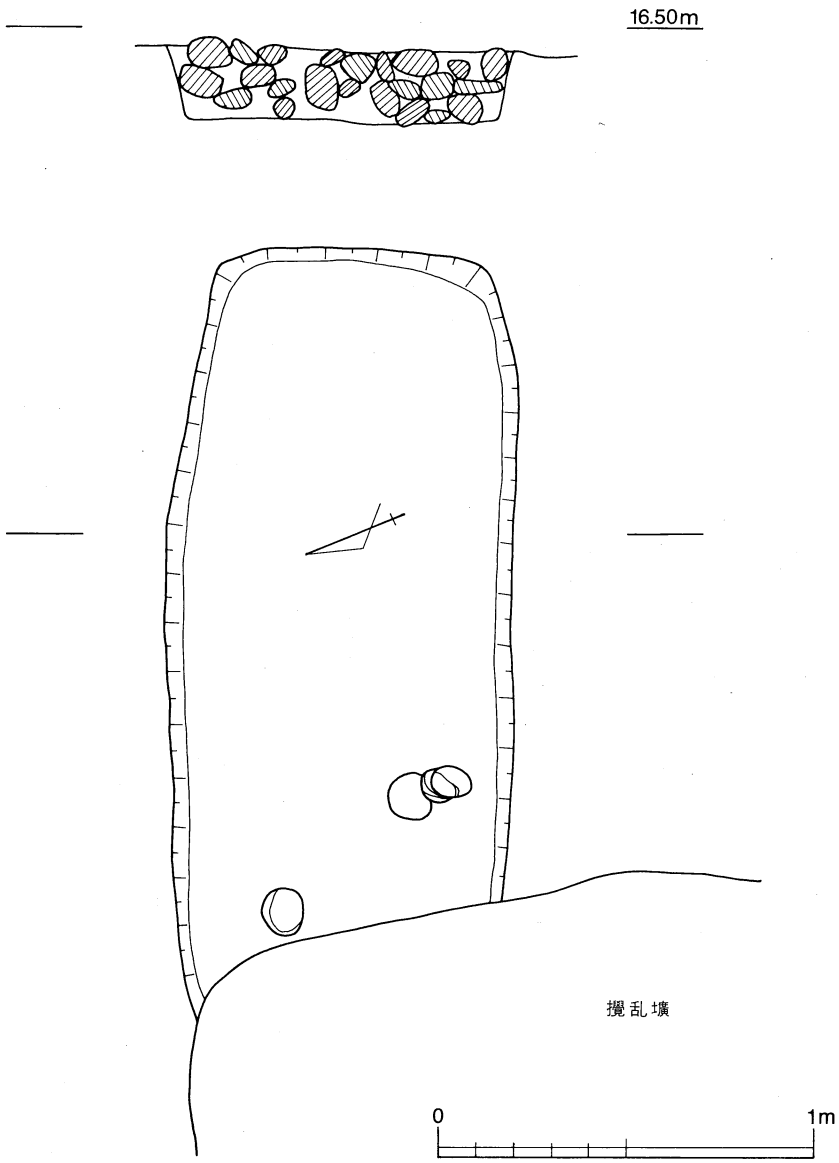
土壙上面で拳大前後の円礫を集めたものと思われ、調査段階では底まで落ち込んでいる礫も見られた。規模は短辺100cm、長辺200cmの隅円の方形であり、西側の木口部を欠損しているが、規模の推定は可能である。検出時での深さは20cmを測る。肩は垂直に近い角度で掘り込まれており、底面は西側の方が高くなっている。出土遺物は西側に集中しており、土師器皿が４点出土している。３点は重なって出土しており、１点は、北西30cmにやや離れて出土している。底面のレベルと出土状況から西側が頭位と考える方が妥当と思われる。中世的な性格の強い墓である。

②　**井戸**（ＳＥ3001）

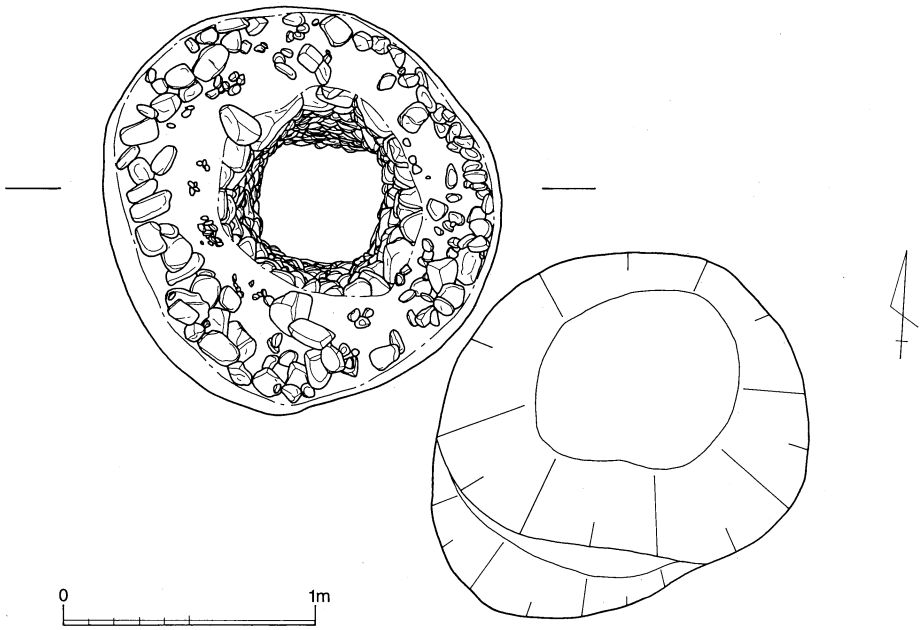
調査区西側で検出した。掘り方は径160～180cmの不定円形で深さは400ｍを僅かに越える規模である。検出面から80cm下まで井側が残っていた。埋土の状況などから意図的に埋めた井戸



第13図　Ｆ地区遺構配置図



第14図　集石土壙(ＳＫ3001)実測図



第15図井戸（ＳＥ3001）土壙（ＳＫ3002）平面図

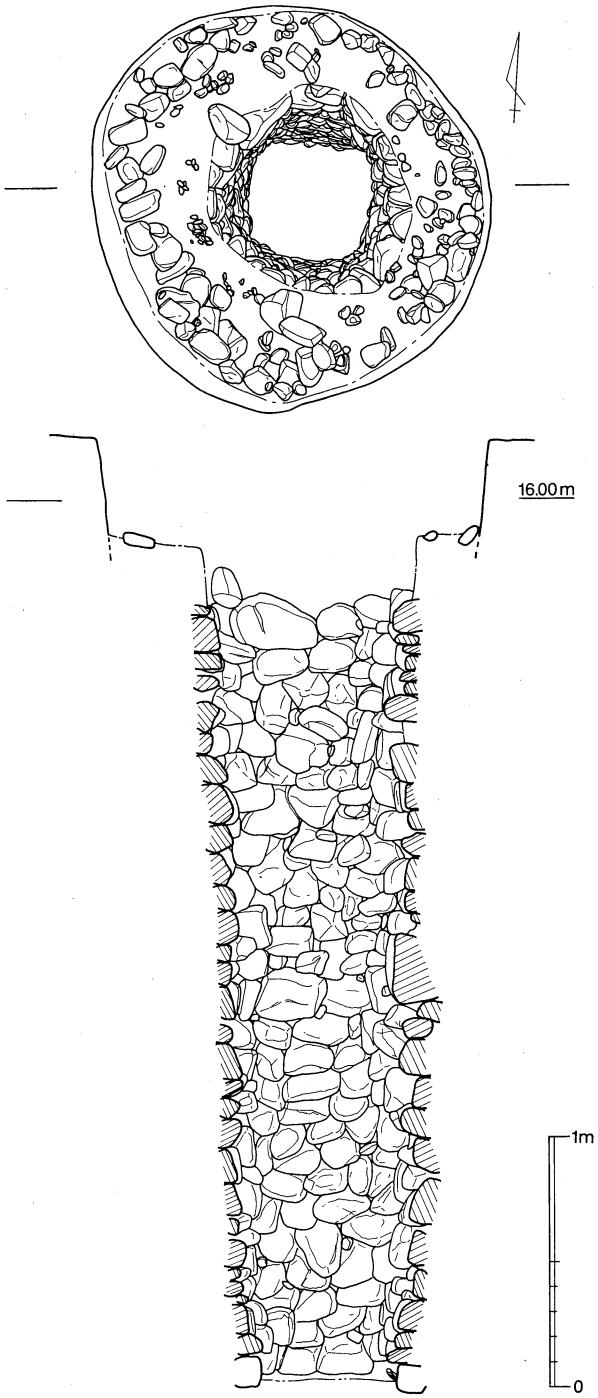
と考えられる。井側は擂鉢状になっており、上面で80cm下面で40cmで深さは400cmを測る。井側は、枝を付けたままの自然木を胴木として使っており、方形に組んでいる。井筒は抜き去られたものか残っていない。方形の木組の上に井側部を築いているため、二段目までは方形に石を組んでおり三段目以降徐々に円形にしている。石材は主に河原石を使用しているが、一部龍山石も利用されている。井側石組の構築は時計回りで行っており、深さの約２分の１のところに大形の石材を使った部分がある。石組の安定を図るためのものであろうか。掘り方埋土はやや粘性を持って礫混じりの土であり、掘り方も擂鉢状を呈しているものと思われる。

③　**土壙**（ＳＫ3001・ＳＫ3002）

土壙は井戸の東側と北側１基ずつ検出している。北側の土壙は、最大長125cmの不定形の土壙で、深さも30cmと浅いものである。遺物も全く出土しておらず、性格不明である。時期も決めがたく、新しい段階のものかもしれない。東側の土壙は、井戸に接して築かれている。最大径220cmの不定円形で擂鉢状の土壙である。深さ80cmで遺物も出土していないが、井戸と肩を接するように築かれていることから、井戸に関連する施設であろうと思われる。周辺に上屋構造を想定出来る遺構は検出されておらず、遺構の性格は汚水溜めではないかと考えている。

④　**溝**（ＳＤ3001）

コンクリート基礎によって一部損傷を受けている溝で調査地内を南北に貫いている。龍山石を使用した溝で、西壁は石垣の一部を利用している。断面片薬研の溝で一石の石材で溝としている。東壁は垂直に西壁は斜面となっている。底には礫も見られるが、明瞭に石を敷いているのではない。幅40cmと狭い溝で、深さは45cmを測る。底にはヘドロ化した黒色土が堆積し



第16図　井戸（ＳＥ3001）実測図

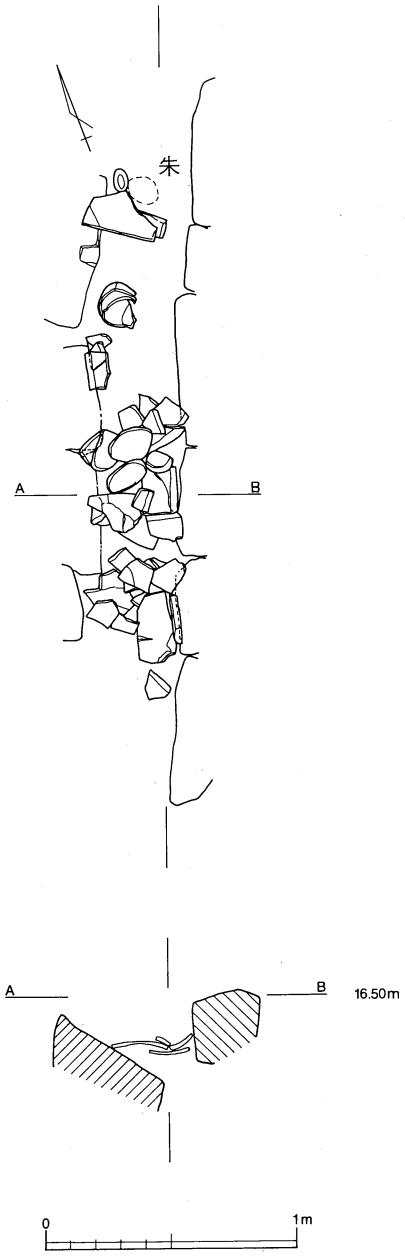
ている。西側は攪乱を受けているため検出していないが、石垣構築時は掘り方は設けていないと考えるのが一般的である。東側には掘り方のラインが見られ、ほぼ垂直に掘り下げ石材より約10cm広く掘っている。石材は垂直になるように河原石で調節している。溝の底からは遺物は出土していないが、黒灰色粘質土上面から平瓦・丹波焼壺が出土している。溝に使われた龍山石のなかの数石には矢穴が残されている。大きさなどは東西両壁とも同じタイプの矢穴が残されている。

⑤　**石垣**（ＳＡ3001）

上部をコンクリート基礎で壊されているが３石まで積んでいることが窺われる。ただ、２・３石目は石垣裏面から削平されたため崩されている部分が多い。

⑥　**瓦だめ整地層**

石垣により護岸された落ち込み内に大量の瓦が廃棄されていた。南北両方に広がっており、15cm前後瓦が堆積している。落ち込みの青灰色粘土層の上に堆積しているが、落ち込み中央部分では底の礫と接している。溝堀り方が瓦堆積層を切っていることから前後関係が明白となった。



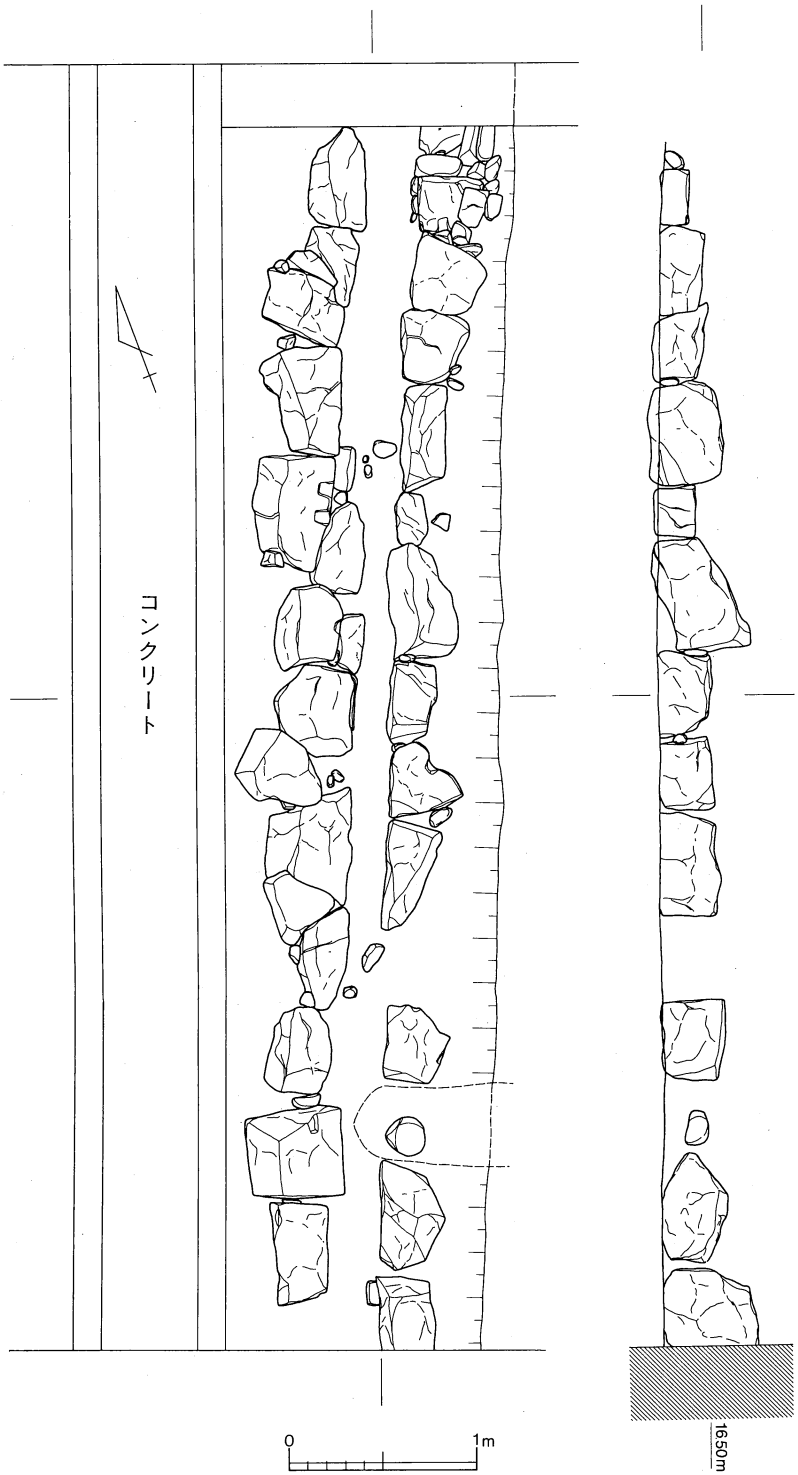
第17図　溝(ＳＤ3001)遺物出土状況

瓦だめ調査段階でＦ地区の保存が決定したので、全体の調査は行っておらず、真砂を入れ、一部は現状保存している。一部の瓦の取り上げと１ヶ所の断割調査のみ行った。取り上げた瓦の時期幅はさほどなく、瓦の種類も軒丸・軒平・丸・平瓦とあり規則性がないことから、廃棄された瓦群と考えられる。中央部分が最も低く東西両端が上がる堆積状況を示している。瓦層と整地層の間には、焼土・漆喰なども見られ、棄却した性格をさらに強調している。

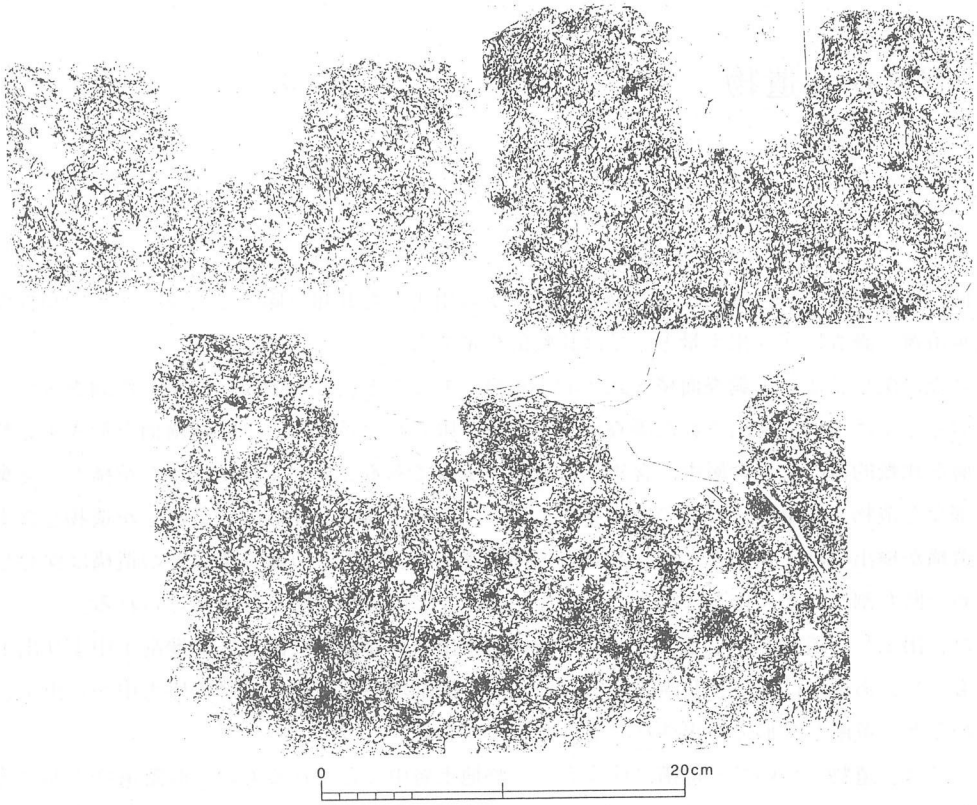
井戸・土壙などの遺構面は調査結果からは同一遺構面としか考えられず、垂直的には時期差を決定することは困難である。

各遺構を土層の切り合い関係などから見てみると、井戸・汚水溜め・集石土壙・石垣が１時期で、次に瓦だめがある。瓦堆積層の上に整地層（現状遺構）である灰褐色砂質土を置き次の遺構面を形成したものと思われるが、調査地内では遺構は検出されなかった。その後、石垣の石材を再利用して南北に走る溝を築いたようである。

調査面積は98m²と狭小であるが、遺構は３時期認められ、土層断面からはさらに上層の新しい時期の遺構も確認している。これら切り合いのある遺構の意義は大きいものと思われる。その問題については遺物の検討を含めて後記することとする。



第18図　溝（ＳＤ3001）実測図



第19図　矢穴拓本

第20図　石材に残された矢穴

Ⅳ．出土遺物

1．土器

今回の調査で出土した遺物は、瓦溜整地層中から出土した瓦類を除くと、コンテナ５箱程度と近世遺跡の調査に伴う出土量としては比較的少量である。

この点に関しては、①調査面積が比較的小規模であること、②６箇所に設定した調査区の内、遺構面もしくは遺構が検出された調査区は２箇所に限られていること、③遺構面を形成する整地土層が比較的薄く、包含層中に含まれる遺物が少量であること、④検出された遺構も、廃棄壙、堀など遺物を多量に含むものは少なく、井戸、墓壙、溝など比較的少量にしか遺物を含まない遺構が検出されていること。⑤Ｆ調査区の調査では、井戸、石組み溝などの遺構は保存したため、断ち割りなどの作業は行なっていないことなどの点が理由としてあげられる。

また、出土した遺物も、A、B、D、Eなど遺構の検出されなかった調査区で攪乱土中より出土したものや、あるいは、Ｃ、Ｆ調査区においても、攪乱壙中及び近代以降の盛土中から出土したものなど、遊離した形で検出されたものが少なくない。

ここでは、遺物について、遺構に伴うもの、整地土層中に含まれるもの、遊離遺物の順にその概要を述べ、併せてその所属時期についてもある程度考えてみたい。

ａ．遺構に伴う遺物

遺構に伴う遺物には、Ｃ調査区で検出されたＳＫ1001、1002、1008、1009出土のもの及びＦ調査区で検出されたＳＤ3001、ＳＥ3001、ＳＴ3001出土のものがある。

ＳＫ1001出土遺物　（ＰＬ.1）

ＳＫ1001からは土師器焙烙、施釉陶器壺、染付磁器碗・仏供碗・徳利が出土している。(1)は土師器焙烙である。体部内面にはナデ調整が、体部外面にはケズリが加えられた後、口縁部内外面にはヨコナデ調整が施されている。体部外面にはオサエのみの未調整部分が残る。

(2)は肥前系染付磁器の仏供碗である。外面には淡い呉須で界線、草花文を描く。底部外面は露胎で砂が付着する。(3)は施釉陶器の壺もしくは甕の底部であると思われる。外面には灰釉が施釉され、内面は露胎である。高台は蛇ノ目状に成形され、露胎である。(4)は肥前系染付磁器の徳利である。外面には呉須で草花文が描かれる。(5)は肥前系染付磁器碗である。外面には呉須で花文が描かれ、高台裏には「口徳年製」の銘が見られる。時期的には、(2)(4)(5)の肥前系染付磁器には18世紀前半から後半の時期が[文献31]、(3)の施釉陶器には18世紀後半から19世紀前半の時期が与えられる[文献30]。これらの遺物の年代観から、ＳＫ1001の廃絶時期は19世紀前半にその上限

が求められる。

ＳＫ1002出土遺物（ＰＬ.1）

ＳＫ1002からは土師器皿、施釉陶器埦、染付磁器碗・仏供碗が出土している。(1) (2) (3)は土師器皿である。いずれも内外面にロクロナデ調整を施し、底部に糸切り痕が認められる。

(4)は施釉陶器埦である。ロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面に施釉し白濁色に発色する。底部外面にはト巾が、また器面には細かい貫入が認められる。美濃系もしくは唐津系の陶器と思われる。(5)は京焼系の埦である。ロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面に施釉し、暗黄灰色に発色する。器面には細かい貫入が認められる。(6)は染付磁器碗である。外面に呉須で、不明文を描く。(7)は肥前系染付磁器仏供碗である。底部外面には蛇ノ目状に块りが入る。体部外面には呉須で松葉文、界線を施文する。脚部以下は露胎で淡赤褐色を呈する。

時期的には、(5)(6)には18世紀後半から19世紀前半[文献30]、(7)には18世紀前半から後半の時期がそれぞれ与えられる[文献31]。これらの遺物の年代観から、ＳＫ1002の廃絶時期は、19世紀前半にその上限が求められる。

ＳＫ1008出土遺物（ＰＬ.1）

ＳＫ1008からは染付磁器壺が１点出土している。底部のみの出土であるため、時期等は不明である。

ＳＫ1009出土遺物（ＰＬ.1.2）

ＳＫ1009からは土師器焙烙・壺、無釉陶器皿、施釉陶器埦・皿、染付磁器碗・壺が出土している。(1)は土師器焙烙である。内外面にヨコナデ調整を施す。(3)は土師器壺である。体部内面のオサエの後、口縁部内外面にヨコナデ調整を加え、体部外面にミガキ調整を加える。(2)は備前系無釉陶器皿である。ロクロナデ、ロクロケズリの後、内面に化粧土を施す。(4)は瀬戸・美濃系と思われる施釉陶器皿である。ロクロナデ、ロクロケズリの後、灰釉を施釉し淡黄緑色に発色する。(5)は京焼系と思われる施釉陶器埦である。ロクロナデ、ロクロケズリの後、外面に２条の横線を鉄釉で施文し、内外面に灰釉を施釉する。高台脇以下は露胎である。(7)は唐津系緑釉陶器皿である。内外面とも施釉され、高台部以下は露胎である。見込み部には蛇の目釉ハギが、また高台裏にはト巾が認められる。(6)は肥前系染付磁器碗である。コンニャク印判手と称されるもので、外面に菊花文がスタンプされている。(8)は染付磁器の壺の底部と思われるもので、外面には呉須で不明文及び界線が施される。時期的には、(4)(5)には18世紀後半から19世紀前半の時期が[文献30]、(7)には17世紀後半から18世紀前半の時期が[文献31]、(6)には18世紀前半の時期がそれぞれ与えられる[文献31]。これらの遺物の年代観からＳＫ1009の廃絶時期は18世紀後半から19世紀前半にその上限が求められる。

ＳＤ3001出土遺物（ＰＬ.2.3）

ＳＤ3001からは土師器焙烙、用途不明土器、桐文形土製品、施釉陶器壺・埦・擂鉢、染付磁

器碗・皿などが出土している。出土状況から見ると、これらの遺物はＳＤ3001の埋土中から出土しており、ＳＤ3001が最終的に機能を停止した時期に溝内に廃棄されたものと考えられる。

（1）（2）（5）（6）はいずれも丹波系施釉陶器の壺である。ロクロナデ、ロクロケズリの後、外面に鉄釉を施釉する。内面は露胎となっており、ロクロ目が明瞭に観察される。(5)には鉄釉の上にさらに黒釉が飴状に施釉されている。(3)は手づくね成形の後、内外面にナデ調整を加え、外面に刺突文を施す土師器である。用途については不明である。(4)は型造り成形の桐文形土製品である。(7)は土師器焙烙である。内面刷毛目、内外面にヨコナデ調整を加える。(8)は瀬戸・美濃系の施釉陶器埦である。ロクロナデ、ロクロケズリの後全面に灰釉を施す。器面には細かい貫入が入る。(9)は染付磁器碗である。外面には呉須で笹葉文、内面には雲龍文を描く。(10)は染付磁器蓋である。外面には呉須で山水文、内面には花文を描く、(11)は丹波系施釉陶器の壺である。外面は鉄釉、白泥で施文し、全面に灰釉を施す。内面には鉄釉を施釉する。(12)は染付磁器皿である。口縁部は輪花状に成形し、外面に唐草文を施文する。口縁端部には鉄釉を施す。

(13)は丹波系施釉陶器の擂鉢である。内面には13条単位の擂し目を施し、外面には鉄釉を施釉する。底部は露胎である。(14)は京焼系施釉陶器の埦である。ロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面に白濁釉を施釉する。時期的には、（1）（2）（5）（6）(9)(10)には18世紀後半から19世紀前半の時期が[文献30]、(13)には19世紀前半から中頃の時期が[文献30]それぞれ与えられる。これらの遺物の年代観から、ＳＤ3001の廃絶時期は、19世紀中頃にその上限が求められる。

ＳＥ3001出土遺物（ＰＬ.3）

ＳＥ3001からは、埋土中より土師器皿の底部破片が１点出土している。皿は内外面をロクロナデ調整の後、底部内面に不定方向のナデ調整を加えるもので底部外面には糸切り痕が認められる。この土師器皿は、形態及び技法上の特徴から淳心学院井戸内出土の土師器皿と同タイプのものと思われ17世紀前半の時期が与えられる[文献27・28]。このことからＳＥ3001の廃絶年代は17世紀前半にその上限が求められている。

ＳＴ3001出土遺物（ＰＬ.3）

ＳＴ3001からは土師器皿が４点、墓壙内に副葬された形で検出されている。(1)は口縁部内外面のヨコナデの後、体部内面のナデを行い、底部内面と口縁部との接点にヨコナデを加え末端を上に引き上げている。底部内面にはカガミの部分をもっている。(2)(3)(4)は口縁部内外面のヨコナデを行い、底部内面にナデを加える。

これらの土師器皿は、形態及び技法上の特徴から藤本ビル土壙内出土の土師器皿と同タイプのものと思われ、16世紀後半の時期が与えられる[文献27]。このことからＳＴ3001の埋葬時期は16世紀後半にその上限が求められる。又、墓壙上面に堆積する整地土層中からは丹波系擂鉢と土師器皿が出土している。丹波系擂鉢は、体部外面指オサエの後、内外面にロクロナデ調整を加え、内外面にヘラ描きの擂し目を施すもので17世紀前半の時期が与えられる[文献30]。また土師器皿は、口

縁部内外面及び底部内面にヨコナデ調整を加えるもので、形態及び技法上の特徴から白鷺中学校土壙51出土の土師器皿と同タイプのものと思われ、時期的には17世紀前半の時期が与えられる。[文献27] このことからＳＴ3001上面に整地土層が堆積し、その機能を完全に停止する時期は、17世紀前半にその上限が求められる。

ｂ．整地土層出土遺物（PL.3.4）

整地土層出土遺物には、Ｃ調査区第１遺構面整地土層出土遺物、同区第２遺構面整地土層出土遺物及びＦ調査区瓦溜整地層出土遺物がある。

Ｃ調査区第１遺構面整地土層出土遺物

Ｃ調査区第１遺構面整地土層から出土した遺物には、無釉陶器擂鉢、施釉陶器埦、染付磁器碗・皿・徳利がある。(1)は備前系無釉陶器擂鉢である。体部内外面のロクロナデの後、内面に７条単位の擂し目を施す。口縁部外面には２条の沈線を施す。(2)は唐津系施釉陶器埦である。ロクロナデ、ロクロケズリの後、内外面に灰釉を施釉する。(3)は肥前系染付磁器の碗である。外面に呉須で柳文を施文する。(4)は肥前系染付磁器皿である。外面には呉須で４条の界線及び福文を、内面には蛸唐草文を描く。(5)は東山系染付磁器の碗である。外面に濃い藍色の呉須で文様を描く。(6)(7)はいづれも肥前系染付磁器碗である。(6)には印判手の花文が、(7)には手描きの草花文がそれぞれ施されている。時期的には(2)には17世紀後半から18世紀前半の時期が、[文献31] (3)(4)(6)(7)には18世紀前半から後半の時期が、[文献31] (5)には18世紀後半から19世紀前半の時期が[文献30]それぞれ与えられる。これらの遺物の年代観から、第１遺構面整地土層の堆積時期は18世紀後半から19世紀前半にその上限が求められる。

Ｃ調査区第２遺構面整地土層出土遺物

Ｃ調査区第２遺構面整地土層出土遺物には土師器焙烙・皿、無釉陶器擂鉢、染付磁器碗・皿がある。(1)は土師器焙烙である。体部内面刷毛目、外面ケズリ調整の後、体部内面及び口縁部内外面にヨコナデ調整を加える。(2)(3)(4)は土師器皿である。いずれも内外面にロクロナデ調整を加え、底部外面には糸切り痕が認められる。(7)は丹波系無釉陶器の擂鉢である。外面にはオサエ痕が認められ、内面はロクロナデの後、ヘラ描きの擂し目を施す。(5)(6)は肥前系染付磁器碗・仏供碗である。(5)は外面に草花文及び雲文を、(6)は外面に山水文及び界線を描く。時期的には、(7)には17世紀前半の時期が、[文献30] (5)(6)には18世紀前半の時期がそれぞれ与えられる。[文献31]

これらの遺物の年代観からＣ調査区第２遺構面整地土層の堆積時期は18世紀前半にその上限が求められる。

ｃ．遊離遺物（PL.4.5.6）

遊離遺物には、土師器皿、無釉陶器灯明皿、施釉陶器甕・壺・向付・埦・皿・灯火具、青磁筒形香炉、染付磁器壺・碗・皿・褚口・蓋、及び亀形土製品がある。

土師器

PL.4.5 (1)～(8)、(10)は土師器皿である。(1)～(8)はいづれも、内外面にロクロデ調整を施し、底部外面には糸切り痕を残す。(10)は内外面にヨコナデ調整を施す。

無釉陶器

(11)は備前系無釉陶器の灯明皿である。外面へラケズリ、内面にはヨコナデ調整を加える。内面の突帯部に块りが一ヶ所入る。

施釉陶器

施釉陶器には唐津系、丹波系、京焼系及び産地不明のものがある。

唐津系施釉陶器

唐津系施釉陶器には、刷毛目唐津向付（14）及び、灰釉皿・埦（15・16）がある。(15)(16)は高台裏に卜巾が認められる。(14)には、17世紀後半から18世紀前半の時期が[文献31]、(15)(16)には17世紀前半の時期がそれぞれ与えられる[文献31]。

丹波系施釉陶器

丹波系施釉陶器には、底部に脚を貼付し内外面に鉄釉を施すもの（12）と内面に灰釉を施し、外面に鉄釉を施すもの（24）がある。いずれも18世紀後半から19世紀前半の時期が考えられる[文献10]。

青磁

青磁には口縁部を若干肥厚させ、内面口縁部以下は露胎を呈する筒形香炉（20・21）がある。いずれも肥前系の産品と思われる[文献31]。

染付磁器

染付磁器には肥前系のものと、その他の産地不明のものがある。

肥前系染付磁器

肥前系染付磁器には壺(19)、碗、猪口がある。碗には京焼風のプロポーションをもち外面に草花文を描く小碗(22・28)、外面に草花文、底部内面に「寿」文字を描くもの(23)、梅花文を施文するもの(24)、草花文を描くもの(25)などがある。

猪口（29）は、体部外面に菊花文、内面には菱形文及び五弁蓮花文が施されている。時期的には(19)(22)(28)は18世紀前半から後半の時期が[文献31]、(29)には18世紀後半から19世紀前半の時期がそれぞれ与えられる[文献31]。

その他の染付磁器

肥前系以外の産地が考えられるものには、水草文を描く皿(27)、芙蓉手風の文様を描く小碗(26)、木葉文を描く蓋(30)、草花文を描く碗（31・32）がある。いづれも時期的には18世紀後半から19世紀前半の時期が考えられる[文献30]。

土製品

土製品には、型造り成形の後外面に褐釉を施釉する亀形土製品(33)がある。

2．瓦

今回出土した遺物の中では瓦の出土量が最も多くコンテナ約85箱分を数えた。これらの瓦は大半がＦ調査区瓦溜整地土層中より出土したもので、その形態、用途から大きく軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦に分類される。今回はこれらの瓦のうち、軒丸瓦、軒平瓦について概要を述べる。

軒丸瓦

軒丸瓦は大半が巴文瓦であるが、(1)(2)のように巴文以外のものも含まれる。(1)は退化した短い蓮弁文の中に巴文を配したもので同タイプのものが県立歴史博物館敷地内調査の際に出土している。[文献30] (2)は蓮弁を配するものである。(3)～(10)は巴文瓦である。(3)は小さな頭に長い尾のつくものでこのタイプは２点出土した。(4)は巴の尾が重なり円になるもので、同范のものが２点確認できた。(5)は勾玉状の頭に細くやや長い尾のつくものである。(6)は(5)に類似するが頭の丸いものである。(5)(6)のタイプのものは今回の出土資料中では比較的多く見られた。(7)は先端の尖った勾玉状の頭にやや短かい尾のつくもので、このタイプのものは、点出土した。(8)は丸く大きな頭に太く短い尾のつくタイプのもので２点出土した。(9)は巴の頭と尾の区別がつけ難く、一つの巴全体が先細りの勾玉状を呈し、巴頭、珠文の断面形は三角形に近い。このタイプは２点出土した。(10)は断面扁平の丸い頭に短く細い尾のつくもので、このタイプは３点出土した。

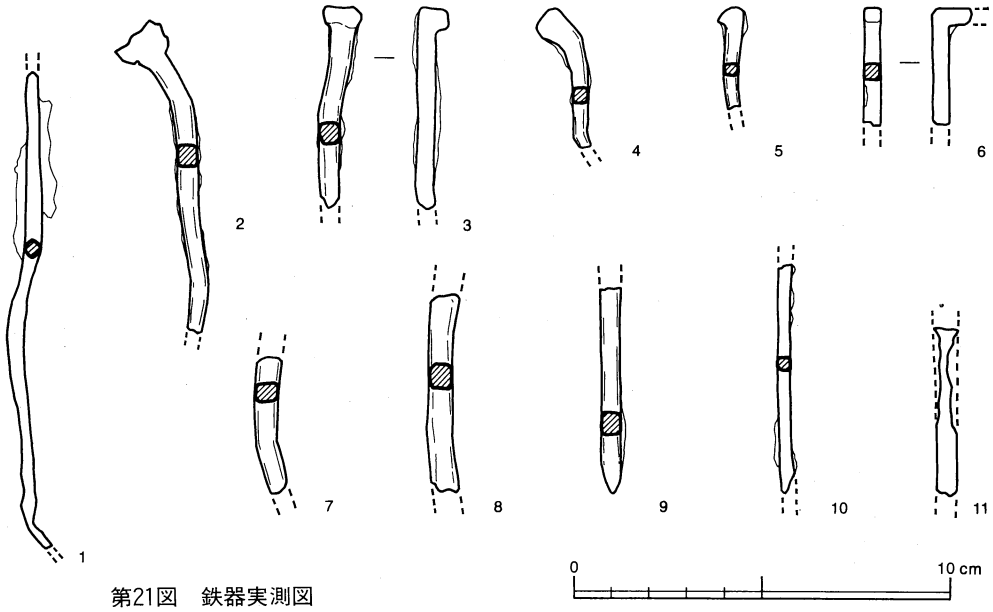
軒平瓦

軒平瓦は全て唐草文瓦である。(1)は５葉を中心に左右に２反転する唐草を配したもので、文様区は今回出土したものの中では最も広い。このタイプは３点出土した。(2)は(1)に類似するが文様区がやや狭い。このタイプのものは３点出土した。(13)は３葉を中心に２反転する唐草を配するもので唐草の末端は渦巻き状を呈する。(14)は渦巻き状の唐草の末端が下を向くものである。(15)は下向きの３葉を中心に２反転する唐草を配したものである。このタイプは９点出土した。(16)は丸く短い３葉を中心に、上向きの若葉をもつ唐草を配したものである。(17)はへ型の中心飾りの左右に、上部でつながる唐草とやや角ばる下向きの唐草を組み合わせている。(18)は突出した変形菱形の中心飾りをもつ。(19)は他のものとはやや趣きを異にする中心飾りの左右に２本の唐草を配したものである。(20)は３本の線に省略された３葉の左右に、２本の唐草を配するものである。(21)は３本の線と点の形に省略された３葉の下に、左右につながりゆるくカーブし、末端の肥厚する唐草を配する。(22)は非常に退化の進んだ唐草文である。(19)、(20)、(22)は、白鷺中学土壙51出土のものに同タイプのものが見られる。[注2]

このように今回出土した瓦類は細かい点で相違が見られるが、時期的には17世紀前半を上限とする時期に廃棄されたものと考えられる。[文献27]

鉄釘

釘は総数11本出土した。全てC調査区第１遺構面直上の暗黄褐色土中から出土している。完形品は皆無だった。(2)～(5)は釘の頭部であるが、３で判る様に断面が方形の鉄棒の一端を折り曲げて釘頭としている。(9)は先端部の破片である。また(11)は銹化が進み断面の形状は観察できなかったが、おそらく方形の角釘であったと思われる。



第21図　鉄器実測図

4.　弥生時代・古墳時代の遺物

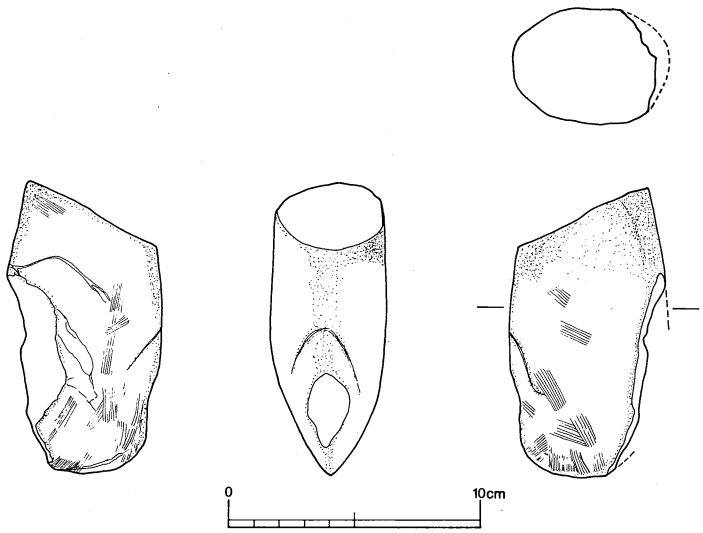
弥生時代の石斧１点と古墳時代初頭の土器少数が出土している。しかし、全て原位置を保っておらず、二次堆積である。古墳時代初頭の土器は小片が多く、図化出来るものは甕口縁部１点だけである。

蛤刃石斧（第22図）

磨製蛤刃石斧で基部を欠失しているもので、約３分の２が残存している。鉄分を多く含む層から出土しているため、表面が褐色化している。Ｃ調査区砂礫土中出土、刃部が鋭利に仕上げられた優品で、基部が欠失している以外に刃部側縁が欠けている。基部に近い半分は僅かに自然面が残されている。石材は流紋岩で、龍野周辺の的場山などで採取される流紋岩の可能性が高い。

第１表 Ｃ地区　第１遺構面直上出土釘計測表

No.	全　長(cm)	幅　(cm)	重　量(ｇ)	断面形状	出　土　位　置
1	12.7	1.05	10.7	方　形	Ｃ地区第１遺構面直上（暗黄褐色土）
2	8,4	1.3	5.2	〃	〃
3	5.3	1.05	4.25	〃	〃
4	3.8	1.85	1.9	〃	〃
5	2.8	0.75	1.2	〃	〃
6	3.1	0.05	0.95	〃	〃
7	3.6	1.7	1.6	〃	〃
8	5.2	0.75	3.7	〃	〃
9	5.45	0.6	3.2	〃	〃
10	6.1	0.4	2.6	〃	〃
11	4.45	0.65	1.4	不　明	〃



第22図　蛤刃石斧実測図

古墳時代初頭の土器（ＰＬ６）

古墳時代初頭の土師器で、甕の口縁部である。山陰系の土器で表面磨滅しているため、成形技法など判然としない。内面はヘラケズリで口縁部はヨコナデで仕上げている。凝凹線が３条以上見られる。二重口縁の土器で、復原口径19.2cmを測り、残存高は10.6cmである。凝凹線が残ることやプロポーションから山陰地方から搬入された土器であろう。胎土にはチャートなどのクサリレキを含み、外面は黄褐色、内面は褐色の色調をしている。時期的には古墳時代初頭の庄内新段階併行と考えられる。

Ⅴ．まとめ

今回の調査では、調査面積は比較的小規模であったにもかかわらず、Ｃ調査区では上下２面にわたって遺構面が確認され、廃棄壙と思われる土壙群が検出されている。またＦ調査では、土壙墓、井戸、井戸に伴う土壙、石垣状遺構、石組溝、瓦溜整地層など性格の異なる遺構が検出されている。出土した遺物も16世紀後半から19世紀中頃迄のものを含み、当該地域が少なくとも、羽柴・木下時代から明治維新に至るまで継続して生活面として利用されて来た事がうかがわれる。ここでは、出土遺物の年代観及び土層断面図の検討をもとに各遺構の形成時期について若干検討し、さらに現存する城下町絵図との比較検討から、当該地域の土地利用の変遷についても少し触れてみたい。

まず遺物の年代観及び土層断面図の検討をもとに各遺構の形成時期を考えると以下のように６期に分けられる。

Ⅰ期　集石土壙墓ＳＴ3001の構築時期

Ⅱ期　井戸ＳＥ3001の構築及び石垣状遺構ＳＡ3001の構築時期

Ⅲ期　井戸ＳＥ3001の廃絶、瓦溜整地層の堆積及び石組み溝ＳＤ3001の構築時期

Ⅳ期　第２遺構面形成層の堆積時期－第２遺構面の機能開始時期

Ⅴ期　第１遺構面形成層の堆積時期－第１遺構面の機能開始時期

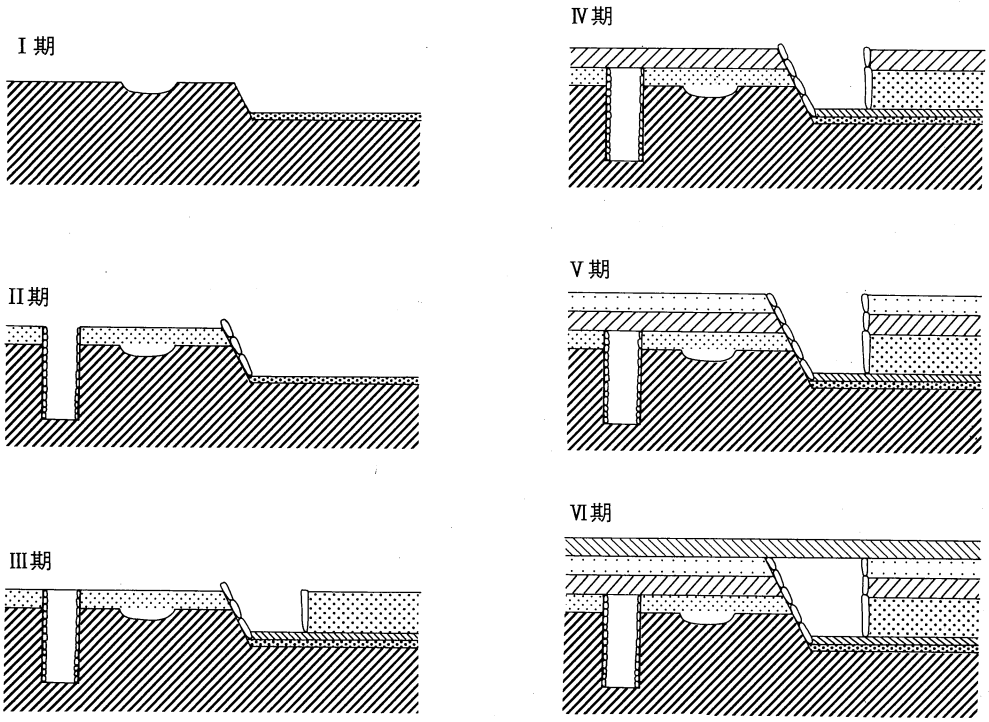
Ⅵ期　石組構ＳＤ3001の廃絶時期　－第１遺構面の機能停止時期

以上、各遺構の形成時期について模式的に記述したが、各期の様相について少し補足説明を加えておく。

Ⅰ期は集石土壙墓ＳＴ3001の構築時期であるが、この段階での調査区全体の地形は、調査区中央部のやや東寄り部分で高さ50cm程度の段差があり、段より西側部分では暗茶褐色土をベースとする生活面が形成されているが、段より東側部分ではヘドロ状の泥土が堆積して、湿地もしくは池状を呈する。

Ⅱ期は、ＳＴ3001上に整地土層が堆積し、整地土層上面より井戸ＳＥ3001が構築される。この段階で、段差部分に石垣状遺構ＳＡ3001が構築され、屋敷地と湿地部分とを画する機能を果していたものと考えられる。

Ⅲ期は、ＳＥ3001の廃絶時期である。同時にＳＡ3001の東側部分には、屋敷で使用されたと思われる瓦が大量に放棄されて瓦溜整地層が形成され、調査区全体にフラットな面が形成される。ＳＤ3001の構築時期については、瓦溜整地層形成後か、あるいは瓦溜整地形成と同時期か、明確にはしえない。しかし、時期差が認められるとしても、前後の時期の関係から、そう大幅な



第23図　遺構形成過程模式図

時期差は認められず、ここでは一応同時期と考えておく。この段階では検出された遺構はＳＤ3001のみで、ＳＤ3001がどのような施設に伴うものか明確ではないが、屋敷地としての利用はこの段階で停止したものと考えられる。

Ⅳ期は、第２遺構面形成土層の堆積が終了し、第２遺構面が生活面として機能を開始する時期である。この段階でも、ＳＤ3001は上面に石積みを行い依然として機能している。検出された遺構は他にＣ調査区の土壙があるのみで、土地利用についてはⅢ期とほぼ同じである。

Ⅴ期は第１遺構面形成土層の堆積が終了し、第１遺構面が生活面として機能を開始する時期である。この段階では、ＳＤ3001は依然として機能している。検出された遺構は他にＣ調査区の土壙があるのみで、土地利用については、Ⅲ期、Ⅳ期とほぼ同じである。

Ⅵ期は、ＳＤ3001の廃絶時期である。この段階で、ＳＤ3001には埋土が堆積し、完全にその機能を停止する。同時に第１遺構面上にも整地土層が堆積し、その機能を停止する。

次に出土遺物の検討から各期の所属時期について考えてみたい。

Ⅰ期は、ＳＴ3001から出土した土師器皿の年代観から16世紀後半の時期を与えることが出来る。

II期は、ＳＥ3001、ＳＡ3001とも保存した為、堀り方内の遺物を検出する事は出来なかったが、ＳＴ3001の上面に堆積する整地土中から出土した丹波焼擂鉢及び土師器皿の年代観から、17世記前半の時期を与える事が出来る。

III期は、ＳＥ3001の埋土中より出土した土師器皿及び瓦溜整地層中より出土した瓦の年代観から17世紀前半にその上限を求める事が出来る。また下限は上層に堆積する第２遺構面整地土層出土の遺物の年代観から18世紀前半の時期に求める事が出来る。ここではII、III期にはさまれる時期すなわち17世紀中葉から後半の時期を考えておく。

IV期は第２遺構面整地土層出土の遺物の年代観から、18世紀前半にその上限を求める事が出来る。

V期は第１遺構面を形成する整地土層出土の遺物の年代観から18世紀後半から19世紀前半にその上限を求める事が出来る。

VI期は、ＳＤ3001内に堆積する埋土中より出土した遺物の年代観から19世紀前半から中頃にその上限を求める事が出来る。

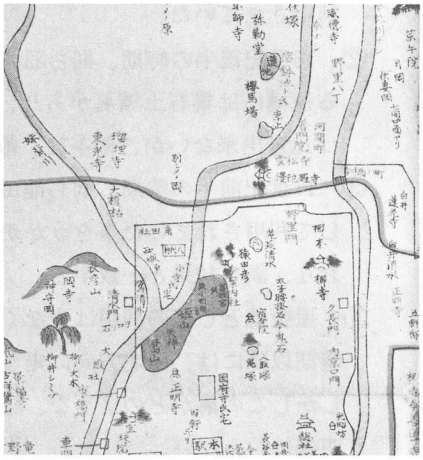
以上をまとめると、本調査区内における土地利用の変遷は少なくとも16世紀後半に墓地が存在する地域としての利用で開始され、17世紀前半の時期には屋敷地として利用されている。

屋敷地としての利用は少なくとも17世紀中頃から後半の時期には停止される。以後19世紀の中頃に至る迄、２面にわたる生活面が形成されているが、検出された遺構が石組み溝及び土壙が存在するのみで、どのような利用のされ方がなされたのか、発掘データーからだけでは、明確にはしえない。19世紀の中頃には、石組溝も完全に埋めたてられ、明治維新を迎える事になる。

このことを、現存する絵図[注3]を参考にしてもう少し詳しく見てみたい。

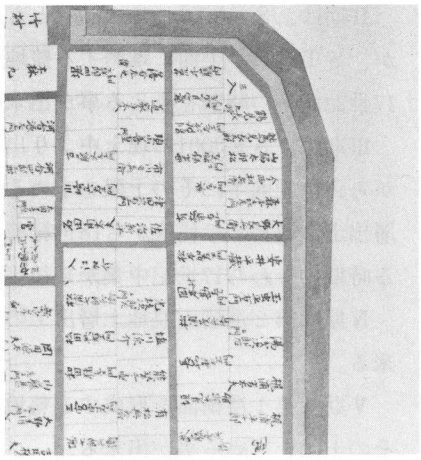
Ｉ期すなわち、16世紀後半の状況を表わしていると考えられるものに「姫路附近の古絵図」がある。今回の調査区を絵図上のどの位置に比定するかは、厳密に考証することは太だ困難である。本調査区は、現在調査区の東側に残っている土塁の位置及び、野里門との位置関係から城内、中曲輪の東北隅に位置する事が分る。中曲輪の位置は、本絵図と比較対象すると二股川の右岸、椰本社附近に相当するものと考えられ、16世紀後半、則ち池田輝政入城以前には神社もしくは寺の境内に位置していた事が推測される。

II期、則ち、池田輝政入城直後の状況を示すものには、「池田家姫路城内侍屋敷図」がある。この絵図では、当該地域は侍屋敷として利用されており、今回の発掘結果とほぼ一致する。



第24図　姫路附近の古絵図(部分)

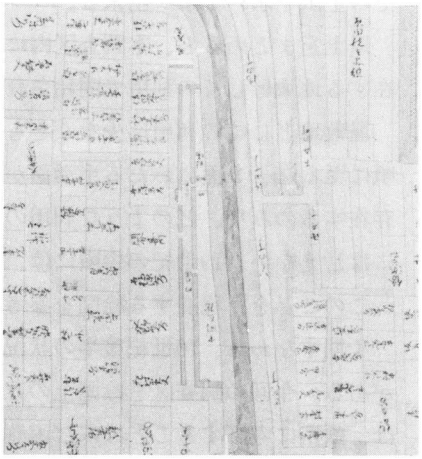
Ⅲ期、則ち、17世紀後半の状況を写したと思われる絵図には、「元禄８年、播州姫路城図」がある。この絵図では池田時代には屋敷地として利用されていた調査区附近は「射場」および「馬場」として描かれており、発掘調査の結果として表われた屋敷地としての利用の停止という結論とほぼ一致している。但し、今回の調査では、「射場」あるいは「馬場」の存在する事を立証するデーターは何ら得られていない。従って、当該地域が絵図の上からは「射場」および「馬場」として利用されていた地域内に存在した事は、ある程度推測されるものの、今回検出された石組み溝ＳＤ3001が「射場」あるいは「馬場」に伴うものか、あるいは他の施設に伴うものか、現在の所、確定出来ない。



第25図　池田家　姫路城内侍屋敷図（部分）

Ⅴ期、則ち、19世紀前半頃の状況を描いたと思われる、「文化年間、姫路城侍屋敷図」にも、本調査区周辺は、「矢場」および「馬場」敷地内となっており、この状態で明治維新を迎えることになる。

以上、絵図との検討を含めて、今回の発掘調査区での成果をまとめると次のようになろう。



第26図　元禄８年 播州姫路城図（部分）

① 本調査区は、出土遺物からみて、少なくとも16世紀後半から19世紀の中頃迄、生活面として継続利用されていた。

② 16世紀後半の時期、則ち羽柴・木下時代に属する遺構には集石土壙墓があり、絵図上では正確には比定出来ないが、「椰本社」敷地内にあたるものと思われる。

③ 17世紀前半の時期、則ち池田、第１次本多時代に属する遺構には井戸があり、屋敷地として利用されていた事をうかがわせる。絵図の上からも、屋敷地としての利用が示されており、調査結果と一致する。

④ 屋敷地としての利用は少なくとも17世紀中頃から後半の時期には停止している。この時期以降には、南北方向に走る石組溝が継続して、明治維新の時期まで使用されている。しかしこの溝がどのような、施設に伴なって使用されたものか発掘データーからだけでは明確にしえない。

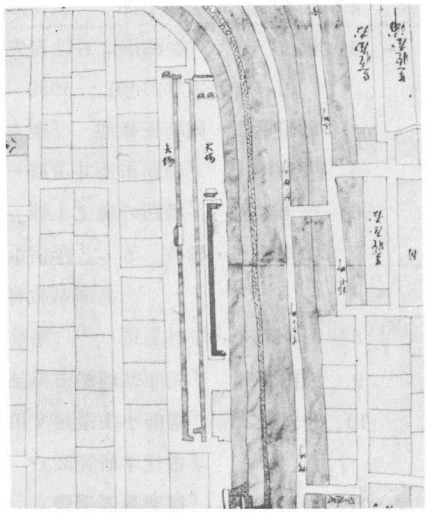
⑤ 絵図の上からは、元禄年間から文化年間すなわち17世紀後半から19世紀前半頃までは、

屋敷地としての利用は停止され、本調査区附近は「矢場」および「馬場」として利用されていた事がわかる。

但し、今回検出された石組み溝を直ちに「矢場」および「馬場」内の施設として認め、これをもって「矢場」あるいは「馬場」の存在を示す遺構と考える事は、現在の所、若干の無理がある。

⑥　石組溝は、19世紀中頃、すなわち、明治維新前後の時期には、使用されなくなっている。

以上のように、今回の調査では、羽柴・木下時代から、明治維新に至る迄の本調査区に於ける土地利用の変遷をある程度明らにしえた。しかし、調査区が小規模である事、調査方法、遺物の分析、絵図との比較検討を通じて、現時点では、明確にしえない点、方法上問題とされる点など今後に残された課題は少なくない。次にこれらの点について述べてみたい。



第27図　文化年間 姫路侍屋敷図（部分）

①　今回の調査では、同一遺構面における遺構の広がりを求める方向で遺構の検出を試みたが、調査区が分散していること、各時期の遺構が重複していること、上面で見落した遺構が、下層で検出されることなど、必しも厳密に遺構面の区別をしえなかった。

②　F調査区で検出された遺構群はほぼ同一面で検出されている。従ってこれらの遺構の形成、廃絶時期については出土遺物の年代観をもってこれらを決定している。しかし、遺物に関しては、16世紀後半から17世紀前半のものについては、土師器をもとにした編年観が漸く成立しつつあるが、17世紀後半から19世紀前半にかけては、肥前系の陶磁器など一部の物を除いて、必ずしも細かい編年基準が成立しているとは言い難い。従ってここでは、II期以降の所属時期については、17世紀中頃から後半、18世紀前半、19世紀前半を上限とする時期といったような大まかな年代観しか与えられなかった。

③　城下町の復元を行うには、発掘成果と絵図あるいは文献との比較検討が必要であることは言を待たない。今回は、若干、絵図との比較を行ったが、それについては絵図自体の成立時期の検討及び、発掘調査位置と絵図上の位置との厳密な比定等の手続きが必要である。今回の報告では、上記の２点については殆ど行っていない。

④　現在迄、姫路城内については、市教委、県教委によって、かなりの地点で調査が行なわれている。今回の発掘成果と、それらとの比較検討についても、今回は行えなかった。

以上のように、城内の調査については残された課題が少なくない。今後の調査成果をまってこれらの点については、改めて報告したいと思う。

注.

1. 昭和61年度、兵庫県教育委員会によって調査が実施された。
2. 姫路教育委員会、山本博利、秋枝　芳氏の御教示による。
3. 今回使用した絵図については全て姫路市蔵のものを使用させて頂いた。

引用・参考文献

1 橋本政次　『姫路城史』　上・中・下　1952
2 松本正信・加藤史郎　『土に埋もれた文化財－姫路の先土器時代～古墳時代－』　1974
3 秋枝　芳　「姫路市における先土器について－とくに御着城遺跡出土遺物を中心として－」『旧石器考古学21号』　1980　旧石器談話会
4 増田重信・岡崎正雄他　『福本遺跡発掘調査の記録』　1980　神崎町教育委員会
5 今里幾次　『姫路市辻井遺跡－その調査記録』　1971　古代播磨研究会
6 今里幾次　「姫路の縄文土器」『播磨考古学研究』　1980　兵庫考古研究会
7 山本博利・秋枝　芳　「今宿丁田遺跡」　『昭和57年度　兵庫県埋蔵文化財調査年報』　1985　兵庫県教育委員会
8 杉原荘介・小林三郎　「兵庫県千代田遺跡」　『日本農耕文化の生成』　1961　日本考古学協会
9 浅田芳郎　「兵庫県姫路市橋詰遺跡」　『日本考古学年報13』　1965　日本考古学協会
10 今里幾次　「播磨小山遺跡ⅤⅢ地点の弥生式土器－弥生式文化初頭の一様相－」『古代学研究32』　1962　古代学研究会
11 増田重信　「播磨黒表遺跡」　『姫路古代誌７』　1960
12 鎌木義昌　『市之郷遺跡発掘調査概報』　1971　姫路市教育委員会
13 山本博利・秋枝　芳　『八代深田遺跡』　1977　姫路市教育委員会
14 上田哲也・河原隆彦　「姫路名古山遺跡と銅鏡の笵型」　『播磨の弥生文化』　1966　東洋大学付属姫路高校考古学研究部
15 松下勝他　『播磨長越遺跡』　1979　兵庫県教育委員会
16 松下勝・山本三郎　『播磨権現遺跡－兵庫県姫路市権現遺跡調査概報－』　1972　兵庫県教育委員会
17 松本正信・加藤史郎　『御旅山３号墳発掘調査報告』　1971　姫路市教育委員会
18 松本正信・加藤史郎他　『兼田』　1982　姫路市教育委員会
19 梅原末治　「播磨壇場山方墳の調査」　『人類学雑誌39－2』　1924　日本人類学会
20 松本正信・加藤史郎　『宮山古墳発掘調査概報』　1970　姫路市教育委員会
21 武藤誠　「御輿塚古墳」　『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告14』　1939　兵庫県
22 『史跡播磨国分寺跡発掘調査報告』　1970　姫路市教育委員会
23 『播磨国分寺跡発掘調査概報(Ⅱ)』　1971　姫路市教育委員会

24　多淵敏樹　「播磨国分寺の調査と保存について」　『兵庫県の歴史』5　1971
25　山本博利・秋枝芳　『本町遺跡』　1984　姫路市教育委員会
26　山本博利・秋枝芳　『御着城発掘調査概報』　1981　姫路市教育委員会
27　長谷川真・堀田浩之　『特別展　掘り出された城下町・姫路』　1985　兵庫県立歴史博物館
28　山本博利・秋枝芳・山上雅裕　「特別史跡姫路城跡(淳心学院)」　『昭和58年度兵庫県埋蔵調査年報』　1986　兵庫県教育委員会
29　山本博利・秋枝芳　「特別史跡姫路城跡（国立姫路病院)」　『昭和58年度　兵庫県埋蔵文化財調査年報』　1986　兵庫県教育委員会
30　岡田章一・長谷川真　『特別史跡姫路城跡――兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告ー』　1985　兵庫県立歴史博物館
31　大橋康二　「肥前磁器の変遷と出土分布――発掘資料を中心としてー」・『国内出土の肥前陶磁』　1984　九州陶磁文化館

第2表　姫路城々下町関係略年表

西　暦	年　号	事　　項
1333	元弘3	赤松則村、姫山に縄張を定める。 （この頃の城下の形勢）姫山の南方には江川・高尾・宿村・中村・福中村・東方には白井・津田野村・竹中村・志深・北方には野里村・八代村などの集落あり。宿村・中村の境に願人寺、青見川西辺に岡主兵主神、姫山東方には椰本に総社・善導寺、小野江清水の傍に猿田彦社、その東方に角岳社、姫山の北方八代に角ノ社・東光寺、姫山西方の岡に岡大歳社、姫山南方の中村に願道寺あり。
1346	天平1	姫山々頂の称名寺を山下に移し、城域を4丁四方とし、姫山西北方に武士屋敷をおき、青見川西方に馬場を設ける。
1439	永享11	総社修復される。 （この頃の城下の形勢）姫山の麓には、称名寺その他の寺院・民家による姫路村あり。
1468	応仁2	城域を西は妹背川辺から東は猿田彦社後方、北は二股川南際、南は後世の西城戸の東西15町、南北5町とし姫山に本丸・鶴見丸・亀居丸を築き、家士を国内の要害その他の土地に配置する。 （この頃の城下の形勢）姫山の南方に藤岡・高尾・宿村・福中村・東方に志深庄・国府寺村・大竹村、西方に八代村・西城戸村などの集落あり。総称して、国府・府中・国衙庄などという。
1504	永正1	この頃、志深に国府寺氏の政所、宿村・福中村に目代、津田野村・大竹村・西城戸村・中村などに名主あり。 （この頃の城下の形勢）八代村・志深村・井出村・山脇村などに大身の家臣が構居・住居を構える。国府寺政所・大村政所などあり。
1545	天正14	姫路に本丸と二の丸あり。家臣は姫山西北方の武家屋敷に住む。 （この頃の城下の形勢）姫山の南方に姫路村・中村・福中村・宿村・高尾・江川・八木、東方に白井・大竹村・津田野村・神屋村・市之郷村・国府寺村・北方に野里・平野・大野郷・井出・杉之内、西方に岡・山野井・八代などの集落あり。総称として、国府・府中・国衙庄などという。
1561	永禄4	姫山の長谷寺を総社境内に、姫山々麓の称名寺を青見川の辺に移す。
1564	永禄7	総社の拝殿・表門再建され、板葺から瓦葺となる。 （この頃の城下の形勢）志深政所あり。
1569	永禄12	別所長治、兵3000で姫山の南約14、15町まで攻め寄せ、民家を焼き払う。 （この頃の城下の形勢）姫山の南方に姫路村（戸数約100戸）・宿村（戸数約100戸）・高尾の宿（戸数約40戸）江川（戸数約30戸）・上福中村（戸数約40戸）・下福中村（戸数約50戸）・井上村（戸数約50戸）・八木村（戸数約300戸）、東方に大竹村（戸数約200戸）・津田野村（戸数約20戸）・国府寺村（戸数約50戸）・神屋村・市之郷（戸数約130戸）、北方に井出・野里村・平野村・白国村・西方に小部山南麓の高井(戸数約10戸)嵐山付近の森の里（戸数約10戸）・城戸の宿・山野井村（戸数約40戸）・八代村などの集落あり。姫山東方に観験院・般若寺・長谷寺・願入寺・称名寺・総社などあり。
1580	天正8	姫山の刑部大神を姫路の町外れに移し、新たに姫山の東峰を中心として3層の天守を持つ城を築く。英賀城下の町人・百姓を城下に移し、市場を立てる。 （この頃の城下の形勢）西国街道に龍野町あり。
1583	天正11	刑部大神、総社に移る。 （この頃の城下の形勢）市街化、小姓町・材木町・河間町・寺町などあり。

西　暦	年　号	事　　項
1601	慶長6	市川を付替え、城下の宿村・中村・国府寺村などの民家及び寺院を移転し、縄張を定める。曲輪を内曲輪・中曲輪・外曲輪とし、内曲輪に桜門・絵図門・喜斎門・北勢隠門・南勢隠門が、中曲輪に中ノ門・総社門・鳥居先門・内京口門・久長門・野里門・市ノ橋門・車門・埋門・鵤門が、外曲輪に外京口門・備前門・飾磨門・北条門・竹ノ門があり、野里堀留に針貫門あり。中曲輪に武家屋敷、外曲輪に町家があって、外曲輪の数ヶ所に足軽・同心の組屋敷あり。正明寺・願入寺・善導寺・雲松寺・正法寺・慈恩寺・長源寺など現在の地に移り、案内社・総社再建される。
1603	慶長8	八代御茶屋でき、八代東光寺本堂再建される。 この頃、山野井龍峯寺・西魚町西福寺・野里最明寺できる。
1612	慶長17	刑部大神城内に移る。
1614	慶長19	総社の御旅所再建される。
1618	元和4	居城・向屋敷など未完成のものを建設し、新たに薬師山下・御堂裏町・竹中村などに武家屋敷を置き、地内町の旧池田家組屋敷100間四方に船場本徳寺できる。 この頃、群鷺山の麓の西岸寺できる。
1624	寛永1	総社の舞殿・拝殿・門・瑞籬修復される。龍野町・堺町・竹田町・生野町・橋之町の材木屋、船場川端に移り、材木町と称す。
1625	寛永2	総社の神橋再建される。 この頃、案内社の修復及び西福寺の再建おこなわれる。
1629	寛永6	総社の鳥居修復される。 （この頃の城下の形勢）中曲輪武家屋敷328戸、外曲輪武家屋敷271戸、組屋敷838戸、町人家屋本屋2,470戸、諸役仕分新屋敷無役300戸、総数4,207戸、町数78町。
1639	寛永16	刑部大神成内から総社境内に移る。
1642	寛永19	総社の神橋・井垣・鳥居修復される。
1649	慶安2	城内の刑部大神の社殿及び市之郷天神の社殿再建される。 この頃、山野井と龍野町1丁目～3丁目の間、北は群鷺山、南は船場本徳寺付近までを組屋敷とする。
1650	慶安3	総社の鳥居修復される。
1652	承応1	総社に石の大鳥居できる。
1654	承応3	刑部大神に石鳥居できる。 この頃、案内社に石鳥居できる。
1663	寛文3	総社の拝殿・舞殿・玉垣など修復される。 （この頃の城下の形勢）町屋総戸数2.845戸、寺院63ヶ寺

西　暦	年　号	事　　項
１６７１	寛文11	刑部大神の社殿再建される。
１６７２	寛文12	総社の井垣修復される。
１６７４	延宝２	総社の拝殿再建され、城内の拝殿修復される。
１６７６	延宝４	忍町の薬師寺を飾西郡栗山に移し、同町を組屋敷とする。
１６７９	延宝７	総社の神橋架替えられる。
１６８１	天和１	総社境内刑部大神の社殿修復される。
		（この頃の城下の形勢）中曲輪以内を内山下、中曲輪以外を外山下、外曲輪以内を総構といい、中曲輪の大名町・桜町・市之橋門内・総社境内・上案内社・下案内社・上岐阜町・下岐阜町・下三方・裏下馬・内京口門から長久門及び野里門から清水門に至る堀の内側など一帯に武家屋敷があって、野里門と清水門の間内側を東上ノ町・西上ノ町・東中ノ町・西中ノ町・堀端という。外曲輪の北条口・五軒邸・下寺町裏・光源寺前・十二所前北側・新身町・北条口から飾磨門に至る堀の内側・山野井・鷹匠町・柳町・増井町・本徳寺南側などに武家屋敷あり。同心町・五郎右衛門邸・神谷北裏などに組屋敷があって、足軽町という。坊主町・西岸寺町・餌差町などの組屋敷の外に新たに神谷市之郷に組屋敷を置き、枳殻町という。久長門北方・十二所前南側・備前町から飾磨門に至る堀の内側・河間坊主町などに中間屋敷あり。町奉行２人の官宅は下岐阜町に、会所は大名町東西両端南側に、足軽割場・供廻長屋は下三方に、鷹部屋は市之橋門内に、上三方蔵は向屋敷の北に、下三方蔵は喜斎門南方に、船場蔵は船場川下流西岸に、桐の馬場は久長門と野里門の中間の堀近くにあり。町屋は外曲輪及び各門付近にあって、内豆腐町・外豆腐町・こてや町・東紙屋町・西紙屋町・呉服町・魚町・上いの町・下いの町・鍛冶屋町・比丘尼町・鋳物師町・石田町・河間坊主町・吹屋町・屑屋町・備前橋町・川ノ片町などという。神社には、総社・十二所・案内社などあり。寺院には、光源寺・幡念寺・南学院・明王院・観音寺・不動院・妙円寺・正法寺・心光寺・善導寺・景福寺・妙行寺・大法寺・法花寺・妙国寺・千射仏・円光寺・妙善寺・妙立寺・長福寺・浄専寺・成就寺・長松寺・正明寺・星応寺・正覚寺・誓光寺・雲松寺・金正寺・慶雲寺・本徳寺・西岸寺・浄土寺・法恩寺などあり。
１６８５	貞享２	総社の井垣再建される。
１６８７	貞享４	総社の神橋架替えられる。
１６９１	元禄４	刑部大神修復される。
１６９７	元禄10	総社の神橋架替えられる。
１６９９	元禄12	勢隠の刑部大神の１社できる。
１７０２	元禄15	総社の井垣再建される。
１７０４	宝永１	枳殻町の組屋敷の枳殻、塀になる。
		（この頃の城下の形勢）戸数、本家2,919戸、借家4,425戸、計7,344戸。
１７１０	宝永７	姫路船場の一村を取り立てて中村とする。
１７１１	正徳１	総社の神橋架替えられる。
１７１２	正徳２	暴風雨のため市川増水氾濫し、城下は洪水に襲われる。

西　暦	年　号	事　　項
１７１３	正徳３	総社の幣殿・拝殿・神殿・神輿殿・宝殿・神馬厩舎・築地塀など修復される。
１７２３	享保８	総社の井垣再建される。
１７２４	享保９	総社の末社８社及び番所の屋根瓦葺になる。
１７２９	享保14	総社の大拝殿の屋根葺替えられ、幣殿・社外の井垣再建される。御供舎東方の井垣掛塀になる。
		（この頃の城下の形勢）武家屋敷（組屋敷を含む）2,737戸、民家6,632戸、計0,369戸。
１７４２	寛保２	内曲輪に武家屋敷のある他、北条口・光源寺前・隆岸寺屋敷・下寺町裏・神屋枳殻・五軒邸・五郎右衛門邸・竹ノ門内・正明寺裏・井ノ町・河間町・坊主町・中島・山野井・八代・餌差町・鷹匠町・吉田町・薬師山下柿山伏・光専寺裏・中ノ丁・小姓町・二十軒屋・御堂前・御堂裏町・博労町などに武家屋敷・組屋敷あり。町奉行屋敷は上案内社に、江戸蔵は東屋敷の向にあり。足軽屋敷は大破荒廃す。
		（この頃の城下の形勢）戸数、本家2,919戸、借家3,713戸、計6,632戸。
１７４３	寛保３	総社の瑞籬再建される。
		（この頃の城下の形勢）戸数、本家2,919戸、借家4,425戸、計7,344戸。
１７４６	延享３	暴風のため八代茶屋の長屋全壊す。
１７４９	寛延２	大出水あり。城下の被害は家屋の流失161戸、全壊99戸、半壊215戸。備前橋・車門橋・市ノ橋・清水門橋など流失し、埋門・鴨門・中ノ門・飾磨門・外京口門・竹ノ門など崩壊す。船場大蔵半壊・船場本徳寺大破・同築地全壊・上片町善正院流失・十二所権現社大破・庚申堂大破・八代茶屋流失し、八軒家・枳殻町の組屋敷をはじめとする中曲輪の桜町通から南方一帯・野里８ヶ町・船場方面の武家屋敷・組屋敷・町屋など浸水する。枳殻町の組屋敷町屋となり、橋元新町という。八軒屋裏の町家を畑とし、本徳寺裏向を上下片町・正光寺南方を大蔵前町という。景福寺吉田町孝顕寺跡に移り、総社門内に好古堂できる。一直線であった二階町通を福中の方への折れ曲り道路とする。
１７５０	寛延３	家中屋敷門前の河川を浚渫し、新たな水留・水払を禁ず。総社修復され、神橋再建される。
１７５２	宝暦２	城内外の河川から新たに溝渠を穿ち、屋敷内に水を取ることを禁ず。
		（この頃の城下の形勢）本町国府寺家に本陣、西二階町那波家に脇本陣、福中町に旅籠屋、西神屋町・東崎に木賃宿、本町に町大年寄の会所あり。立場の橋元新町の新茶屋とする。
１７７３	安永２	出水し、船場方面に被害あり。
１７７３	天明３	外京口橋修復される。

西　暦	年　号	事　　項
１７９９	寛政11	刑部大神修復される。
		この頃、好古堂内に木活所できる。
１８０８	文化５	大風雨あり。家士の屋敷の被害、全壊３戸、半壊15戸、長屋門崩壊８棟、門崩壊21棟、足軽長屋全壊16戸、半壊５戸、町屋の被害全壊1,344戸、半壊727戸。
１８１０	文化７	革会所できる。
		この頃、元塩町に熊川舎できる。
１８１６	文化13	総社門内から大手馬先屋敷に好古堂移り、規模拡張される。
１８１７	文化14	大手西屋敷に武芸稽古場でき、城内桧厩跡に稽古場移る。
１８２１	文政４	総社門内西角に国産会所できる。
１８２２	文政５	東魚町に学問所できる。
１８２８	文政11	神屋新茶屋できる。
１８２９	文政12	好古堂増築される。
１８３０	天保１	堅町に質会所でき、総社門内元好古堂跡にベッ甲細工所できる。
１８４２	天保13	刑部大神修復される。大手門西方に好古堂の演武場・講会所・日館・素読寮・表稽古場・書籍庫２棟・寄宿寮８棟・道場など新築される。
		この頃、好古堂向側に国学寮できる。
１８７４	明治７	内曲輪内に大阪鎮台歩兵第10連隊駐屯す。
１８７５	明治８	本城・向屋敷・東屋敷などをとりこわし、兵舎の新築を始める。
１８８５	明治18	中曲輪桜町に歩兵第８旅団司令部を置く。
１８９６	明治29	内京口門内に第10師団司令部を、車門内に歩兵第39連隊を置く。引き続き、野里門内に姫路兵器支廠・姫路衛戍監獄・陸軍徴治台を、久長門内に姫路衛戍病院を、内京口門内に姫路被服支廠を、総社門内に姫路連隊司令部・姫路偕行社を、外曲輪光源寺前に姫路憲兵隊を置く。

特別史跡姫路城跡－兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告－より転載

第３表　出土土器等観察表　法量の（　）は復原径・残存高

PL	出土遺構	No.	種　別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
1	SK1001	1	土師器	熔烙	(29.5)	(6.7)		内面体部ナデ→内外面口縁部ヨコナデ 外面体部ケズリ→内外面口縁部ヨコナデ （タテ→ヨコ）	体部外面に未調整部分がのこる（オサエのみ）
		2	染付磁器	仏供碗	底径 (4.2)		体部内彎 脚部外方に開く	外面呉須(淡い）界線、不明文 底部外面露胎	肥前系（くわらんか手）18世紀前半 底部外面砂附着
		3	施釉陶器	甕or壺			蛇ノ目高台	外面灰釉施釉、高台部露胎、内面露胎	底部内面重ね焼痕
		4	染付磁器	徳利			体部内彎	色調やや青味を帯びる。外面呉須草花文、内面露胎、外面ロクロケズリ痕	肥前系、くわらんか手、18世紀
		5	染付磁器	碗	底径 (4.3)			外面呉須花文、高台裏「口徳年製」銘	高台裏釉拭キ取り 肥前系
	SK 1002	1	土師器	皿	(11.8)			内・外面ロクロナデ	
		2	土師器	皿	(11.2)			内・外面ロクロナデ、	
		3	土師器	皿	(7.6)	(1.1)		内・外面ロクロナデ、底部糸切り痕	
		4	施釉陶器	埦	(10.7)	7	高台部外方に開き気味 体部直立、口縁端部尖り気味 底部外面ト巾	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→内・外面施釉（白濁色に発色）	内・外面に細かい貫入、高台畳付釉カキ取り、美濃系若しくは献上手唐津
		5	施釉陶器	埦	底径 （5）		比較的高い高台	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→施釉（暗黄灰色に発色）	器面に細かい貫入 京焼系
		6	染付磁器	碗	(8.8)		口縁部やや外反	外面呉須不明文	
		7	染付磁器	仏供碗	(7.8)	6.4	底部外面蛇ノ目状に块りを入れる 脚部直立、体部や内彎気部 口縁端部尖り気味	色調やや青味を帯びる 外面呉須、松葉文、界線（２条） 脚部以下露台、露胎部淡赤褐色	肥前系
	SK 1008	1	染付磁器	壺	底径 (6.0)			外面呉須界線、内面露胎	酸化炎焼成の為、全体に赤っぽく発色
	SK 1009	1	土師器	焙烙				内・外面ヨコナデ	
		2	無釉陶器	皿	(8.8)		平底、体部斜め上方に立ち上がる	ロクロナデ→ロクロケズリ→内面化粧土ハケ塗り	備前系

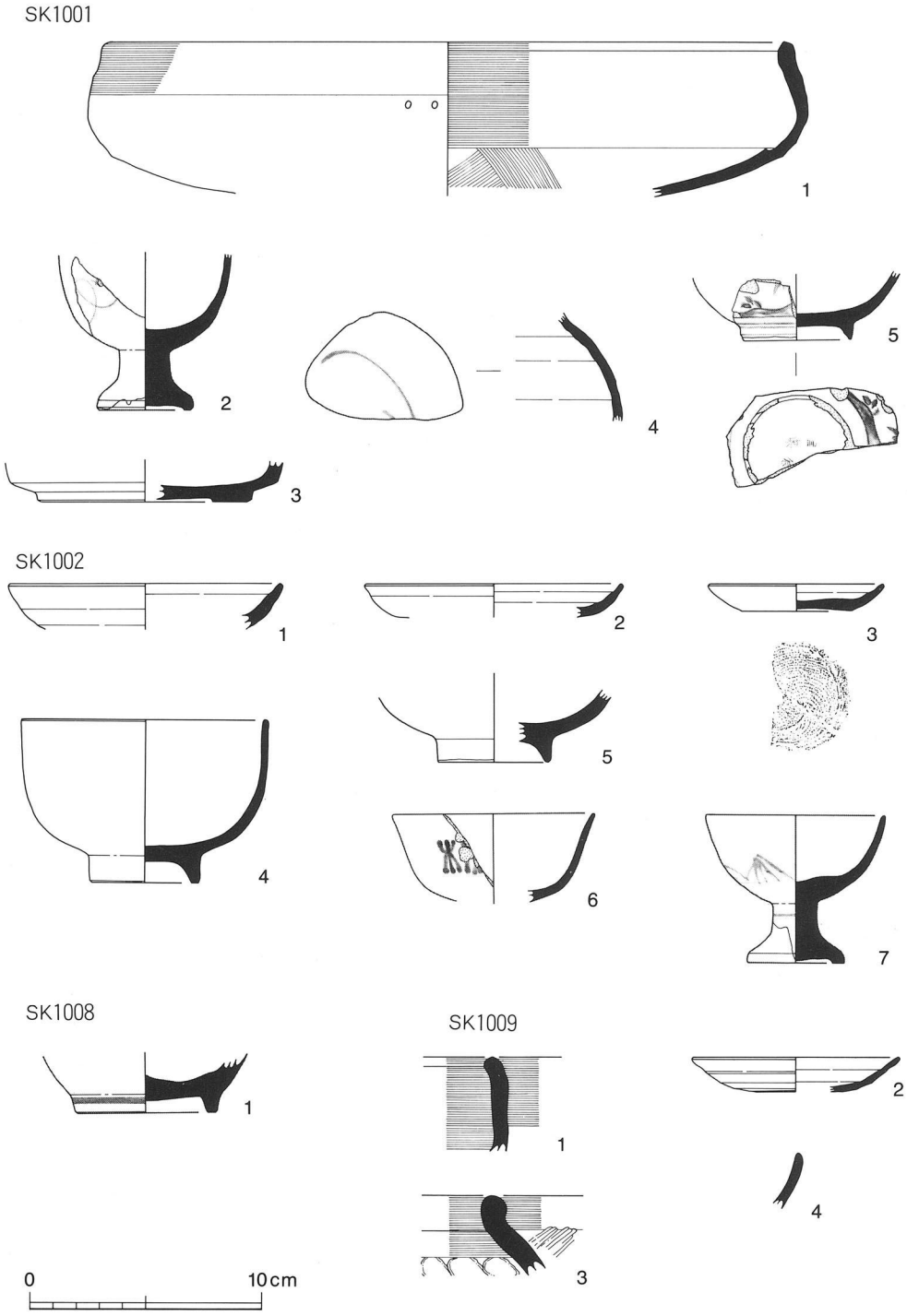
PL	出土遺構	No.	種　別	器種	法　量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　　考
					口径	器高			
		3	土師器	壺	(7.6)			内面体部オサエ→口縁部内外面のヨコナデ→体部外面のミガキ	
		4	施釉陶器	皿				ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉（淡黄緑色に発色）	器面に細かい貫入瀬戸・美濃系？
2		5	施釉陶器	埦	(8.3)	6.2	体部直立、比較的幅広い高台	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→鉄釉２条横線施文→内・外面灰釉施釉、高台脇以下露胎	京焼系？
		6	染付磁器	碗	(7.6)		口縁部外反	釉調やや青味を帯びる。外面呉須菊花文(コンニャク印判)	肥前系（くわらんか手）18世紀前半
		7	施釉陶器	皿	底径(8.5)		輪高台	内・外面緑釉施釉、見込み部蛇ノ目釉ハギ、高台部以下露胎、高台裏縮緬状、ト巾	唐津系緑釉、17世紀後半～18世紀前半
		8	染付磁器	壺	底径(5)			釉調やや青味を帯びる。外面呉須、不明文、界線、内面露胎	
	SD 3001	1	施釉陶器	壺	(10.4)		平底、体部外上方に立ち上がる	ロクロナデ→ロクロケズリ→外面鉄釉施釉、内面露胎、体部内面ロクロ目明瞭	丹波系
		2	施釉陶器	壺	底径(10.4)		平底、体部外上方に立ち上がる	ロクロナデ→ロクロケズリ→外面鉄釉施釉、内面ロクロ目明瞭	胎土中、砂粒を含む(石英等)、丹波系?
		3	土師器	香炉？	(4.8)	(1.9)		手づくね成形→内・外面ナデ→外面刺突文	
		4	土製品	桐文形土製品				型造り成形	
		5	施釉陶器	壺	底径(8.5)		平底、体部やや内彎	ロクロナデ→ロクロケズリ→内・外面鉄釉施釉→外面黒釉飴状掛	丹波系
		6	施釉陶器	壺	(10.6)		平底、体部外上方に立ち上がる	ロクロナデ→ロクロケズリ→外面鉄釉施釉、内面露胎、体部内面ロクロ目明瞭	外面・白色土附着丹波系
		7	土師器	焙烙				内面刷毛目→内・外面ヨコナデ	
		8	施釉陶器	埦	(9.0)		口縁部外反、口縁端部尖り気味	ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉（淡黄緑色に発色）	細かい貫入、瀬戸・美濃系（黄瀬戸）
		9	染付磁器	碗	底径(4.2)		体部外上方へ開き気味に立ち上がる	色調はやや青味を帯びる。外面呉須笹葉文、内面呉須雲龍文(見込み部)	高台畳付、釉拭キ取り
		10	染付磁器	蓋	底径(3.4)			外面呉須山水文 内面呉須花文	高台畳付、釉拭キ取り

PL	出土遺構	No.	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
					口径	器高			
		11	施釉陶器	壺	(11.8)		口縁部直立、口縁端部水平	ロクロナデ→ロクロケズリ→鉄釉施文 白泥施文→灰釉施釉 内面鉄釉施釉	丹波系？
		12	染付磁器	皿	(20.2)		口縁部輪花状に成形	外面呉須唐草文、内面呉須施文 口縁端部、鉄釉施釉（口紅）	
		13	施釉陶器	擂鉢	底径 (9.4)		平底、体部大きく内彎	ロクロナデ→ロクロケズリ→内面クシ描→外面鉄釉施釉、内面底部露胎	内面クシ描 13条1単位、丹波系
3		14	施釉陶器	埦	(12.5)		体部内彎	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉（白濁色に発色）	京焼系？
	SE 3001	1	土師器	皿				内・外面ロクロナデ→底部内面のナデ（不定方向）底部糸切り痕	
	ST 3001	1	土師器	皿	9.8	2.3		口縁部内・外面のヨコナデ→底部内面のナデ→内面の底部と口縁部の接点のヨコナデ(末端を上へ引き上げる)	底部内面にカガミの部分を持つ
		2	土師器	皿	11.4	2.6		口縁部内・外面のヨコナデ→内面底部ののナデ	
		3	土師器	皿	11.2	2.9		口縁部内・外面のヨコナデ→内面底部ののナデ	
		4	土師器	皿	11.2	2.7		口縁部内・外面のヨコナデ→内面底部のナデ	
	ST 3001 上面	1	無釉陶器	擂鉢	(27.8)			外面体部オサエ→内・外面のロクロナデ→ヘラ描→体部内面のナデ	丹波系、17世紀前半
		2	土師器	皿	(8.8)	(1.5)		口縁部内・外面、内面底部のヨコナデ	
	C区第1遺構面整地土層中	1	無釉陶器	擂鉢	(26.0)		体部、直線的に外上方に立ち上がる 口縁部直立	内外面のロクロナデ→内面のクシ描 →外面のロクロケズリ →口縁部外面の沈線	外面凹線2条、内面凹線2条、内面クシ描7条1単位、胎土砂粒を含む、備前系
		2	施釉陶器	埦	(11.6)		口縁部外反	ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉（淡暗褐色に発色）	唐津系
		3	染付磁器	碗	(10.2)		体部内彎	外面呉須（淡い）雨中柳文施文	肥前系(くらわんか手)、18世紀代
		4	染付磁器	皿	底径 (7.7)			外面呉須界線4条 福文内面呉須蛸唐草文、界線、見込み部不明文	内・外面細かい貫入、肥前系

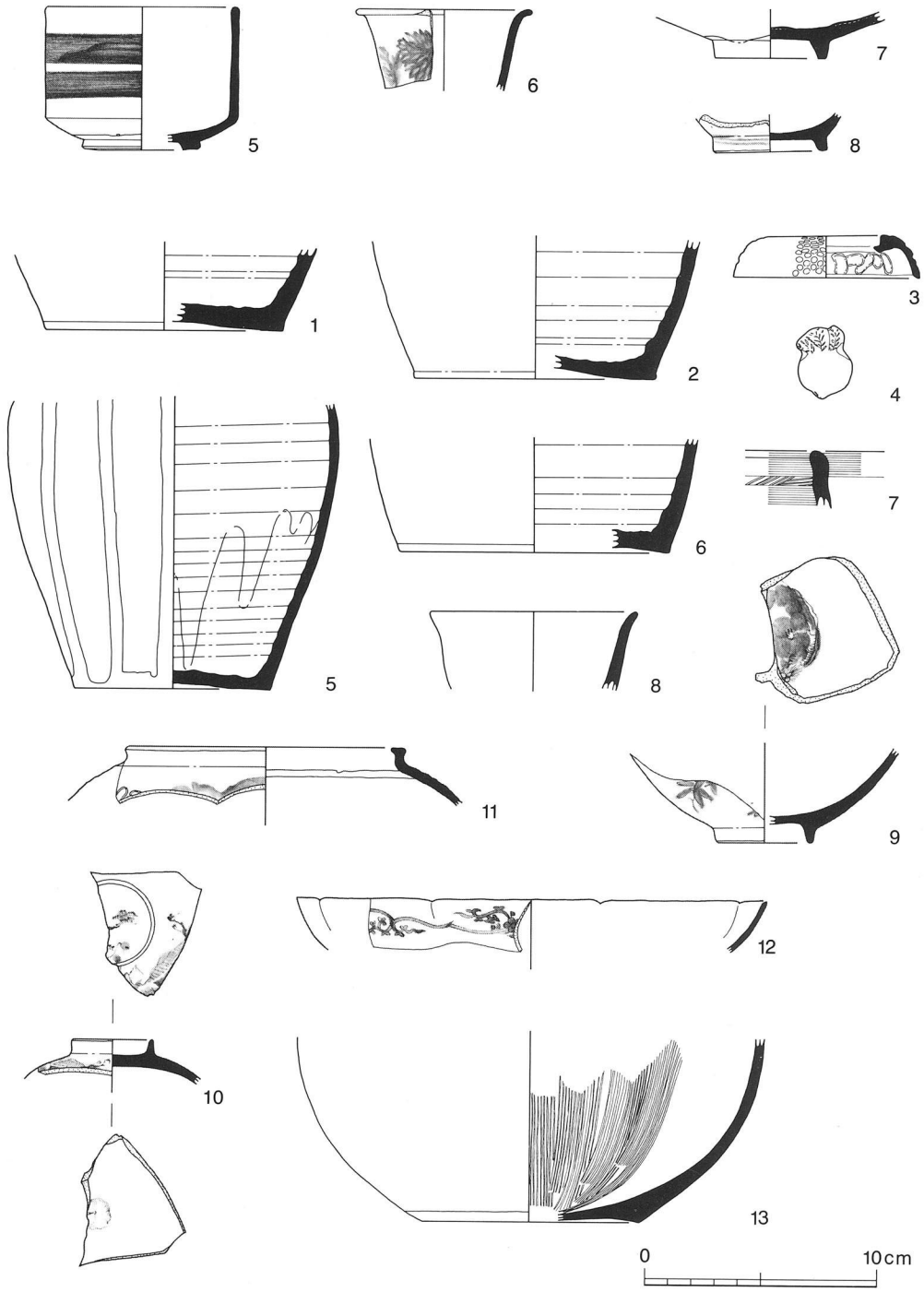
PL	出土遺構	No.	種別	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
4		5	染付磁器	碗	底径 (6.0)			高台部外面呉須（藍色）雷文帯、不明文	高台畳付、釉丁寧に拭キ取り、東山系
		6	染付磁器	碗	(10.2)		体部内彎、薄手に成形	外面呉須界線２条、花文（印判手）	肥前系？
		7	染付磁器	碗				外面呉須（やや黒ずむ）草花文	肥前系、18世紀
	C調査区第２遺構面敷地土層中	1	土師器	焙烙	(27.7)			内面の刷毛目→体部内面のヨコナデ 外面体部ケズリ→口縁部内外面のヨコナデ	
		2	土師器	皿				ロクロナデ、底部糸切り痕	
		3	土師器	皿	(12.7)	(2.2)		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		4	土師器	皿	(10.0)	(1.8)		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		5	染付磁器	碗	(9.4)	(6.5)	体部直立、比較的薄手に成形	体部外面呉須草花文、雲文施文	体部外面細かい貫入、高台畳付の釉、丁寧に拭キ取り、肥前系？
		6	染付磁器	仏供碗	(8.7)	6.3	底部外面碁笥底状に块る、脚部直立、体部内彎	外面呉須界線、山水文、界線色調やや黄味を帯びる。	肥前系 底部畳付の釉カキ取り
		7	無釉陶器	擂鉢				外面オサエ、内面ロクロナデ→ヘラ描擂し目	
	遊離遺物（ＺＺ）	1	土師器	皿	(10.3)	(1.7)		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		2	土師器	皿	8.25	1.9		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		3	土師器	皿	8.5	1.6		ロクロナデ、底部糸切り痕	
5		4	土師器	皿	(9.3)	(1.6)		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		5	土師器	皿	7.3	1.5		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		6	土師器	皿	(9.8)	(1.6)		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		7	土師器	皿	8	1.4		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		8	土師器	皿	7.8	1.7		ロクロナデ、底部糸切り痕	
		9	施釉陶器	灯火具	底径 3.3	2	平底、体部外上方に開く	手づくね成形、内面指頭圧痕 内面施釉（淡黄緑色に発色）	

PL	出土遺構	No.	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
					口径	器高			
		10	土師器	皿				内・外面ヨコナデ	
		11	無釉陶器	灯明皿	(8.6)	1.4	内面凸帯部抉り1ヶ所	外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ	備前系
		12	施釉陶器	甕	底径(15)		平底、底部外面に脚貼付	内・外面ロクロナデ→外面ロクロケズリ→脚貼付→内・外面鉄釉施釉→外面灰釉飴状に施釉	底部外面砂附着胎土中砂粒多く含む、丹波系、
		13	施釉陶器	壺	(8.7)		平底、体部外上方に立ち上がる	ロクロナデ→ロクロケズリ→内面灰釉施釉、外面灰被り	丹波系、胎土中、砂粒を含む
		14	施釉陶器	向付			口縁部水平に外反、一部ひねり	内・外面、茶褐色釉、白濁釉施釉	唐津系（刷毛目唐津）18世紀初頭
		15	施釉陶器	皿	底径(4)		三ヶ月高台 高台裏ト巾	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉(灰釉)、高台脇以下露胎	底部内面、胎土目跡3ヶ所、唐津系、17世紀初頭
		16	施釉陶器	埦	底径(4.5)		高台裏ト巾	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉(灰釉)、高台脇以下露胎	唐津系 17世紀初頭
		17	施釉陶器	埦	底径(5.6)		比較的幅の広い高台		
		18	施釉陶器	埦	底径(4.5)		輪高台(付高台)	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→内・外面施釉(灰釉)、高台脇以下露胎	内・外面、細かい貫入、京焼系
		19	染付磁器	壺	底径(5.8)			色調やや青味を帯びる、 外面呉須(淡い)界線	高台畳付、釉カキ取り、砂附着、肥前系(くらわんか手)?
		20	青磁	筒形香炉	(14.4)		体部直立、口縁端部丸みを帯びる	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→施釉、口縁部内面以下及び内面露胎	肥前系
		21	青磁	筒形香炉			口縁部肥厚 体部直立	外面施釉、内面口縁部下面以下露胎 体部ロクロ明瞭	肥前系
		22	染付磁器	小碗	(7.4)	3.4	高台比較的小さい、体部内彎、口縁端部尖り気味	外面呉須草花文	高台畳付釉カキ取り、器面若干虫喰い、京焼風プロポーション、肥前系
		23	染付磁器	碗	底径(3.8)			外面呉須(やや黒ずむ)草花文、内面見込み部「壽」字文	器面細かい貫入、高台畳付釉拭キ取り、肥前系くらわんか手、18世紀代

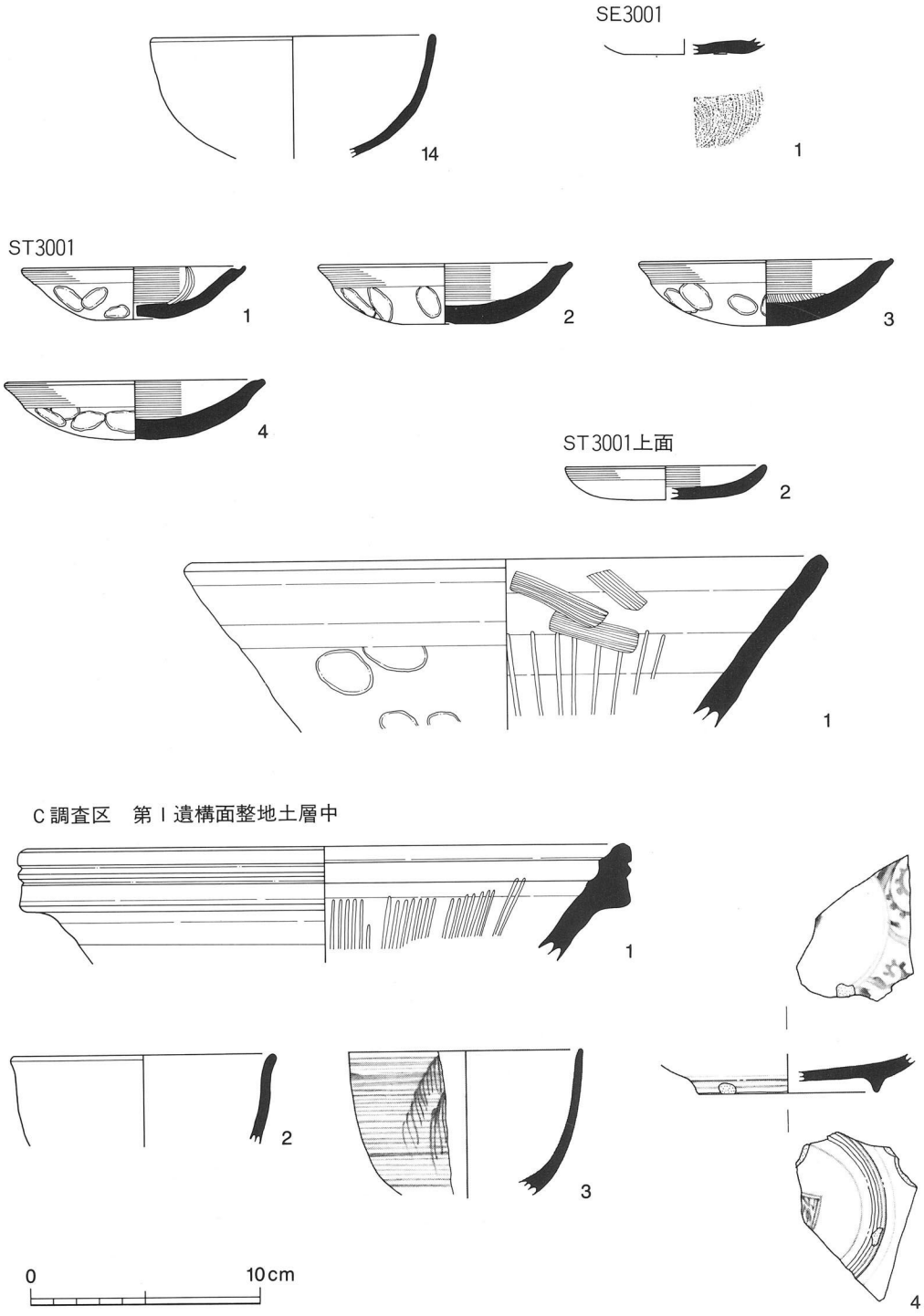
PL	出土遺構	No.	種　別	器種	法　量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　　考
					口径	器高			
6		24	染付磁器	碗	(11.6)		体部内彎 口縁端部水平	外面呉須、梅花文施文	肥前系、高台畳付釉拭キ取り、京焼風プロポーション
		25	染付磁器	碗	底径 (4.1)		比較的高い高台 体部内彎	釉調やや青味を帯びる。 外面呉須、草花文、界線	高台畳付、釉拭キ取り、砂付着 肥前系
		26	染付磁器	小碗	(6.3)	4	体部やや内彎 口縁端部尖り気味	外面呉須、芙蓉手風文、界線（2条）花文	高台畳付、釉拭キ取り
		27	染付磁器	皿	底径 (5.8)			内面呉須、水草文	外面釉切れの箇所有、高台畳付の釉カキ取り、砂付着
		28	染付磁器	小碗 (杯)	(5.3)	2.3	高台比較的小さい	内面呉須、花文	高台畳付の釉カキ取り、京焼風プロポーション、肥前系
		29	染付磁器	猪口	(8.3)	6.1	高台比較的小さい、体部直立	外面呉須、菊花文、斜格子文、界線 内面呉須、菱文、界線(2条)、見込み部五弁連花文、釉調やや青味を帯びる	高台畳付の釉カキ取り 肥前系
		30	染付磁器	蓋	(10.1)		体部内彎、口縁端部やや尖り気味	外面呉須、木葉文、内面呉須、界線	
		31	染付磁器	碗				外面呉須、草花文	
		32	染付磁器	碗	底径 (3.4)			外面呉須、草花文、界線(2条)、 高台裏界線	
		33	土製品	亀形土製品			形造り成形	外面褐釉施釉	器面に細かい貫入



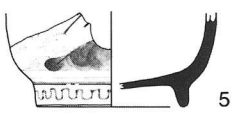
PL.1　出土遺物実測図

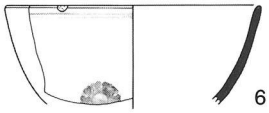


PL. 2　出土遺物実測図

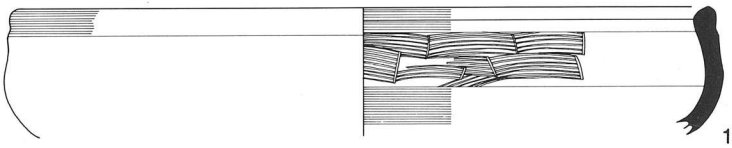

SE3001
14
1
ST3001
1
2
3
4
ST3001上面
2
1
C調査区　第Ⅰ遺構面整地土層中
1
2
3
4
0
10cm

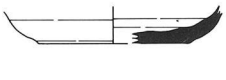
PL. 3　出土遺物実測図

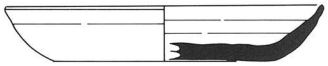


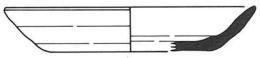


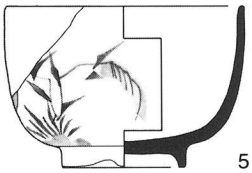
C調査区　第２遺構面整地層土中

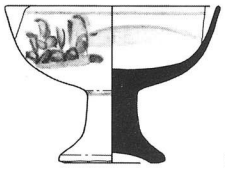


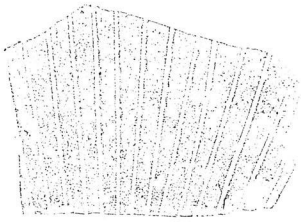


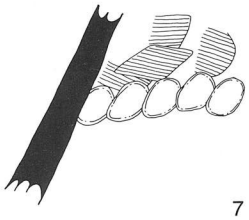




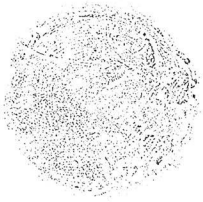




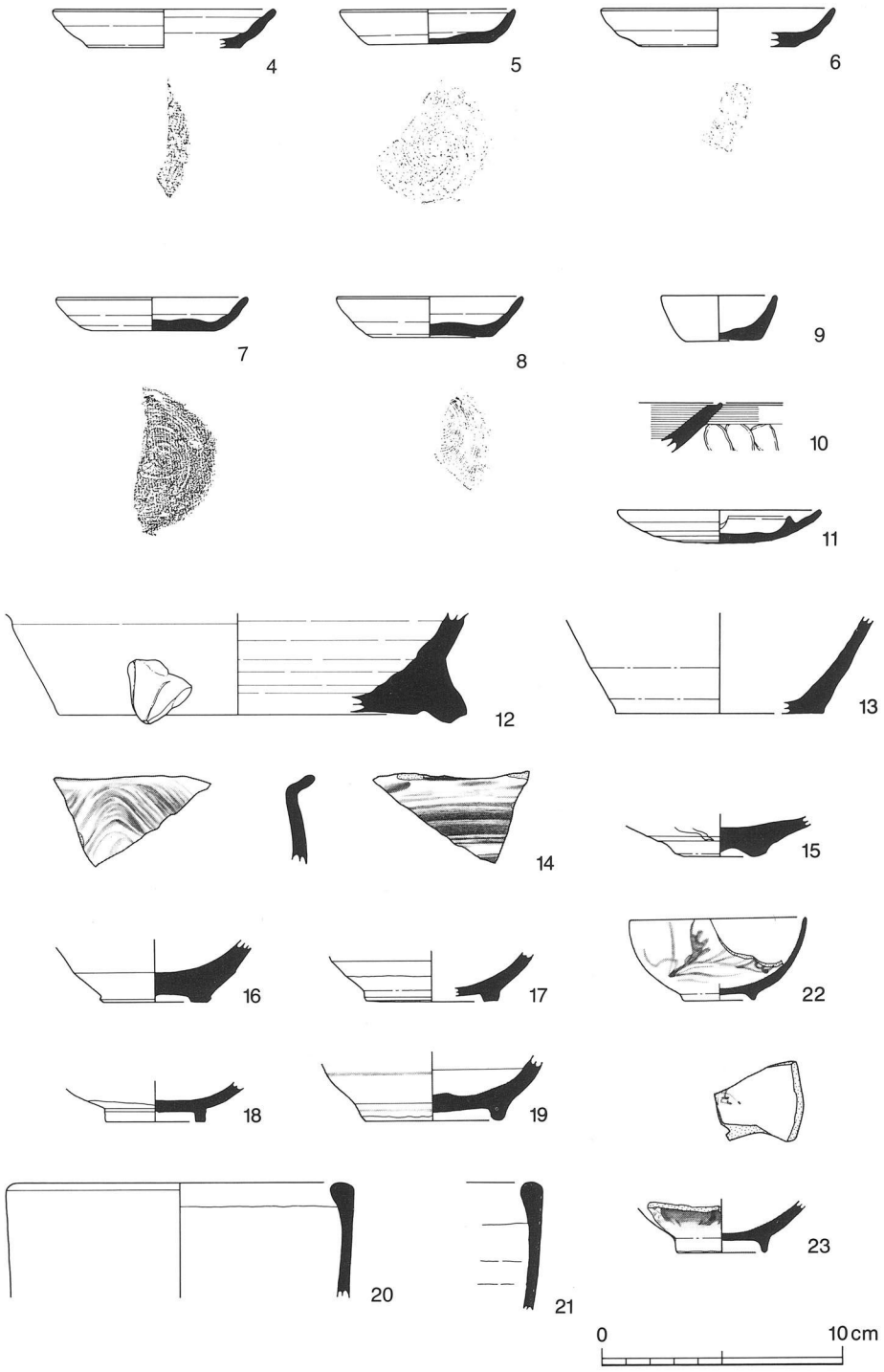




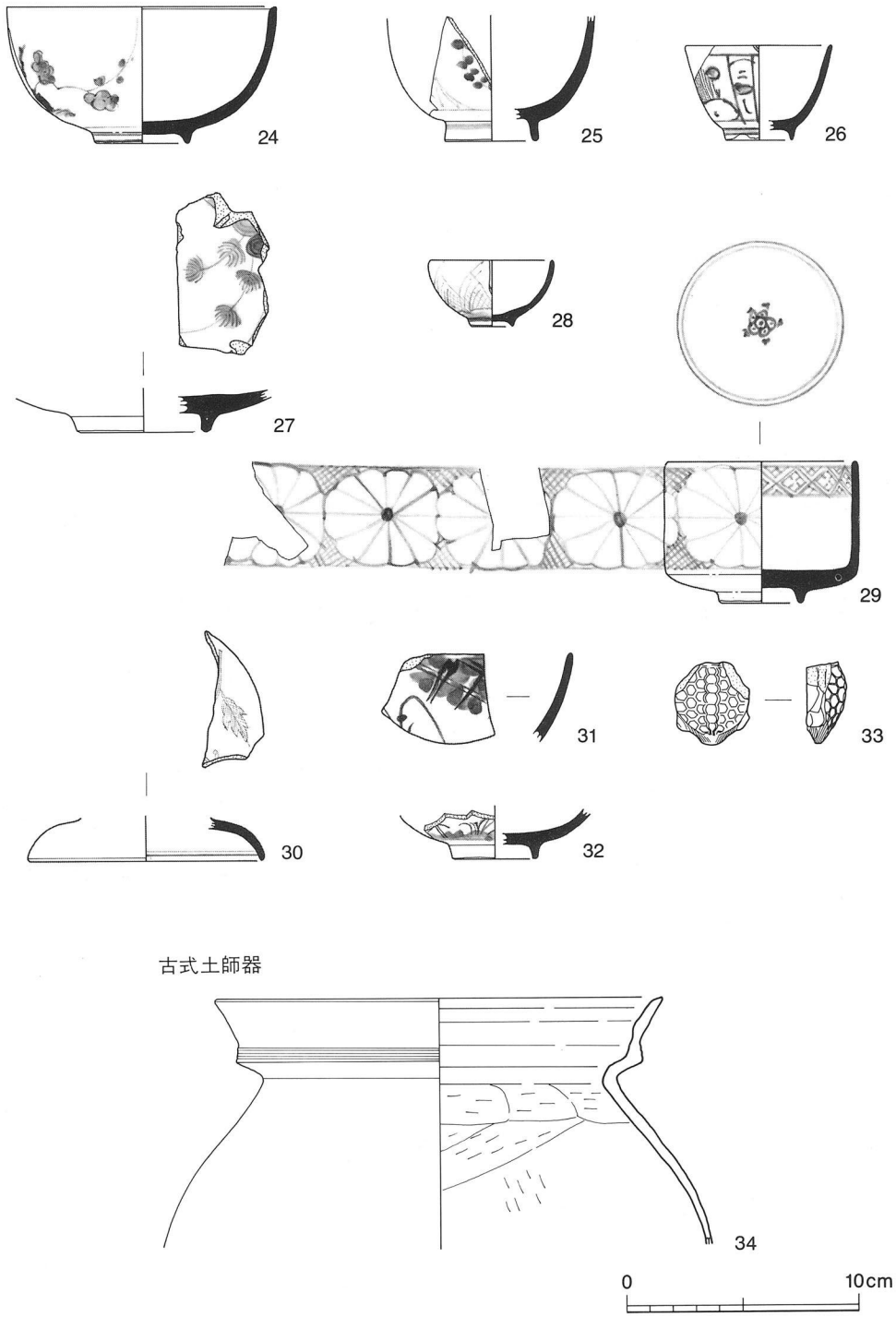
遊離置物(ZZ)



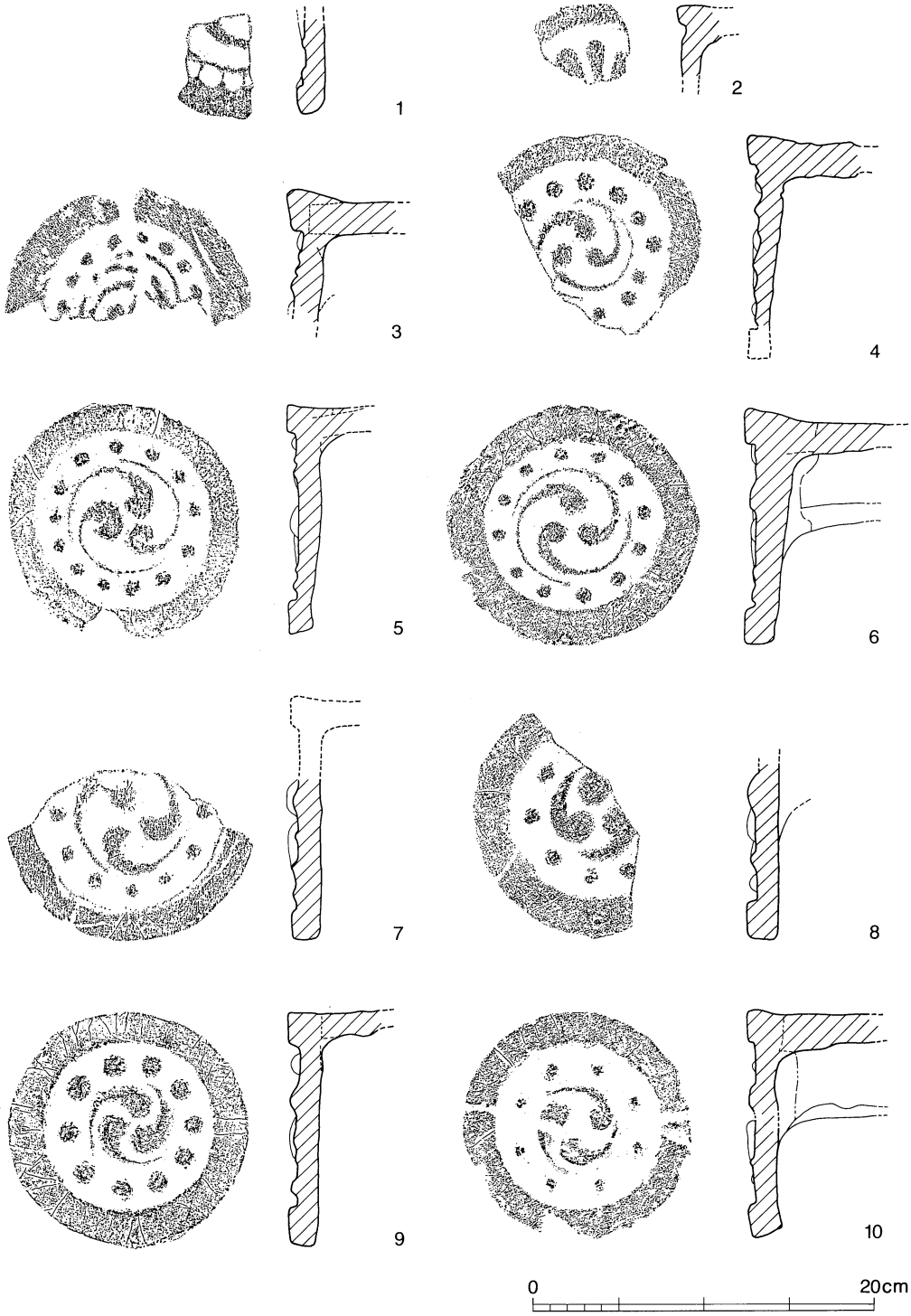
ＰＬ４．出土遺物実測図



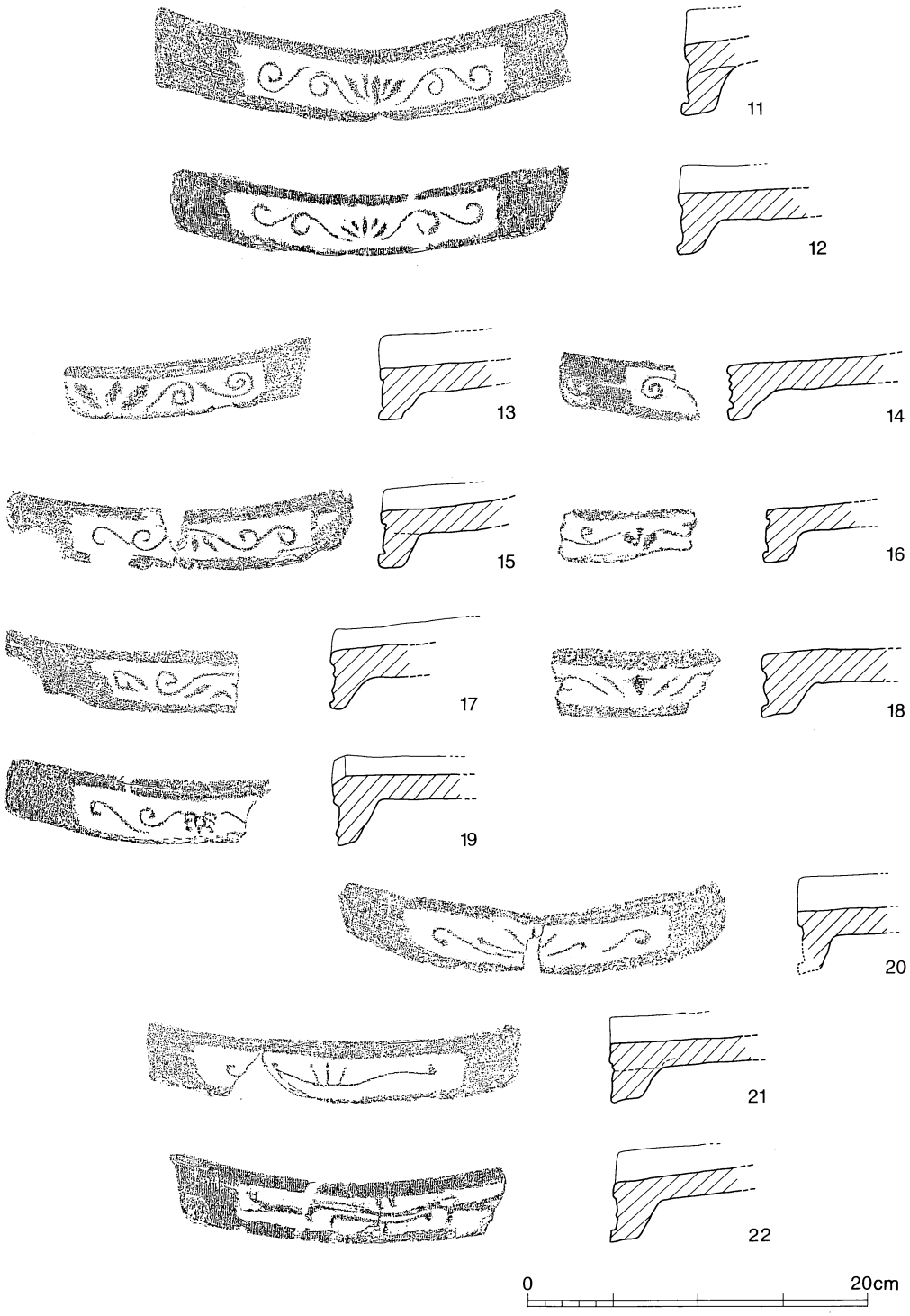
ＰＬ５．　出土遺物実測図



PL6　出土遺物実測図

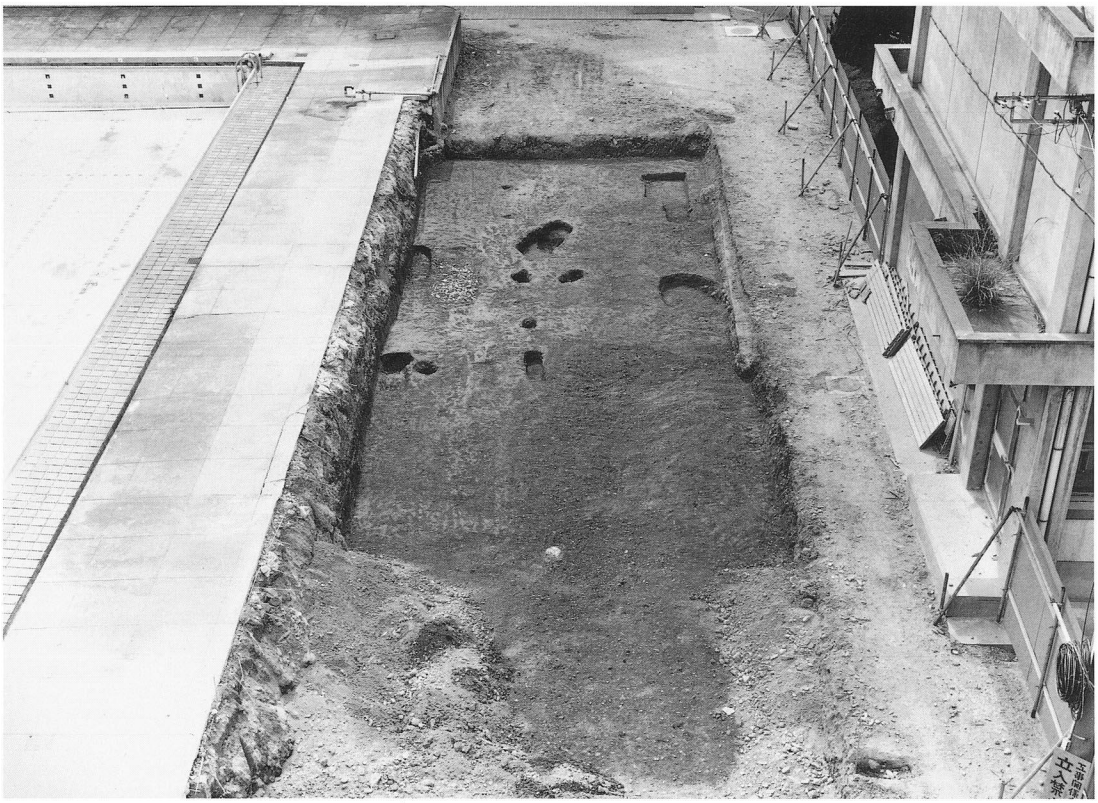


PL. 7 瓦実測図



PL.8 瓦実測図

姫路城跡空中写真



C調査区第１遺構面（北から）

C調査区第２遺構面（南から）

Ｆ調査区全景（東から）

Ｆ調査区東半全景（南から）

石組溝全景（南から）

石組溝全景（北から）

石組溝遺物出土状態（北から）

石組溝・石垣の切り合い

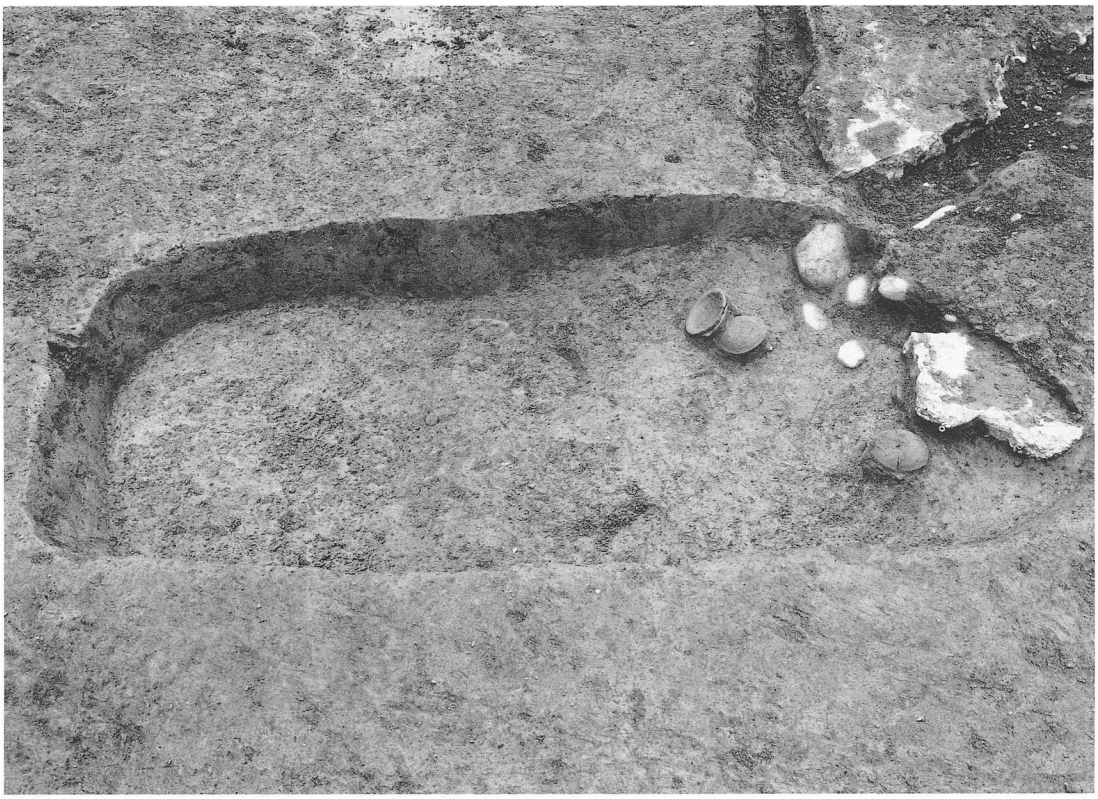
池状遺構底

F地区東半土層断面

集石土壙墓堆積状況

集石土壙墓堆積状況

集石土壙墓全景（西から）



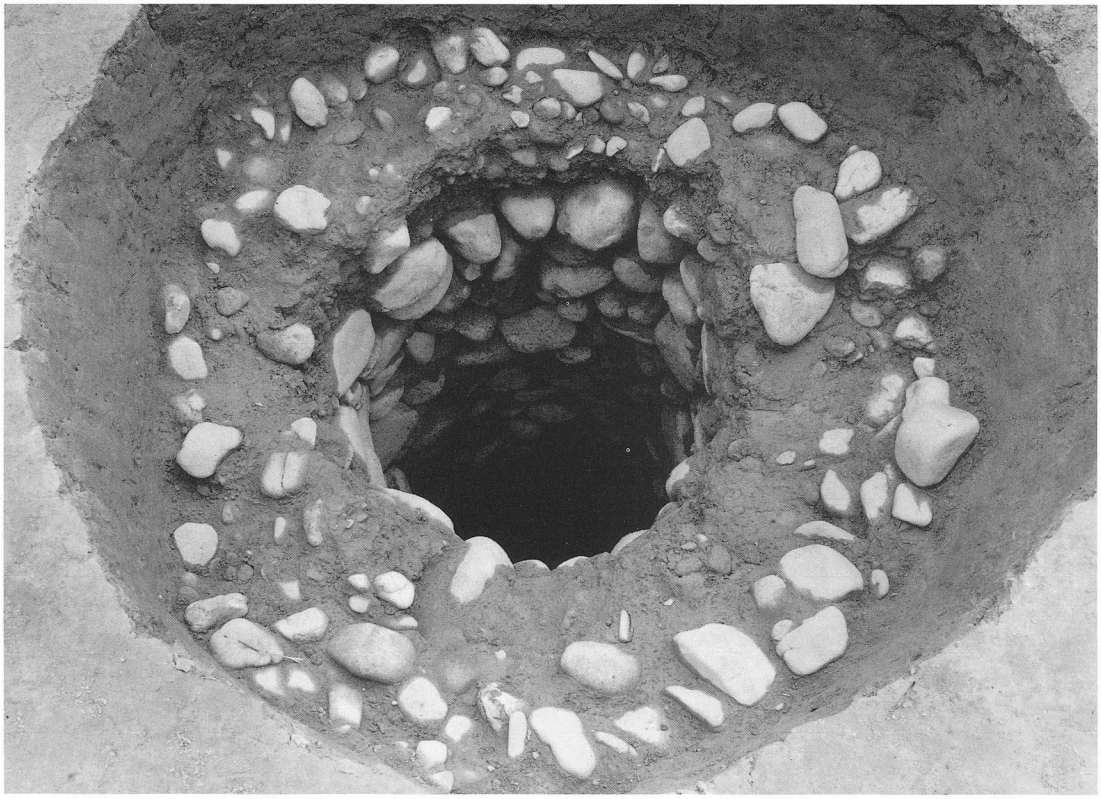
集石土壙墓全景（南から）

石組溝裏込状況・整地層断面

瓦溜め全景

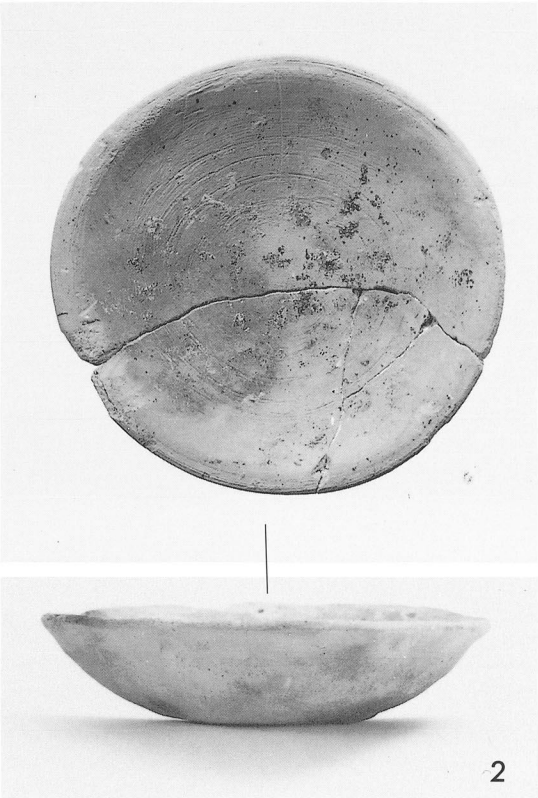
瓦溜め瓦検出状態

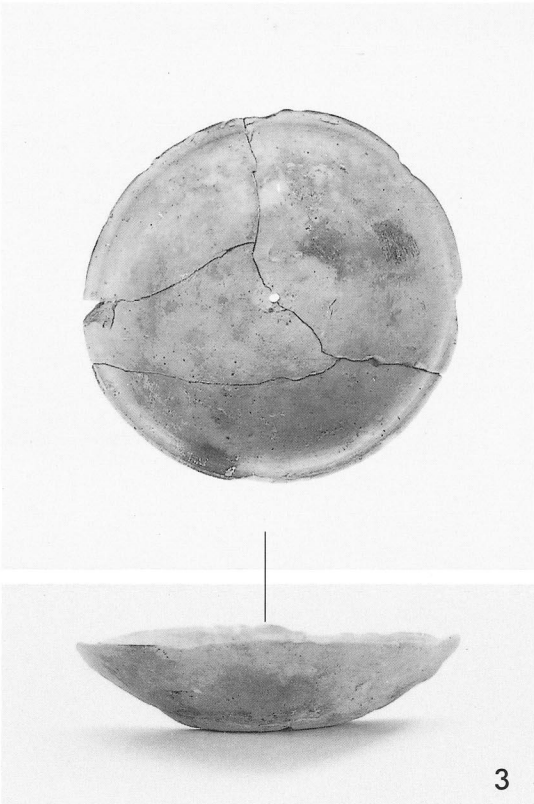
井戸・土壙全景

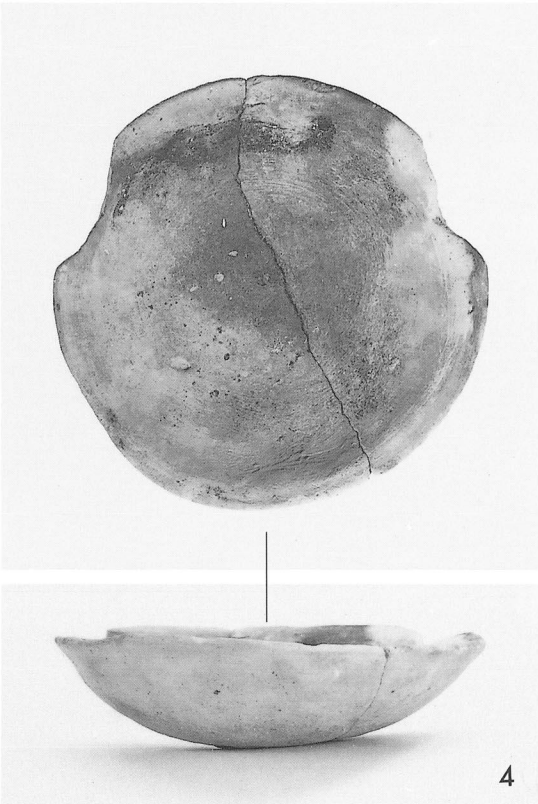


井戸全景

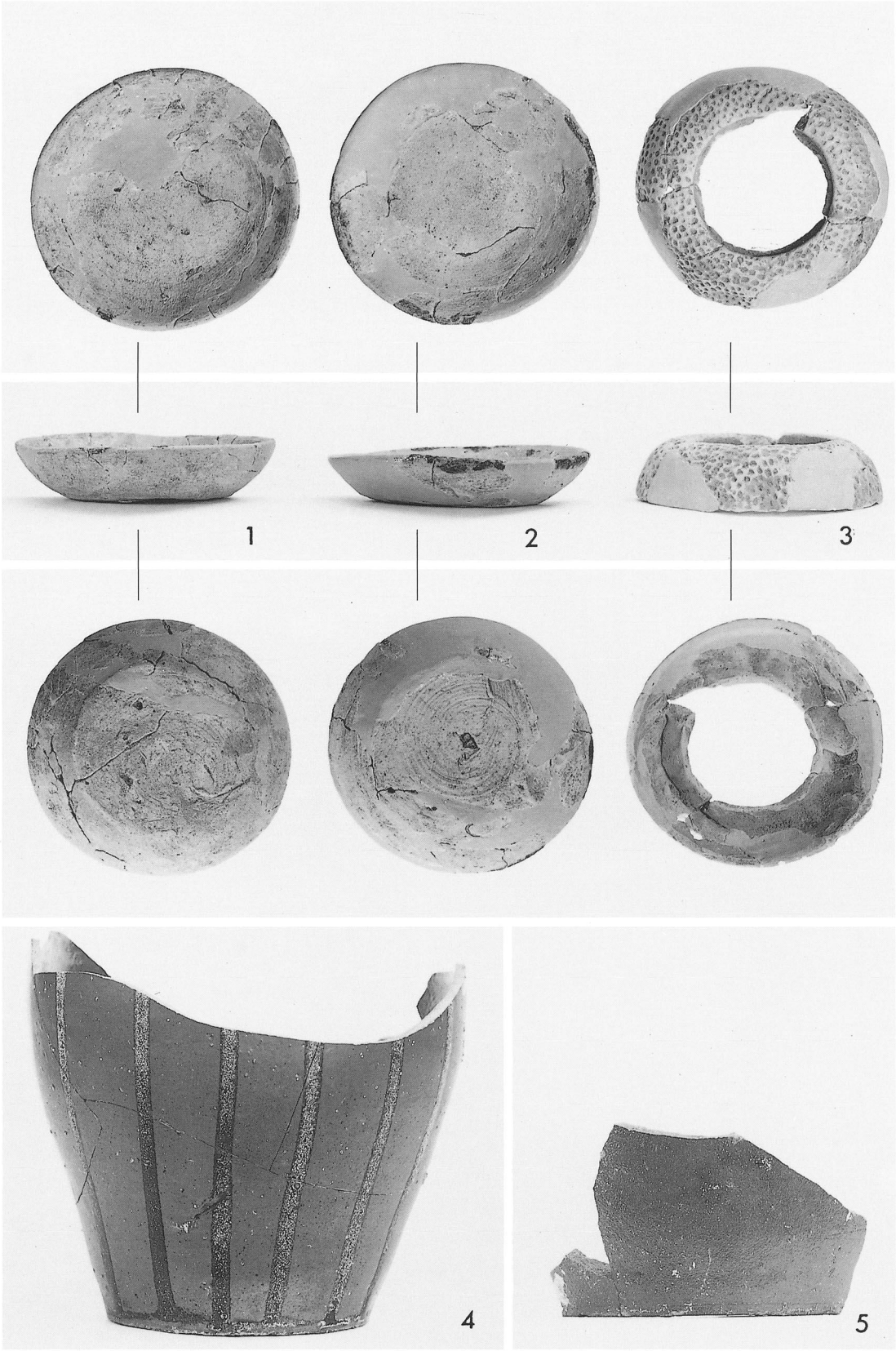
井側全景



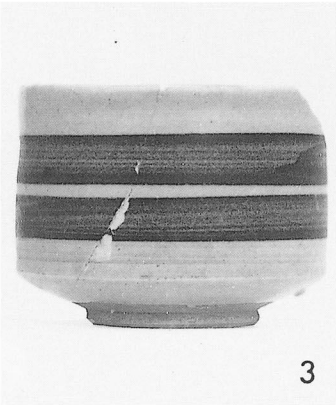


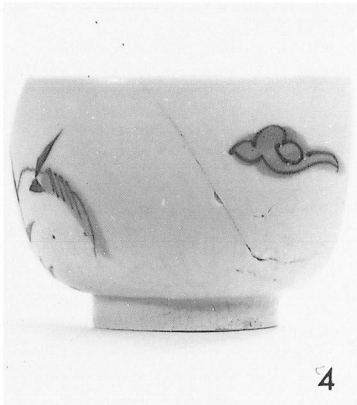


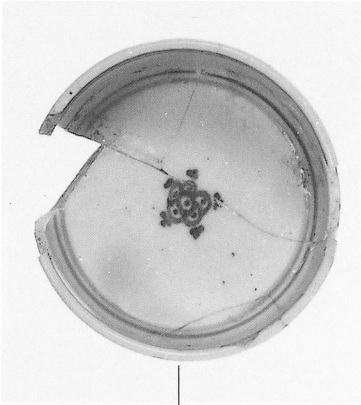
ＳＫ3001出土　土師器皿

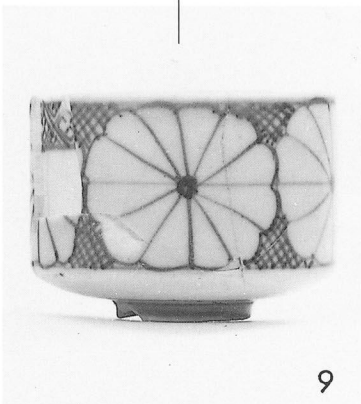


ＳＤ3001出土　　土師器皿(3)　　丹波系壺(4･5)　遊離遺物　土師器皿(1･2)

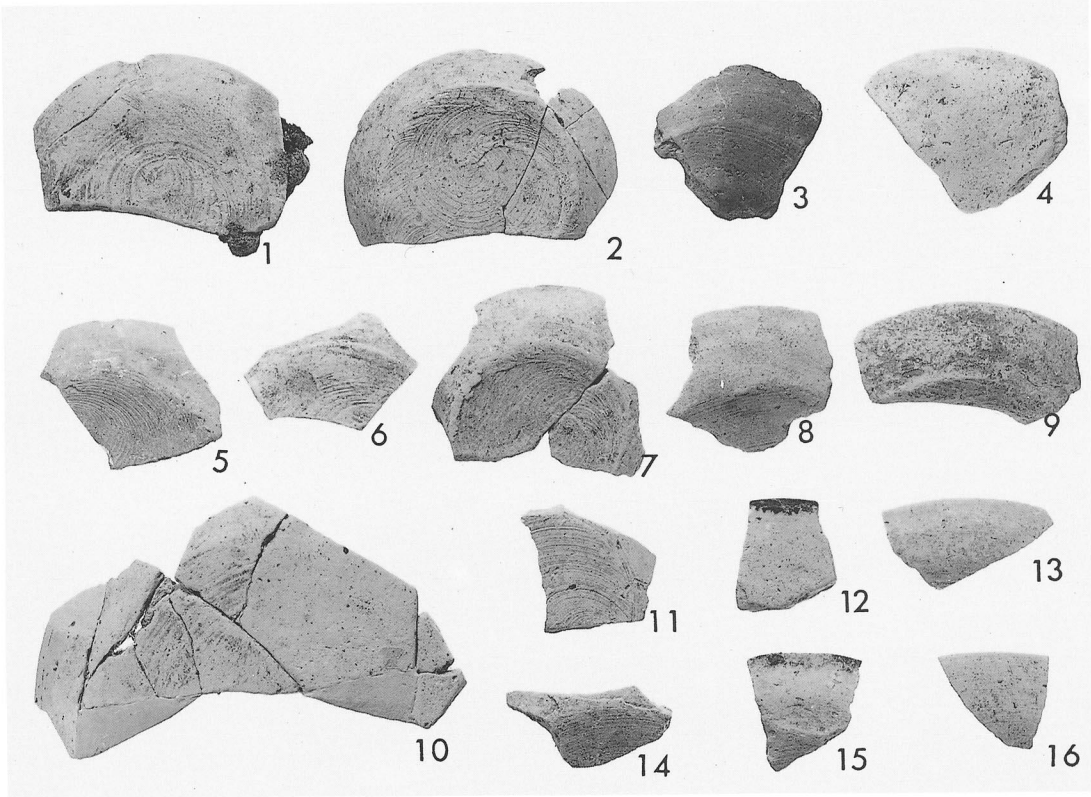


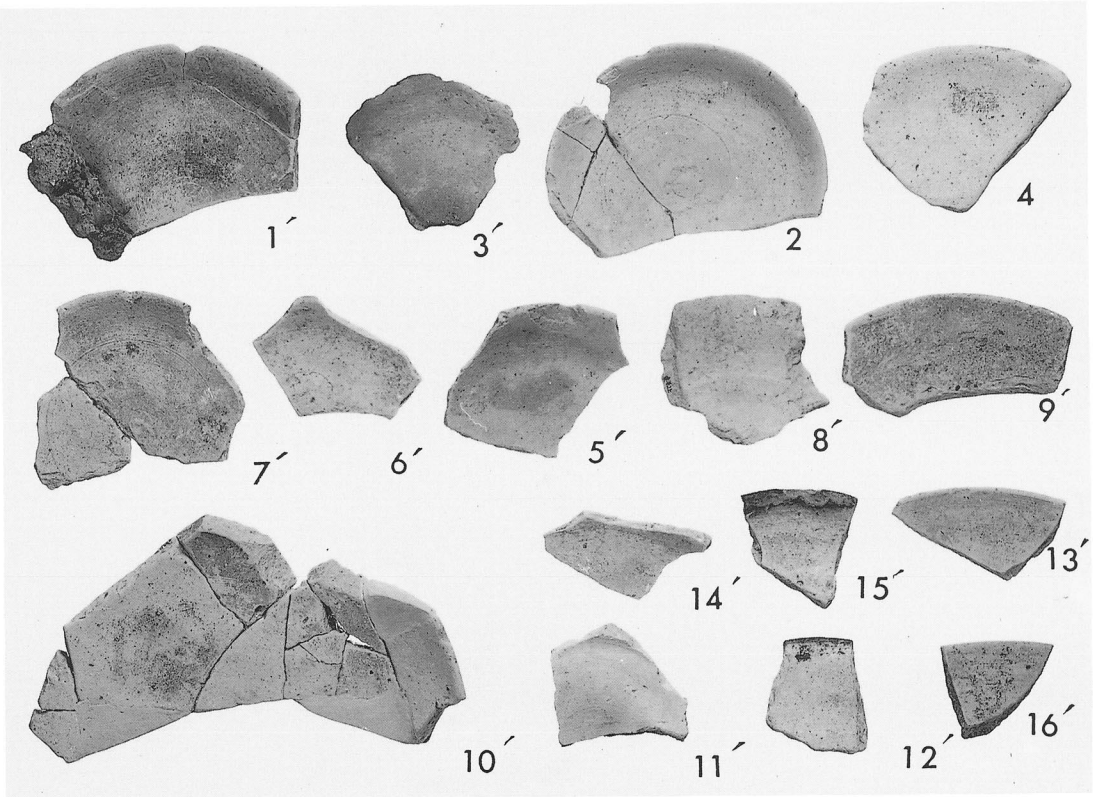






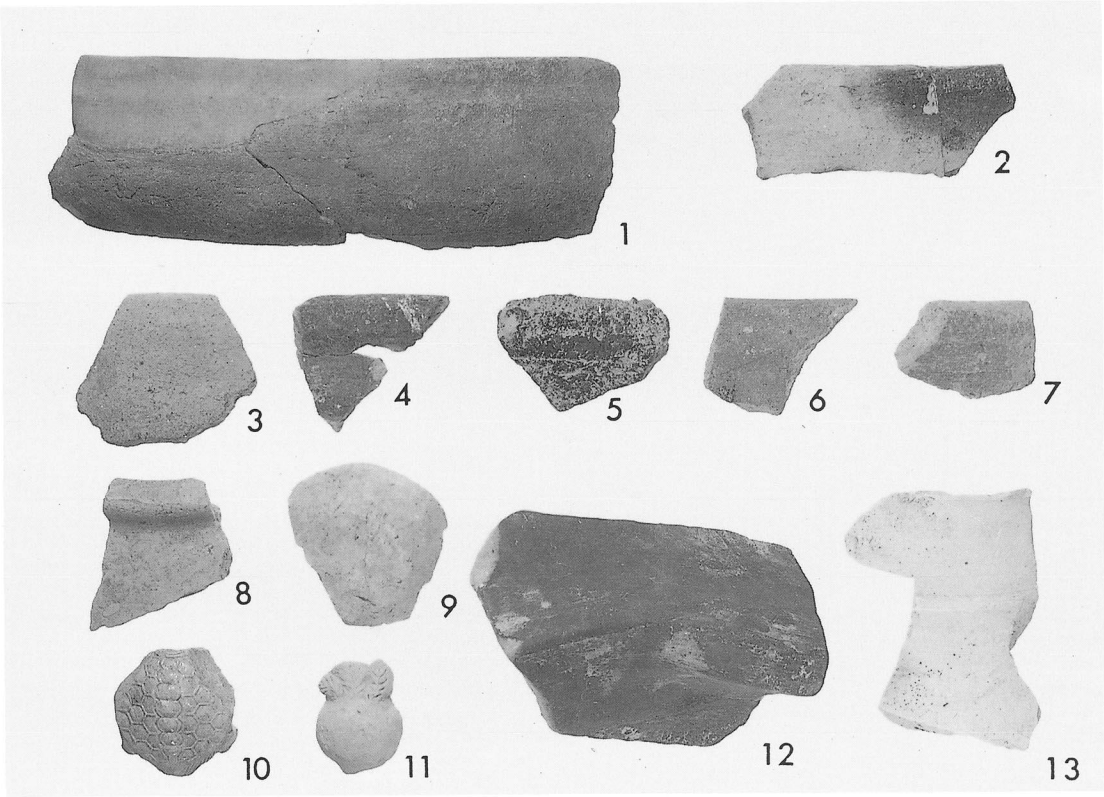
ＳＫ1001出土　土師器焙烙(1)　肥前系染付磁器仏供碗(6)　　ＳＫ1002出土　施釉陶器埦(2)
肥前系染付磁器仏供碗(7)　ＳＫ1009出土　京焼系施釉陶器埦(3)　Ｃ調査区第２遺構面整地土層中出土
肥前系染付磁器碗(4)　仏供碗(8)　遊離遺物　肥前系染付磁器碗(4)　猪口(9)

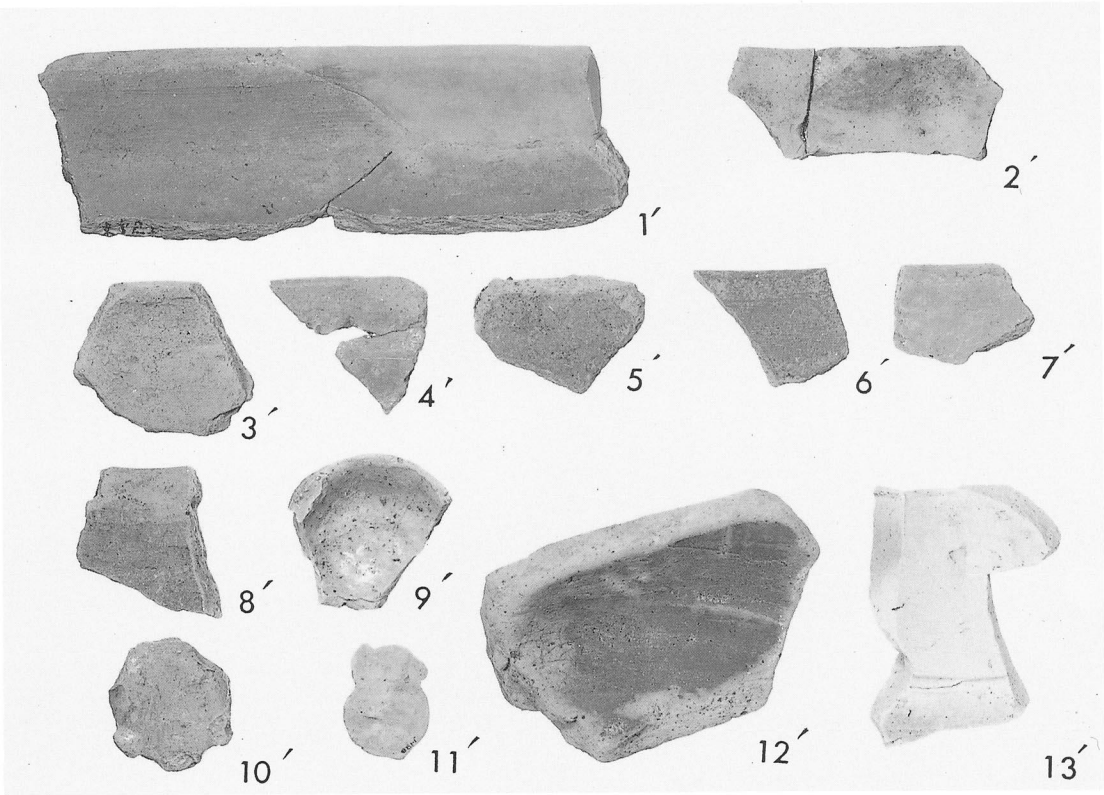




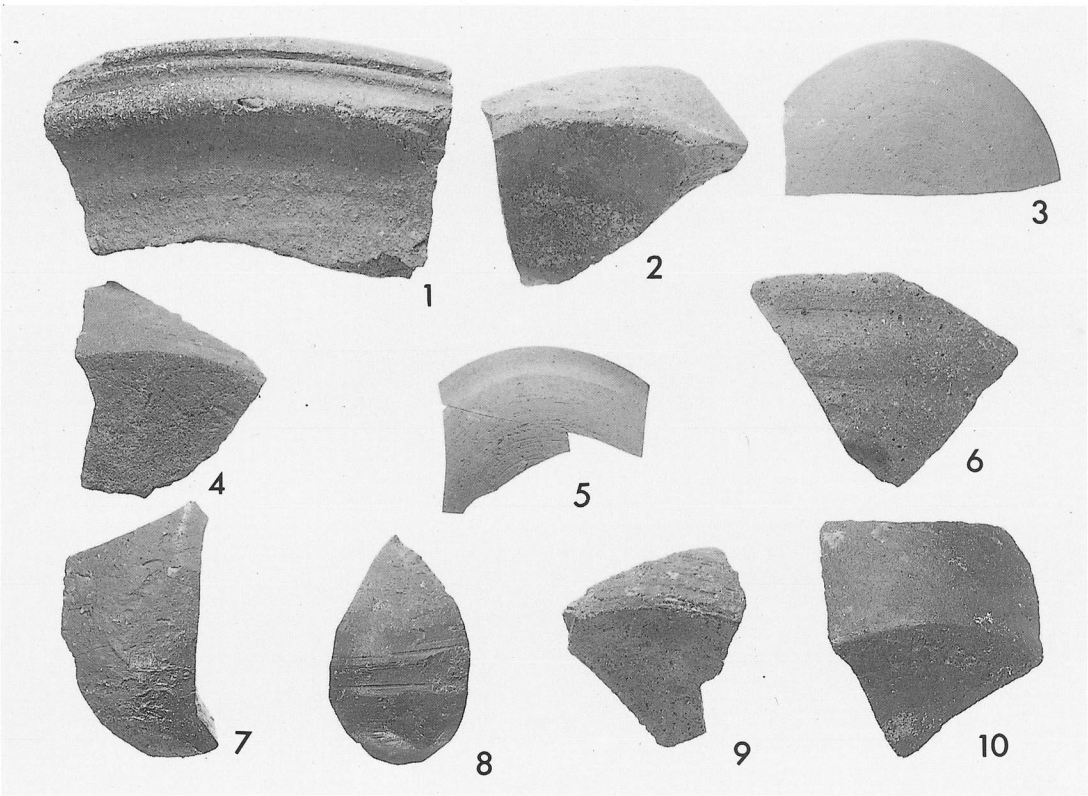
ＳＫ1002出土　土師器皿(7･3･16)　ＳＴ3001上面出土　土師器皿(4)　ＳＥ3001出土　土師

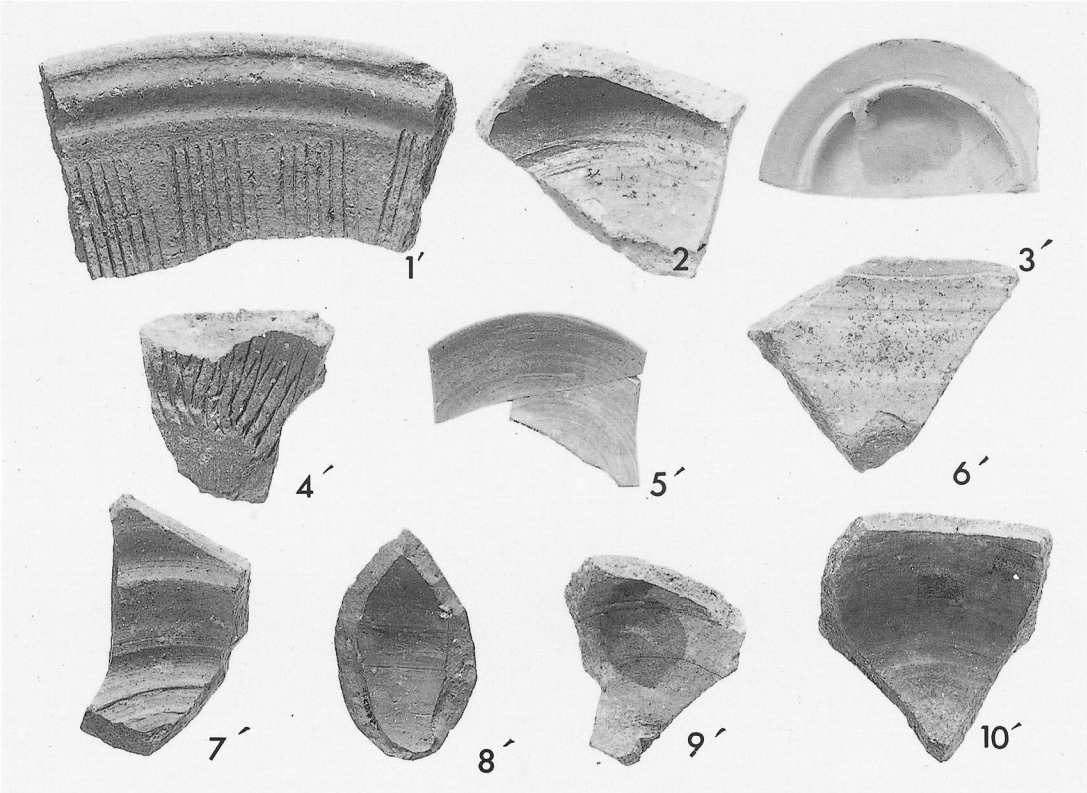
Ｃ調査区第２遺構面整地土層中出土　土師器皿(３･８･10)　遊離遺物　土師器皿(1･2･5･9･12･15)



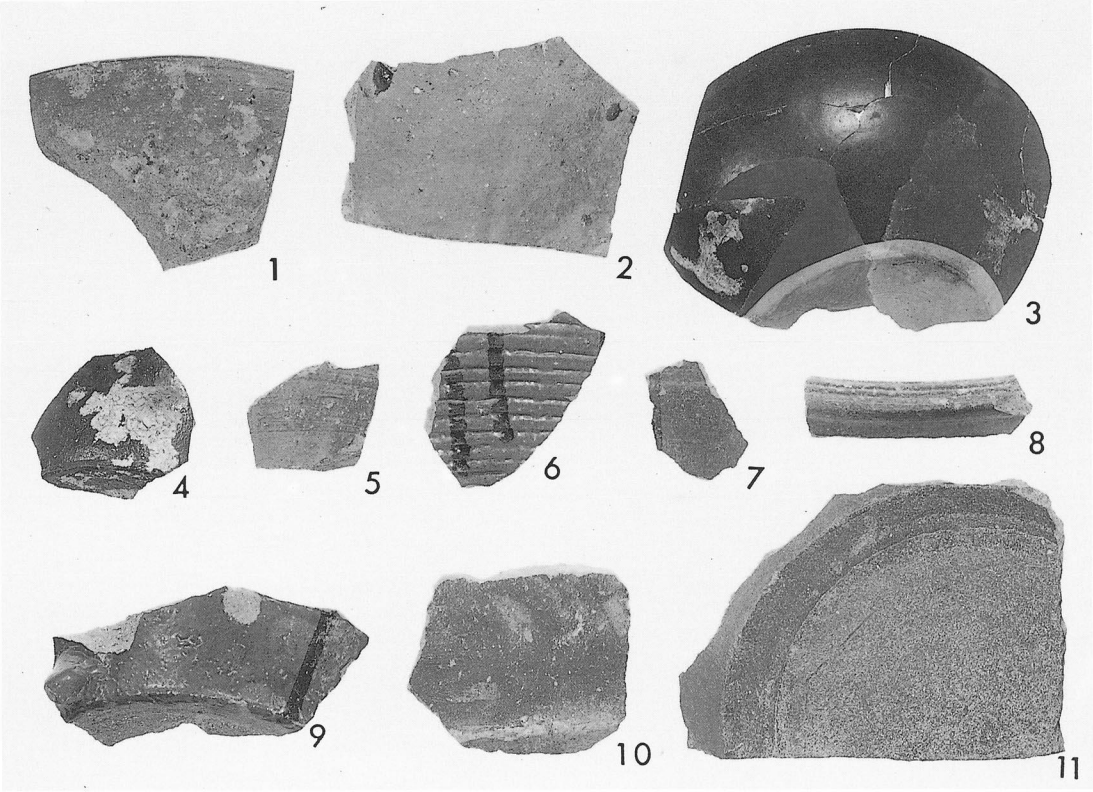


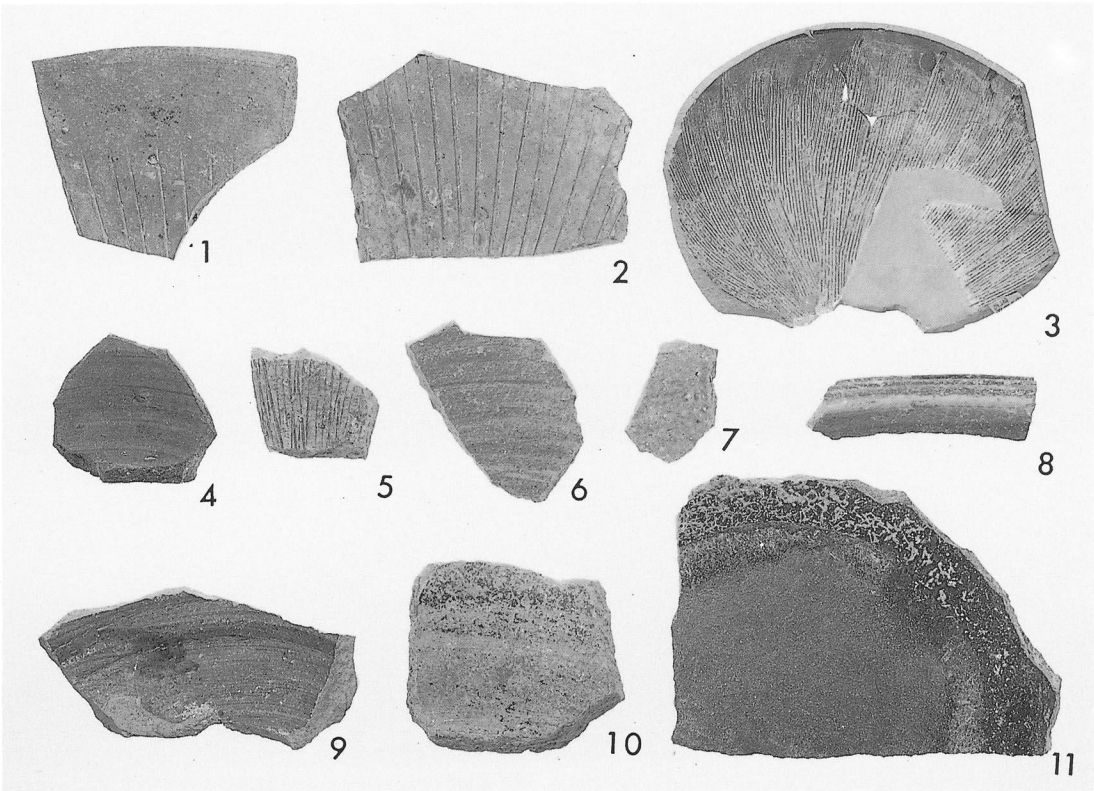
ＳＫ1009出土　土師質焙烙(3)　壺(8)　ＳＤ3001出土　桐文形土製品(11) Ｃ調査区第２　遺構面整地土層中層中出土　土師質焙烙(1)　遊離遺物　施釉陶器　灯火具(9)　亀形土製品(10)



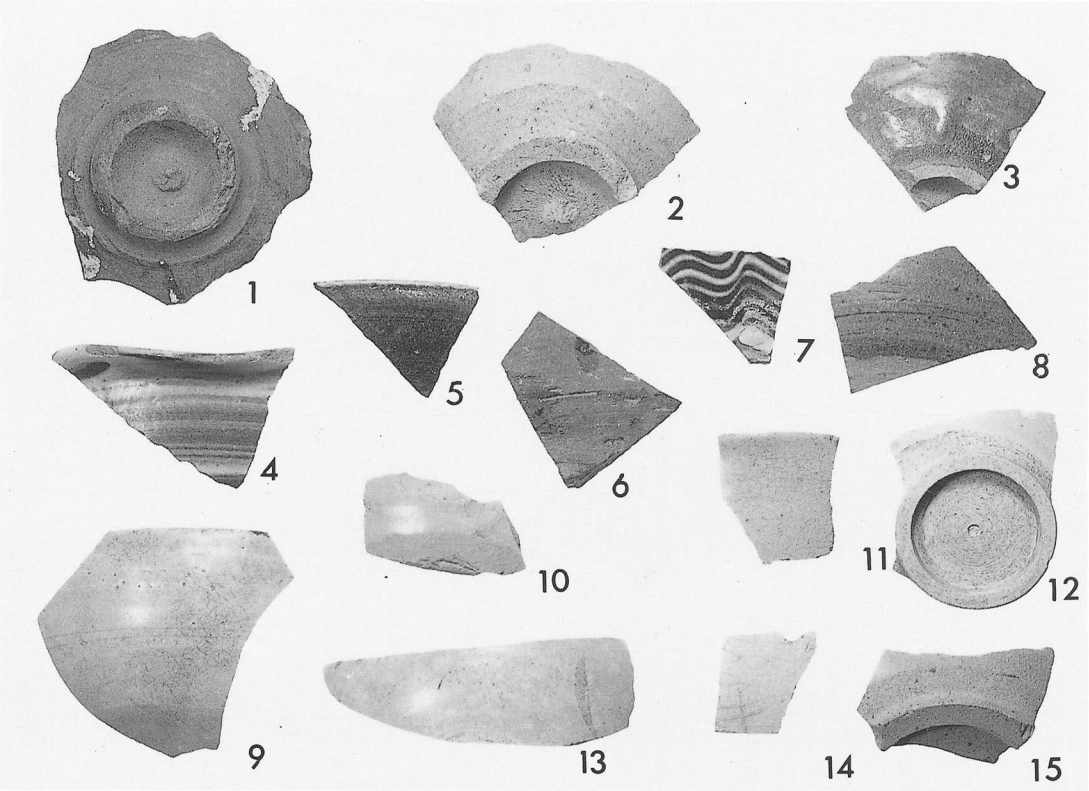


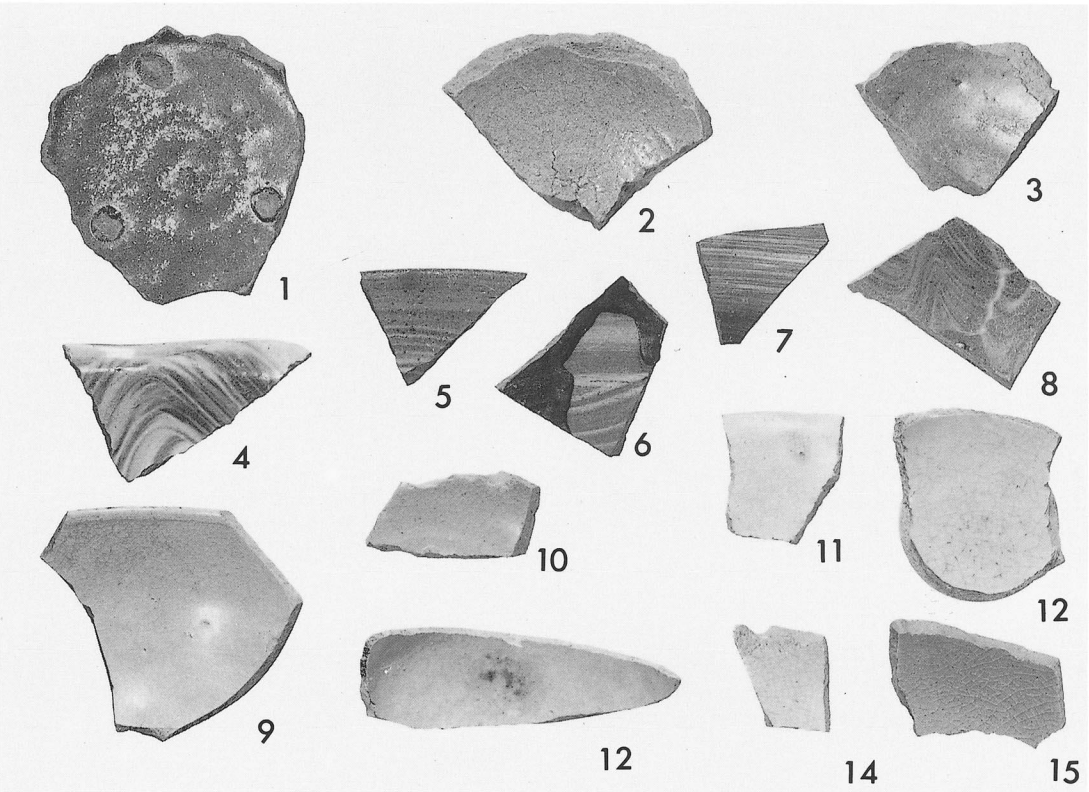
ＳＫ1009出土　備前系無釉陶器皿(5)　ＳＤ3001出土　丹波系施釉陶器壺(10)
Ｃ調査区第１遺構面整地土層中出土　擂鉢(1)　遊離遺物　無釉陶器灯明皿(3)



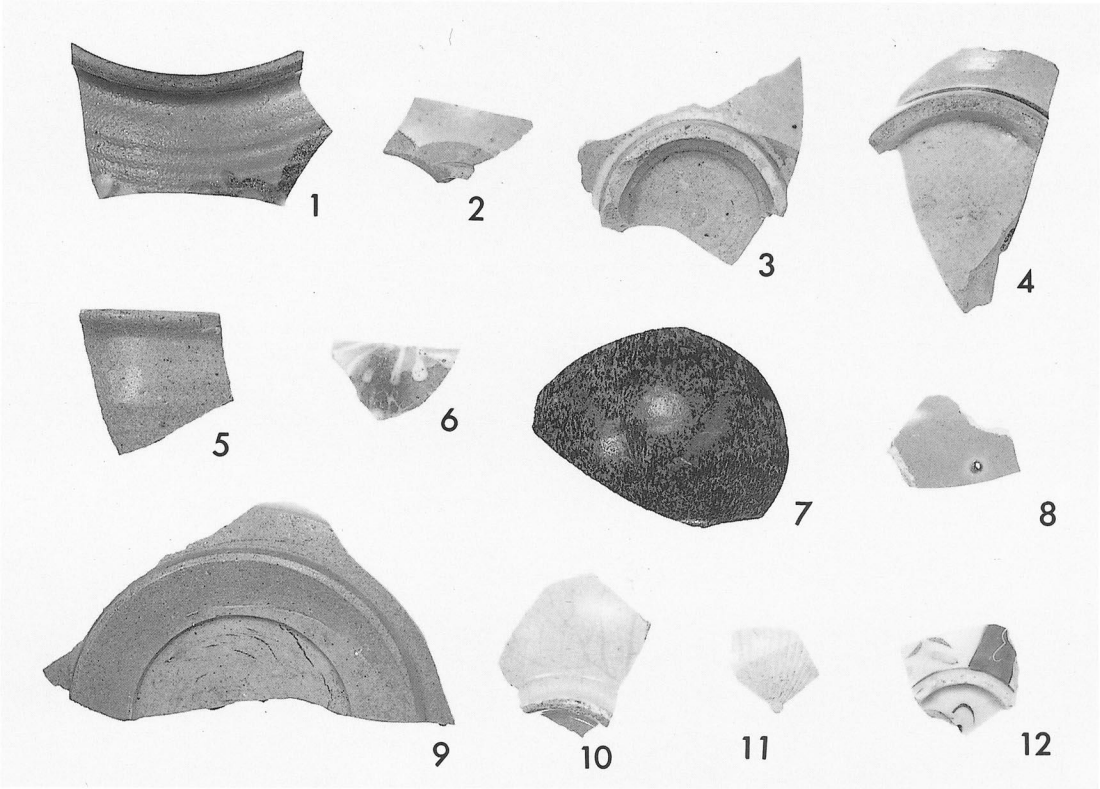


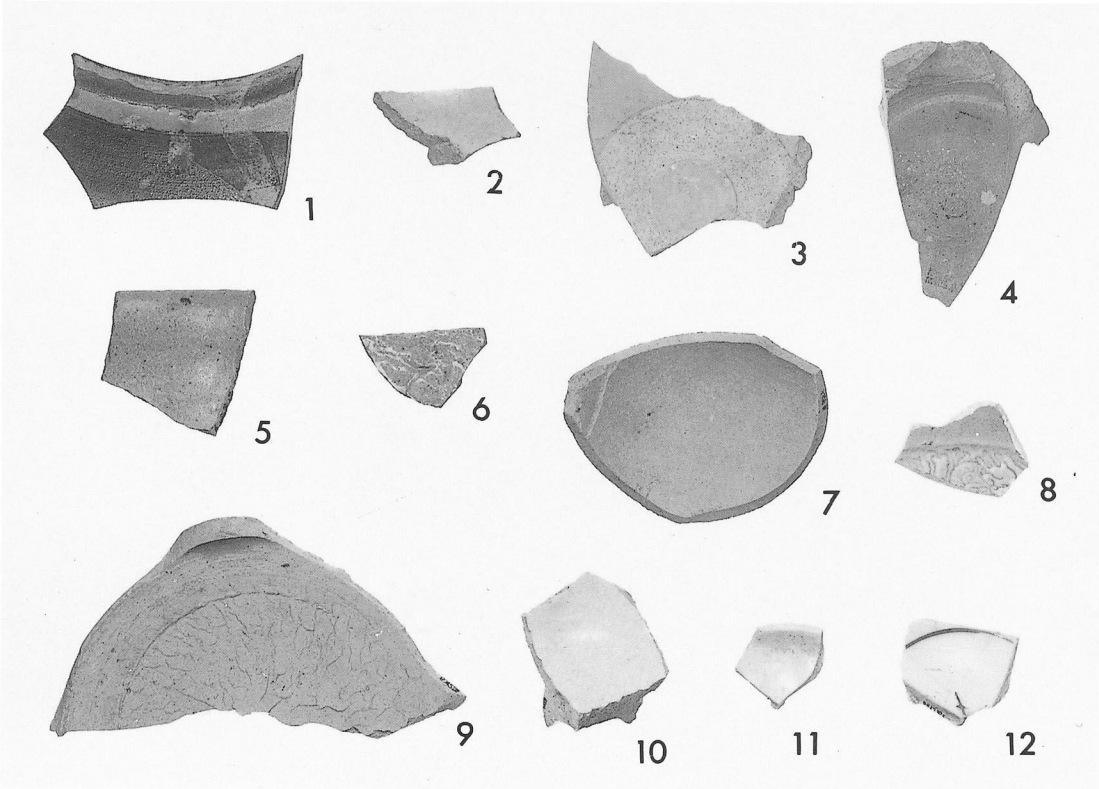
ＳＴ3001土面出土　丹波系無釉陶器擂鉢(1)　ＳＤ3001出土　丹波系施釉陶器擂鉢(3)　壺(4)
Ｃ調査区第２遺構面整地土層中出土　丹波系無釉陶器擂鉢(2)　遊離遺物　丹波系施釉陶器甕(9)



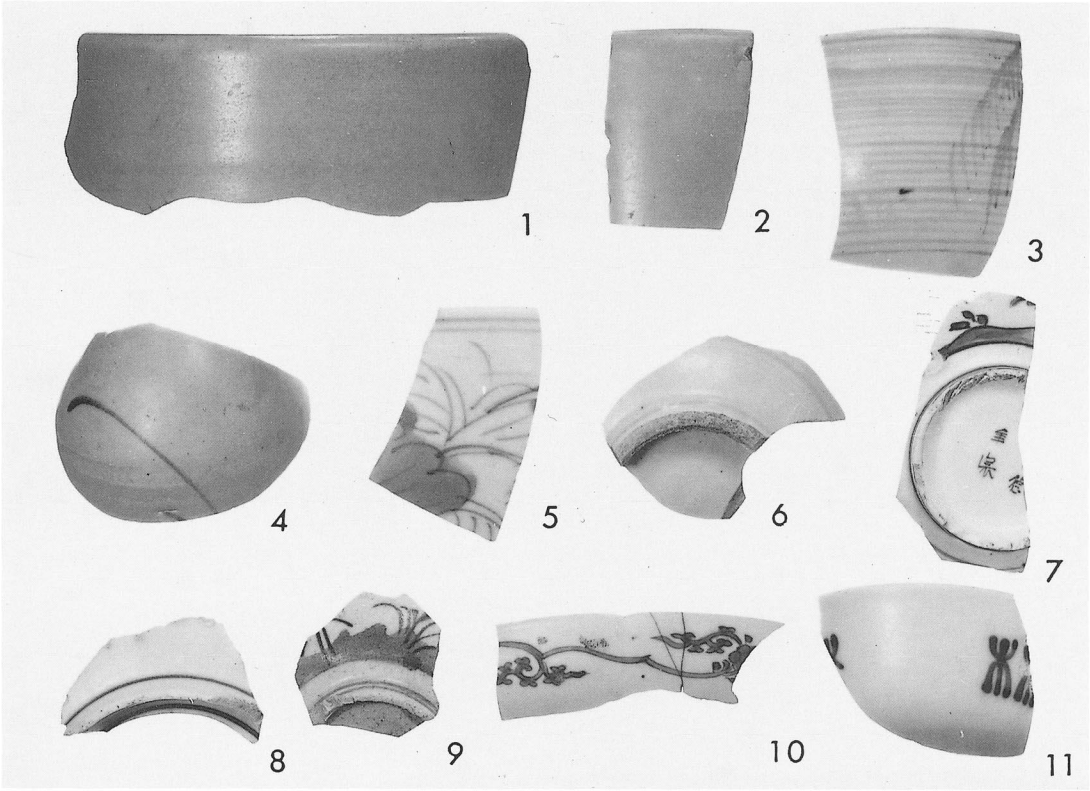


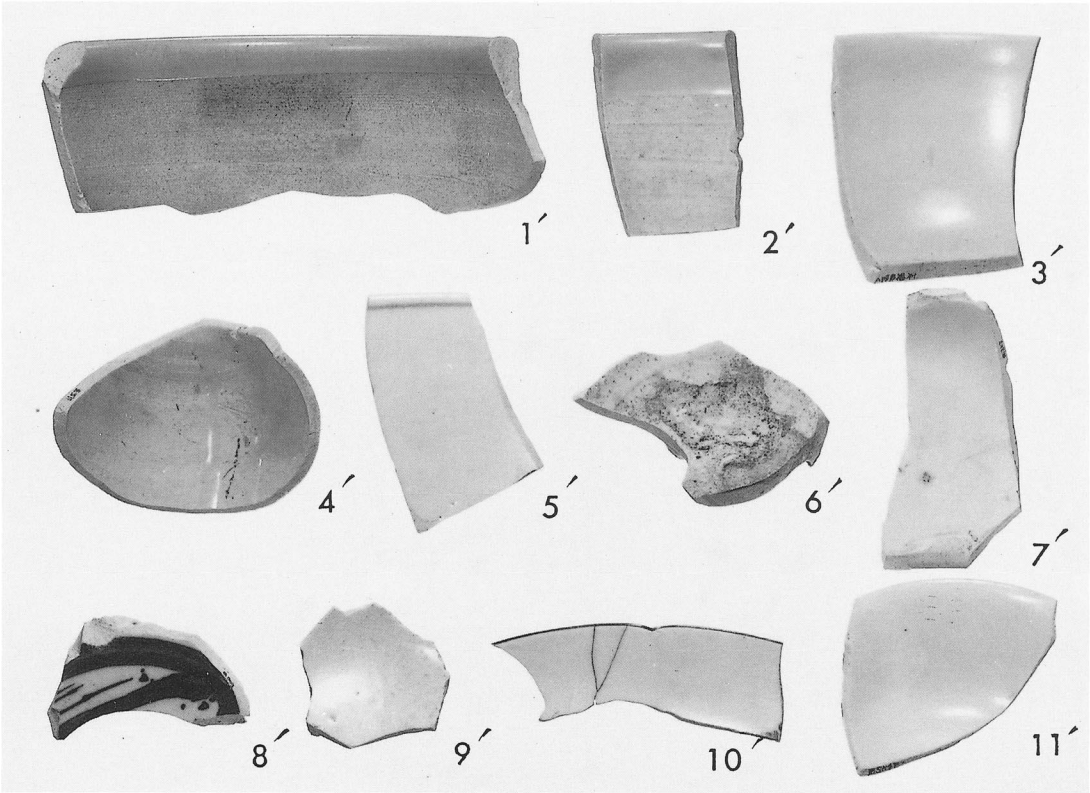
ＳＤ3001出土　京焼系施釉陶器埦(9)　瀬戸・美濃系施釉陶器埦(11)　遊離遺物　唐津系施釉陶器皿(1)　埦(2)　向付(4)　京焼系施釉陶器埦(12)　施釉陶器　埦(15)



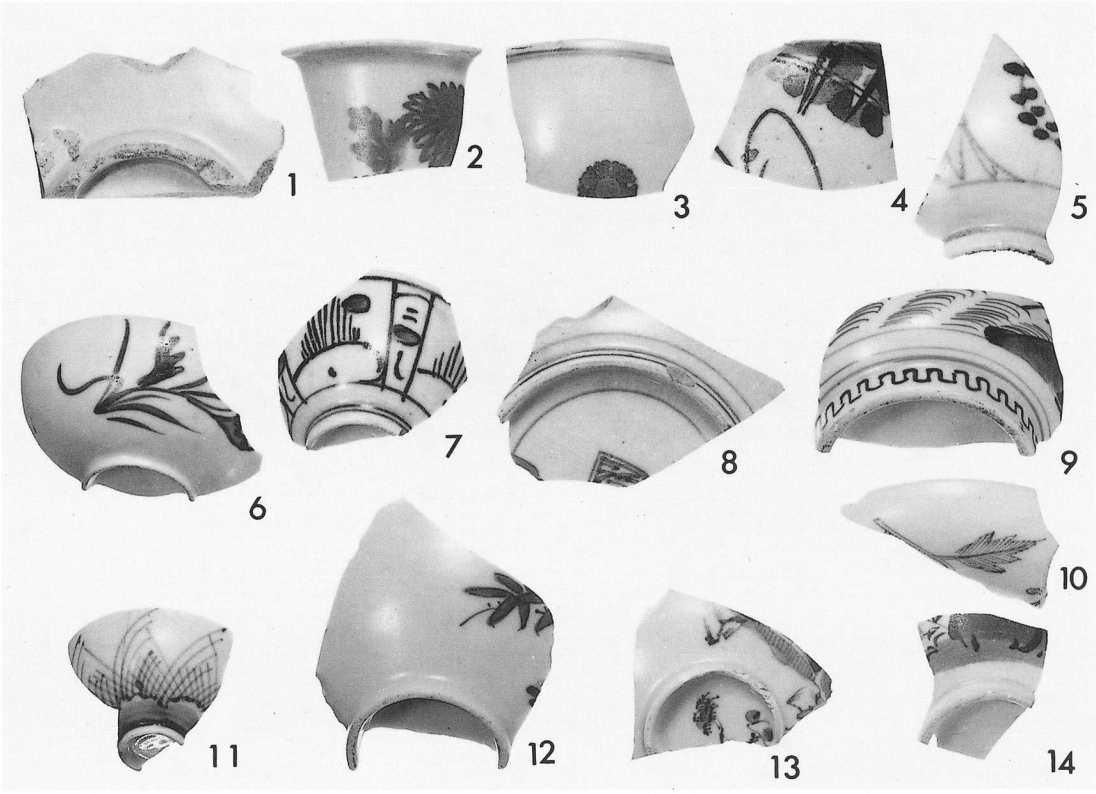


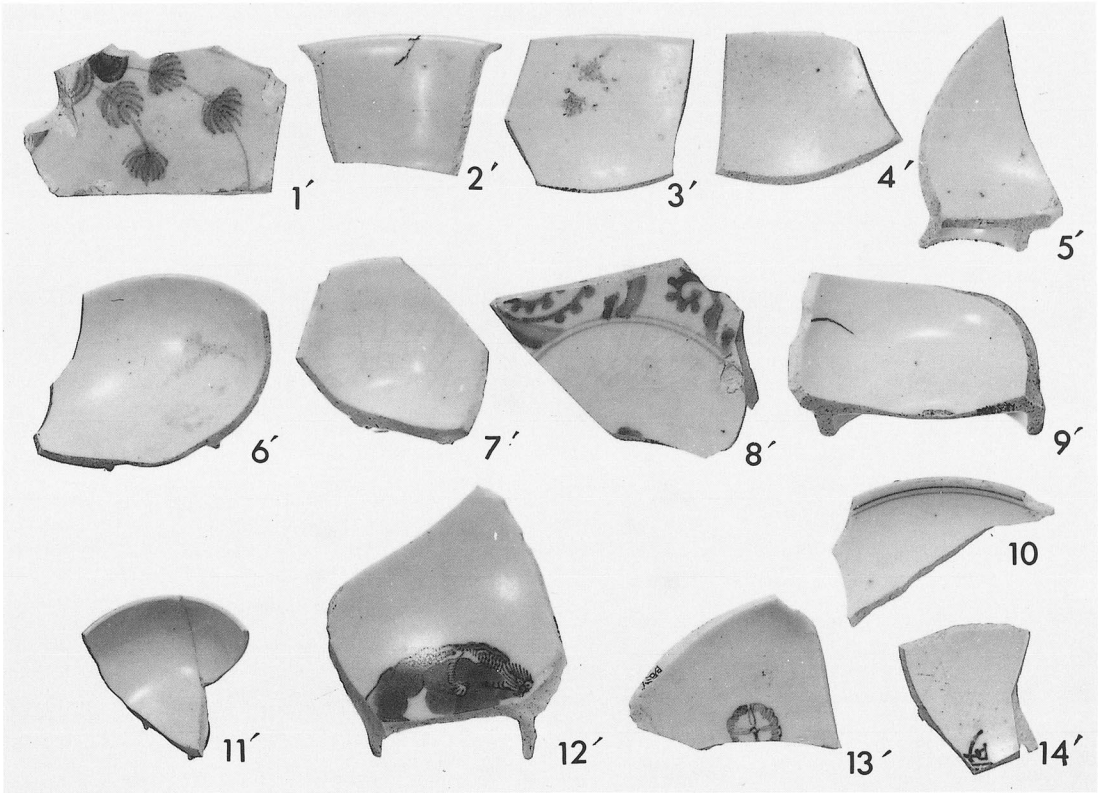
ＳＤ3001出土　丹波系施釉陶器壺(1)　ＳＫ1009出土　唐津系施釉陶器皿(3)
Ｃ調査区第１遺構面整地土層中出土　唐津系施釉陶器(5)



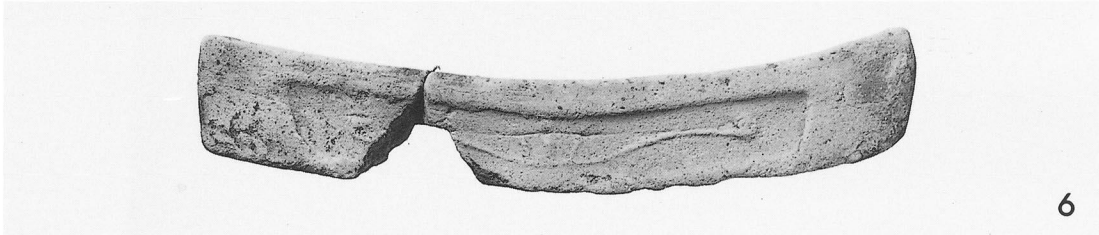


ＳＫ1001出土　肥前系染付磁器徳利(4)　　碗(7)　ＳＫ1002出土　染付磁器碗(1)
ＳＤ3001出土　染付磁器皿(10)　　Ｃ調査区第１遺構面整地土層中出土　肥前系染付磁器碗(3)
遊離遺物　肥前系青磁香炉（1･2）　染付磁器碗(9)



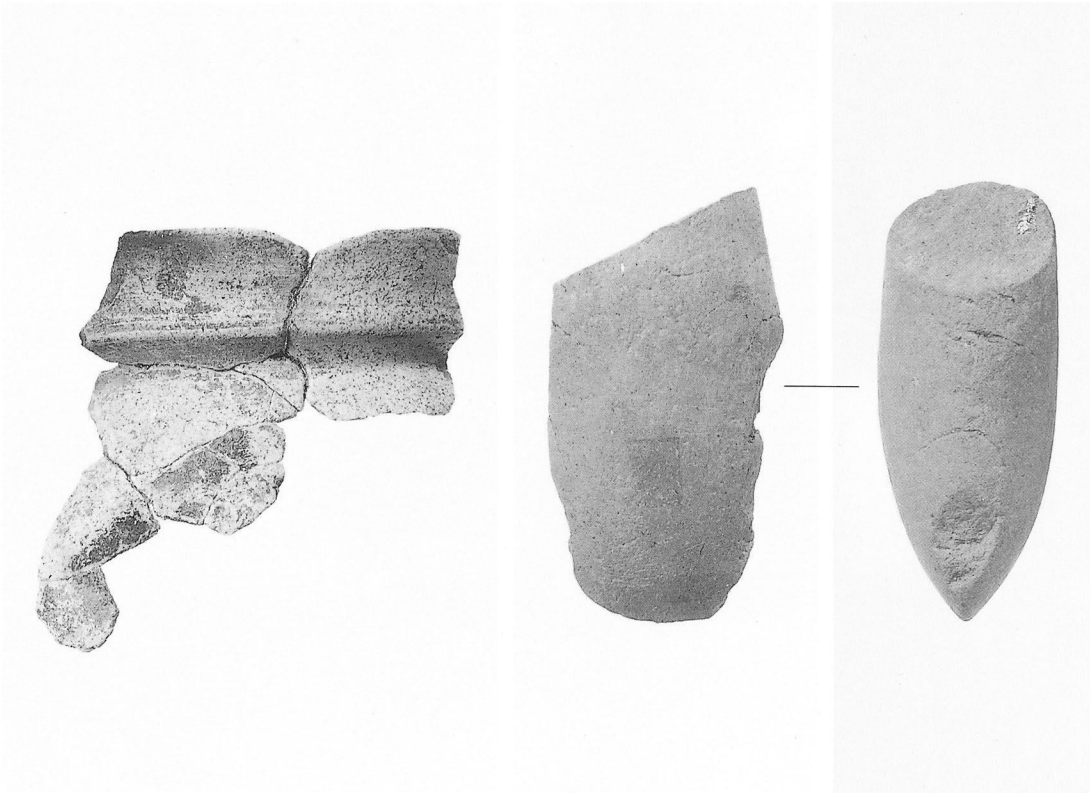


ＳＫ1009出土　肥前系染付磁器碗(2)　ＳＤ3001出土　染付磁器(12･13)　Ｃ調査区第１遺構面整地土層中出土　肥前系染付磁器碗(3･8)　東山系染付磁器(9)　遊離遺物　肥前系染付磁器小碗(6･11)　碗５　染付磁器皿１　小碗７　碗４　蓋10



瓦溜整地層出土　巴文軒丸瓦１～４　唐草文軒平瓦５・６

C調査区第1遺構面出土鉄釘



古式土師器・蛤刃石斧

兵庫県文化財調査報告書　第42冊
1987年3月31日　発行

特別史跡　姫　路　城　跡　II

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒650 神戸市兵庫区荒田町2丁目1—5
TEL (078) 531—7011

発行　兵　庫　県　教　育　委　員　会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10—1
TEL (078) 341—7711

印刷　株式会社　精　文　舎
〒652 神戸市兵庫区下沢通6丁目2—18
TEL (078) 575—4729